1　共同研究

［概　要］

「共同研究」は，歴博が大学共同利用機関として，国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり，研究課題は日本の歴史と文化に関する今日的動向を踏まえて設定されてきた。その特徴は，1981年に歴博が設置されて以来，歴史学，考古学，民俗学及び関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本を置いてきた点にある。

歴博が取り組む共同研究には，基幹研究（Principal Research Project：本館の取り組む中心的な研究），基盤研究（Fundamental Research Project：考古・歴史・民俗の資料に基づく実証的で学際的な研究）がある。また，若手研究者育成という面から，開発型共同研究（Developmental Research Project：対象は本館の任期付き助教）および共同利用型共同研究（Collaborative Access Type Joint Research：若手を主体とする外部研究者を対象とした館蔵資料および分析機器・設備を利用した研究）を行っている。この他，人間文化研究機構が実施する基幹研究プロジェクト，および，大学共同利用機関法人に属する４機構が連携して行う機構間連携・異分野連携研究プロジェクト事業を進めている。

歴博は大学共同利用機関としての共同利用性を高め，大学等の研究・教育に供するため，2017年度から開発型共同研究を除くすべての共同研究（基幹研究，基盤研究，共同利用型共同研究）の全面公募を行っている。

【人間文化研究機構基幹研究プロジェクト】　プロジェクトには「機関拠点型」，「広領域連携型」及び「ネットワーク型」がある。機関拠点型としては「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」，広領域連携型としては「地域における歴史文化研究拠点の構築」，「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」，ネットワーク型としては「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」，「北米における日本関連在外資料調査研究・活用―言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築―」を実施しており，いずれも６年計画の最終年度である。

【機構間連携・異分野連携研究プロジェクト】　４機構による異分野融合・新分野創出支援事業として，歴博（人間文化研究機構）と物質構造科学研究所（高エネルギー加速器研究機構）の連携プロジェクト，「負ミュオンによる歴史資料の非破壊内部元素組成分析」を2018年度から実施しており，最終年度をむかえた。

【基幹研究】　基幹研究は，本館の取り組む中心的な研究テーマのもとに，学際的研究を実施する共同研究である。基幹研究には①「先端的な歴史研究の開拓をめざす資料論的かつ方法論的な挑戦的研究」，②「日本の歴史と文化を広く通史的な視点に立って研究する現代的課題研究」，の２つの枠組みがあり，①については，学際的で国際的な視点を重視して歴史研究自体の革新をめざすテーマが求められる。また②については，学界をリードし，かつ学際的で，社会的状況・要請にも応えられるようなテーマが求められ，特に研究成果の高度化・可視化が必要とされる。

2018年度に発足させた全体課題「近代日本社会の形成・展開についての学際的・国際的研究」（基幹研究Ⅰ）では，ブランチ「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」が昨年度終了しており，2019年度からはじまったブランチ「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」が最終年度をむかえた。また，2019年度からはじまった全体課題「水と人間の日本列島史」（基幹研究Ⅱ）では，ブランチ「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」が最終年をむかえ，ブランチ「水をめぐる生活世界―実用と信仰の視点から」が２年目に入った。

【基盤研究】　基盤研究は，基盤研究１（課題設定型），基盤研究２（館蔵資料型），基盤研究３（歴博研究映像）からなる。基盤研究１は，考古・歴史・民俗資料の研究資源化，高度情報化を主要な目的として実施する学際的研究であり，新しい研究視点，研究手法などの研究基盤の新構築を目指す共同研究である。基盤研究２は，本館の収蔵資料を対象として研究計画を提案する共同研究である。そして，基盤研究３は，「歴博研究映像」の制作・研究活用に関する共同研究である。2021年度は，基盤研究１では「日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築」，「家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会」，「定期市からみた地域の生活文化の歴史と多様性に関する研究」の３件，基盤研究２では「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」の１件を，それぞれ開始した。いずれも３年計画である。2021年度に終了した研究課

題は,「近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会」「番方旗本家に関する総合的研究―大番士・儒者杉原家文書を中心に―」「歴博研究映像の制作・保存・活用―苧麻文化の映像記録化を中心に―」の３件である。

共同研究担当　松木　武彦・松田　睦彦・樋浦　郷子

2021年度　国立歴史民俗博物館共同研究計画一覧

研究種別	研究課題		年度(西暦)					
			'18	'19	'20	'21	'22	'23
機構基幹研究プロジェクト（'21年度まで）	（1）機関拠点型基幹研究プロジェクト	総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築(歴博研究部　准教授　後藤 真　他36名)						
	（2）広領域連携型基幹研究プロジェクト	日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築（主導機関:国立歴史民俗博物館, 国立国語研究所）地域における歴史文化研究拠点の構築（歴博・民俗研究系　准教授　川村清志　他23名）						
		異分野融合による総合書物学の構築（主導機関：国文学研究資料館）古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究（歴博・歴史研究系　教授　小倉慈司　他31名）						
	（3）ネットワーク型基幹研究プロジェクト日本関連在外資料調査研究・活用事業	ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―（歴博・情報資料研究系　教授　日高 薫　他35名）						
		北米における日本関連在外資料調査研究・活用―言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築―（代表国立国語研究所　准教授　朝日祥之）（歴博・民俗研究系　准教授　松田睦彦　他８名）						
基幹研究	（1）近代日本における産業・労働の展開とジェンダー（歴博・歴史研究系　准教授　樋浦郷子 他11名）							
	（2）水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成（歴博・考古研究系　教授　松木武彦　他12名）							
	（3）水をめぐる生活世界―実用と信仰の視点から―（歴博・民俗研究系　教授　関沢まゆみ　他６名）							
基盤研究	（4）近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会（同志社大学歴史資料館・教授　若林邦彦　他６名）（館内　准教授　上野祥史）							
	（5）古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究（歴博・考古研究系　教授　高田貫太　他13名）							
	（6）日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築（歴博・民俗研究系　准教授　青木隆浩　他14名）							
	（7）家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会（ものつくり大学技能工芸学部　教授　土居浩　他９名）（館内　教授　山田慎也）							
	（8）定期市からみた地域の生活文化の歴史と多様性に関する研究（千葉県立中央博物館企画調整課　課長　島立理子　他９名）（館内　教授　内田順子）							
	（9）秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究（東京学芸大学次世代教育研究センター准教授　下田誠　他10名）（館内　准教授　上野祥史）							
	(10) 映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究―制作とアーカイブスの実践的方法論の検討（京都産業大学文化学部　教授　村上忠喜　他12名）（館内　准教授　川村清志）							
	(11) 番方旗本家に関する総合的研究―大番士・儒者杉原家文書を中心に―（東洋英和女学院大学　非常勤講師　三野行徳　他13名）（館内　准教授　福岡万里子）							
	(12)『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究（学習院大学文学部　教授　家永遵嗣　他14名）（館内　准教授　田中大喜）							
	(13) 高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究―額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に―（早稲田大学　准教授　下村周太郎　他13名）（館内　教授　仁藤敦史）							
	(14) 歴博研究映像の制作・保存・活用―苧麻文化の映像記録化を中心に（多摩美術大学　非常勤講師　春日聡　他６名）（館内　教授　内田順子）							

共同利用型共同研究（当該年度実施）	館蔵資料利用型	南北朝時代から室町時代前期における廣橋家の漢籍環境の研究（中央大学文学部 兼任講師 髙田宗平/歴博・歴史研究系 教授 小倉慈司）						
		島津氏一族発給文書の比較と島津氏関係史料の収集による中世前期武士団の研究（埼玉大学教育学部　准教授　清水 亮/歴博･歴史研究系　准教授　田中大喜）						
		『兼仲卿記』紙背文書にみる中世伊勢神宮領荘園の研究（東京大学史料編纂所学術支援職員　永沼菜未/歴博研究部　准教授　荒木和憲）						
		歴史資料画像と言語表現の対応の学習（京都大学学術情報メディアセンター教授　森 信介/歴博研究部　准教授　後藤真）						
		日記資料から読み解く高等女学校生の戦争および敗戦経験の検証（明治学院大学教養教育センター 専任講師 田中祐介/歴博研究部　教授　三上喜孝）						
		洛中洛外図屏風を用いたAR環境教育キット作成に向けた探索的調査（大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター　助教　堀さやか/歴博・情報資料研究系　教授　大久保純一）						
	分析機器・設備利用型	鉛同位体比分析から古代東アジアにおける馬具生産技術を明らかにする（筑波大学人文社会系　日本学術振興会特別研究員（PD）　村串まどか/歴博・情報資料研究系　教授　齋藤努）						

【機構基幹研究プロジェクト】

（1）機関拠点型基幹研究プロジェクト
総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築
2016～2021年度
（研究代表者　後藤　真）

1．目　的

本研究の最終的な目的は，総合資料学の構築にある。総合資料学とは，既存の学問の枠を超えた資料学の方法の構築である。本研究課題は，多様な「モノ」資料を時代・地域・分野等の視点で分類・統合し，高度な共同利用・共同研究を実現する。また，従来から実施してきた人文･社会科学と自然科学の両面からの分析に加えて，さらに，様々な学問分野からのアプローチによる史実に基づいた日本歴史の再構築，歴史を通した様々な分野の課題発見や解決に資するとともに，一つの資料を多様な分野で研究することによって異分野連携・融合を図り，新たな知の発見につながる「総合資料学」を創成するものである。大学を含めた研究機関において日本歴史文化に関する研究資源を活用できる基盤を構築する。

本研究課題は，機構の中期目標・中期計画の「国内外の大学等と連携して，総合資料学の創成と大学・博物館資料の相互利用環境の整備を図る」という方向性，及び機構の目指すべき方向性の「機構内機関に蓄積された研究資料を有効に活用することができるとともに，資料にもとづく研究方法など新たな研究システムを提供することによって，大学の研究機能の強化に貢献するとともに，教育プログラムを提供すること等によって大学の教育の機能強化に貢献する」と合致したものである。

2．今年度の研究計画

令和３年度については，複数の資料情報と協定に基づく大学間ネットワークをもとに，大学･博物館･地域のデータネットワークおよび人の研究ネットワークモデルを構築する。あわせて，文理融合型の研究モデルを構築する。海外の大学と連携し，オンラインを含む国際会議を開き若手研究者が実施した総合資料学における成果を広く展開するとともに，産官学連携による地域資料の新たな保全と地域の人と共に学ぶ研究の方法を提案する。これにより国際・地域の両面に向けた新たな資料学の構築を行う。最終的な成果書籍の刊行を行い構築された「総合資料学」のモデルを提示する。構築された人文情報基盤については，今後の持続性を検討し，大学共同利用機関として幅広い共同利用に資するものとする。

最終的な成果として，文理融合研究が可能な研究者・歴博と大学の間の組織的ネットワーク・人文情報基盤・産官学による地域連携のモデル・国際的な日本資料情報の展開が挙げられる。これらの連携とネットワークは，単に歴史資料を理系へ，歴博から大学へ，大学から地域へ，研究者から市民へという一方向性ではなく，すべてがフラットに，ともに分野や立場を超えて融合的に学ぶモデルとして構築する。新型コロナウイルスによる社会的情勢の変化を受け，特にデジタルデータ基盤の特性である「フラットなネットワーク」という点を十全に活かすモデルとし，

この研究できる「場」を総合資料学の最終的な成果として位置づける。
総合資料学の複数の成果を活かし，第４期以降に向けた教育研究組織整備へとつなげ，歴博と複数大学によるより高度な歴史学・人文学の構築へと結びつける。

３．今年度の研究経過

①研究会

共同利用の文理融合型情報基盤を構築するための人文情報ユニット（10月・12月），情報基盤を活用した文理融合型研究を行う異分野連携ユニット（７月・10月・２月），研究成果を活用する地域連携・教育ユニット（１月・３月）の研究会を実施した。また７月にはオンライン及び奥州市会場のハイブリッド形式で「学術野営2021 in 奥州市」を実施，これに関連するイベントとして５～６月に「火付けの会」「火起こしの会」として当日議論する３つのテーマについての研究会を開催した。12月にはバンドン工科大学との共催で人文情報ユニットに関するオンラインワークショップ” Digital archiving of artifacts related to everyday life and culture”を，３月にはオンライン及び都内会場のハイブリッド形式で全体集会を開催して今年度までの活動成果を報告した。これら研究会・国際研究集会等は計14回である。

②国内外での研究発表

参加を予定したもののコロナ対策により延期・中止された学会等は多数に上ったが，特筆すべきものとして，CIDOC Conference 2020（オンライン，12月），49th joint meeting of the CIDOC CRM SIG, 42nd FRBR SIG and ISO/TC46/SC４/WG９（オンライン，３月）にて総合資料学に関する発表を行った。

③成果論文，成果論文を含む書籍など

今年度は成果書籍については発行がなかったが，共同研究員全体としては，複数の研究成果を出すに至った。

④学術交流協定

今年度までに協定を締結した大学とは，共同研究や大学院教育だけでなく，地域資料の保全や活用のための事業においても連携した。

⑤共同研究の公募

総合資料学奨励研究の公募を行い，計７件を採択し，公募型共同研究を実施した。その成果は３月に全体の成果活動報告において公表した。

主な成果としては，東京大学地震研による災害記録の文理融合的な研究をはじめ，長野大学の成田空港問題に関する現代資料の記録方法，九州保健福祉大学や資料消失への対応と公開手法の検討，琉球大学における古写真プロジェクトと地域との連携など，今後の総合資料学の手法に反映しうる成果を得ることができた。とりわけ，総合資料学が求めてきた主要テーマである，日本歴史資料の保全に関し，近代資料を中心に研究が集まったことは重要な成果である。

⑥広報

専用Webサイトを運営し，研究会活動や国内外の研究発表については全てWeb上での活動報告を行った。またニューズレター（日英併記，第11号・第12号）を引き続き作成し，既刊号はWebサイトでの掲載を行うなどした。

加えてAAS2022（Association of Asian Studies，３月）で，日本貿易出版を含む日本国内の出版社数社と合同でバーチャルブースを出展し，「総合資料学の創成」プロジェクトの概要やkhirinデータベースなどプロジェクトの成果を展示，国内外の研究者へのアピールに努めた。

⑦その他（教育・若手育成・共同利用等）

総合資料学の長期的な発展を見据え，大学院生１名を対象として，人文情報学の実践的な若手研究者教育プログラムを実施した。

総合資料学の情報基盤システムを，館外からのフィードバックをふまえ改修するとともに，大学所蔵資料に限らない地方資料の可視化・共同利用化に向けた協議を進め，複数の自治体や企業と協定・覚書を締結した。加えて国際研究集会（３月）等を通じて情報基盤の国際化のための議論を深め，大学を含む複数の国内外の研究機関等とも連携する態勢を強化した。

○研究会の開催

人文情報ユニット研究会　第１回（2021年10月20日　於：オンライン）

人文情報ユニット研究会　第２回（2021年12月13日　於：オンライン）

人文情報ユニット・オンラインワークショップ” Digital archiving of artifacts related to everyday life and culture”（2021年12月16日　於：オンライン）

異分野連携ユニット研究会　第１回（2021年７月１日　於：オンライン）

異分野連携ユニット研究会　第２回（2021年10月11日　於：オンライン）

異分野連携ユニット研究会　第３回（2022年２月23日　於：オンライン）

地域連携・教育ユニット研究会　第１回（2022年１月８日　於：オンライン）

地域連携・教育ユニット研究会　第２回（2022年３月６日　於：オンライン）

学術野営2021 in 奥州市　（2021年７月２・３日　於：オンライン・えさし郷土文化館）

学術野営2021 in 奥州市関連イベント「合同会社AMANE提案火付けの会：学術研究活動の経済価値について」（2021年５月28日　於：オンライン），「地域関連提案火付けの会：地域における資料継承の現実と展望～民具資料の“緩やかな保存”の可能性」（2021年６月５日　於：オンライン），「合同会社QMQNE提案火付けの会：学術研究活動の経済価値について②」（2021年６月22日　於：インライン），「歴博提案火起こしの会：地域資料調査における研究者と地域社会とのコミュニケーション」（2021年６月30日　於：オンライン）

2021年度全体集会（2022年３月16日　於：オンライン・フクラシア丸の内オアゾ）

○研究の進捗状況

総じて，コロナ対策による延期・中止した事業があるにもかかわらず順調に進展している。調査研究活動は，文理融合型研究や，地域資料の保全・活用に関する研究実践を軸に，順調に進展しており，研究成果の公開・可視化についても同様に協定大学との多様な共同研究にかかる報告書の刊行，国際研究集会・シンポジウム等の実施，大学院教育への展開等，順調に進展しているといってよい。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信は，従来のウェブサイト運営，リーフレット・ニューズレター（日英併記）の配布に加え，複数の海外の大学との国際ワークショップが新たな発信の形としても順調に機能している。また，若手研究者の人材育成の取組みも，若手研究者教育プログラムの実施を含め，順調に進展しており，今後の成果へとつなぐことが期待される。

４．今年度の研究成果

１）研究成果の概要

人文情報ユニットを中心に複数の論文成果を出すことができた。研究会については，すべてのユニットについて，バランスよく実施することができ，異分野連携ユニットについては，これまでと異なる新たな分野への挑戦も行われた。そして，地域連携・教育ユニットにおいても，実際に地域と連携した幅広い研究を実施するとともに，博物館資料の大学教育への幅広い活用などをも検討することができ，それぞれの側面から新たに展開することができた。さらに，国際研究集会やワークショップの実施など，国際的な連携も更に進展し，総合資料学を地域・国際の両面から進めることができている。

２）著作物名，論文名

【著作物】

2022年２月　『〈洗う〉文化史　「きれい」とは何か』国立歴史民俗博物館・花王株式会社編，吉川弘文館，224頁

【主な論文】

2021年６月　「コロナ禍と博物館②　新型コロナウイルス蔓延下における博物館の諸活動と今後―オンライン・現代資料・パブリック―」，後藤真，『日本史研究』706，pp.60-73

2021年７月　“Current Status of Japanese Old Photographic Materials in the United States and the United Kingdom, and the Archiving of the multiple "Gazes"”研谷紀夫，『情報研究（関西大学総合情報学部紀要）』53，pp.13-26

2021年８月　「朝鮮初期における陶磁器の生産と貢納・流通」荒木和憲，田中大喜編『中世武家領主の世界』，pp.260-300

2021年12月　「「地域資料情報継承記録モデル」の構築と課題」，堀井美里，小川歩美，堀井洋，高橋和孝，野坂晃平，

川邊咲子，後藤真，『情報知識学会誌』31-４，pp.470-473

2021年12月　「「学術野営2021 in 奥州市」からみる発表と議論の公開について」，小川歩美，堀井美里，堀井洋，川邊咲子，後藤真，高田良宏『情報知識学会誌』31-４，pp.474-477

2022年３月　「デジタル歴史資料が導き出しうる「パブリック・ヒストリー」とは」，後藤真，『歴史学研究』1021，pp.45-49

３）主な研究会・シンポジウム等

・異分野連携ユニット研究会　第１回（2021年７月１日　於：オンライン），「単年輪14C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明（代表：坂本稔）」最終年度成果報告会との合同開催）

箱﨑真隆「趣旨説明」

研究発表１　坂本稔「単年輪炭素14データ蓄積の現状と展望」

研究発表２　木村勝彦（福島大学共生システム理工学類）「酸素同位体比年輪年代法の長期標準年輪曲線の構築」

研究発表３　三宅芙沙（名古屋大学ISEE）「過去１万年の太陽活動復元」

研究発表４　中尾七重（山形大学理学部）「中世民家の年代研究」

坂本稔「基盤Sの申請に向けて」

・学術野営2021 in 奥州市（2021年７月２日・３日　於：オンライン・えさし郷土文化館）

学術資料継承に関するワークショップ「みんなであいみつ！」

Ⅰ．国立歴史民俗博物館（総合資料学）提案（司会：後藤真）「地域資料調査における研究者と地域社会とのコミュニケーション」

Ⅱ．AMANE提案（司会：堀井洋）「学術研究活動の経済価値について」

Ⅲ．地域関連提案（司会：川邊咲子）「地域における資料継承の現実と展望～民具資料の”緩やかな保存”の可能性～」

全体討論

・異分野連携ユニット研究会　第２回（2021年10月11日　於：オンライン）

「「炭素14年代法が明らかにする『文字を持たなかった文化』の歴史－縄紋文化，アンデス文化の事例から－」

箱﨑真隆「趣旨説明」

瀧上舞「同位体分析と炭素14 年代分析によるアンデス考古学研究」

小林謙一（中央大学文学部）「縄紋時代の高精度年代研究の現在」

・人文情報ユニット研究会　第１回（2021年10月20日　於：オンライン）

「「地域「デジタルアーカイブ」の展開のあり方と可能性」

後藤真「趣旨説明」

報告１　新垣瑛士（南城市教育委員会）「南城市におけるデジタルアーカイブについて」

報告２　吉賀夏子（佐賀大学）「佐賀におけるデジタルアーカイブの可能性」

報告３　後藤真「デジタルアーカイブの国の動向と今後」

総合討論

・人文情報ユニット研究会　第２回（2021年12月13日　於：オンライン）

「歴史系資料アーカイブの「クラウド」を問う」

後藤真「趣旨説明」

小風綾乃（お茶の水女子大学）・中村覚（東京大学）「『百科全書』典拠研究アプリのクラウドソーシング化に向けた取り組み」

橋本雄太「写真資料のクラウドアノテーションシステムの開発：『渋沢栄一伝記資料』別巻第10を事例に」

総合討論

・人文情報ユニット・オンラインワークショップ” Digital archiving of artifacts related to everyday life and culture”（2021年12月16日　於：オンライン，バンドン工科大学との共催）

Moderator：Virliany Rizqia（Kanazawa University Graduate School）

Opening speech　Makoto Goto（NMJH）

Prananda Luffiansyah（ITB）”Digital Museum of Everyday Objects of Indonesia”

Sakiko Kawabe "Challenges of Digital Archiving of Everyday Objects in Japan"

Summary and comment Yuta Hashimoto , Arianti Ayu Puspita（ITB）

Discussion

・地域連携・教育ユニット研究会　第１回（2022年１月８日　於：オンライン，特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（代表：奥村弘）との共同主催及び科研費基盤（A)「恒久的保存に向けた災害被災資料の特性解明と保存環境の構築」（代表：松井敏也）との共催）

「地域と専門知とをつなぐ」

奥村弘（神戸大学)「主催者挨拶」

天野真志「趣旨説明」

報告１　天野真志「資料保存の実務をめぐるコミュニケーション」

報告２　中尾真梨子（福島文化財センター白河館)「福島県における文化財保存科学の役割」

報告３　栗田昇・鈴木映梨香・三井百合子・森多毅夫（ながはくパートナー文化財保存グループ)，原田和彦（長野市立博物館)，山中さゆり（真田宝物館)「ボランティアと専門家との対話」

総合討論（司会　河野未央（尼崎市立歴史博物館))

・異分野連携ユニット研究会　第３回（2022年２月23日　於：オンライン，学術変革（A)「土器を掘る：22世紀型考古資料学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究（代表：小畑弘己)」，基盤（S)「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化（代表：中塚武)」の合同研究会）

「考古科学の新境地」

箱崎真隆「趣旨説明」

小畑弘己（熊本大学)「『土器を掘る』の概要と現時点の成果」

小林謙一（中央大学)「先史時代の高精度編年の現状と展望」

箱崎真隆「炭素14 年代法による誤差０年の年代決定の現状と展望」

中塚武（名古屋大学)「『酸素同位体比年輪年代法の高精度化』の概要と現時点の成果」

佐野雅規(名古屋大学)「酸素同位体比年輪年代法に基づく東アジアの年代測定と気候復元の現状と展望」

庄建治朗（名古屋工業大学)「年層内分析に基づく気候復元の現状と展望」

総合討論

・地域連携・教育ユニット研究会　第２回（2022年３月６日　於：オンライン，九州保健福祉大学博物館学研究室との合同主催）

ディスカッション『空き家の文化財を考える―保全からデジタルアーカイブまで―』地域歴史資料の滅失を考える研究集会）

【ディスカッション内容】

１：空き家と文化財問題の現状と課題

２：空き家における多様な資料の存在と保存

３：自治体・民間ボランティアによる関与と権利処理・活用の課題

・全体集会（2022年３月16日　於：オンライン・フクラシア丸の内オアゾ）

後藤真「総合資料学の創成と日本歴史文化のバックアップ事業　全体報告」

後藤真「人文情報ユニット報告」

箱崎真隆「異分野連携ユニット報告」

天野真志「地域連携・教育ユニット報告」

川邊咲子「活動報告　総合資料学の地域での実践と国際的展開」

奨励研究報告

大邑潤三（東京大学地震研究所)「江戸・京都の災害記録に現れる小地名の地理座標の特定とGIS データ化」

金甫榮(公益財団法人渋沢栄一記念財団)･橋本雄太「市民参加型プラットフォームによる写真資料のデータ構築と活用」

山内利秋（九州保健福祉大学)「人口減少にともなう地域資料喪失の危機に対応した活動モデルの検討―宮崎県を検討対象として―」

福島幸宏（慶應義塾大学)「近現代地域歴史資料継承のための情報公開手法の検討―奥州市・人首文庫を中心に―」

相川陽一（長野大学)「20世紀後半の日本における社会運動資料の整理・公開手法に関する研究」

高橋そよ（琉球大学)「サンゴ礁海域における漁具の資料学的検討と地域展開―理論編―」

佐藤琴(山形大学)「山形において近代に収集された歴史資料の研究と活用―長井政太郎資料と林泉文庫」

"ディスカッション　歴史文化資料の継承とデジタル化
後藤真「趣旨説明」
亀田堯宙，橋本雄太，小風尚樹「５年後の日本の人文情報学」"
後藤真「第４期に向けて」

５．全期間の研究成果

全期間の成果については，おおむね下記のようにまとめられる。

まず，人文情報学ユニットについては，khirinを基礎としたデータ構築を推進することができた。当初の想定では，歴史資料のデータを１箇所に集める考え方を中心とし，統合検索データベースを作り上げることが目的であったが，研究の深化にともない，統合データベースを作り上げるのみならず，データを受け入れ，さらに高度なサービス等へも展開しうるデータのハブとしてkhirinを位置付けるという方向性へと変わっていった。その結果として，khirinは単体の統合検索サービスであるldに加えて，IIIF（International Image Interoperabillity Framework）を活用したkhirin a，RDFとメタデータの厳密な運用を行う地域歴史資料のためのkhirin c，そしてTEI（Text Encodin）を活用したkhirin tという三つのサービスを展開することができ，当初の目標であった目録・画像・テキストデータの公開を行うに至った。さらに，これらのデータを，さらに高度活用してもらうためのデータストレージとしてのkhirin rへとも展開できる素地までを構築した。当初は，一つのシステムとしてkhirinは構想されていたが，適切な情報発見と人文情報学的な活用という観点から，システムを複数に広げることとなった。これは，コンピュータによる歴史資料活用の可能性が大きく広がってきたという，人文情報学分野の研究の進展とも大きく関連している。また，これらのデータをどのように利用してもらうかという視点から，さらに議論は進展し，データをどのように入れていくかという点も検討が行われるようになった。橋本氏が進める「みんなで翻刻」「みんなで古写真」などを題材にしつつ，クラウドソーシングプラットフォームの可能性なども議論されるに至っている。また，地域の資料保全・文化継承にデータをどのように利用できるか，利用可能かということもさらに深める形で議論することになった。これは，本事業の当初の目的をより深めた形で実現することを目指すものとなった。
そして，情報発見をさらに高度な形で進めるために，システムに必要なものを技術的に検討することも行った。具体的には，Getty研究所が作る英語の文化財辞書情報を日英との関係でどのように活用するかなども研究を進めるとともに，その辞書情報を用いたテキスト解析も実施した。これらの技術開発は，基本的なkhirinのシステムにどのように搭載していくかを研究する必要がある。また，歴史資料のテキスト解析については，今後の技術的な研究によるところもあるので，今後さらに発展させていくことを目指したい。このように，本事業の中でも，人文情報学とデータ構築については，最も重点的に進めることができた。

次に，異分野連携ユニットについて。前期と後期で大きく二種類の研究を進めた。人文情報ユニットに比して，手探りなところが多かったが，一定の成果をあげることはできた。６年間のうち，前半にあたる３年間においては，古文書における料紙の研究，とりわけ交雑物（デンプン等）の有無から，科学的に文書の分析を行うことを重点的に実施した。この成果は，科学研究費基盤A「国際料紙学の構築」へと結実し，料紙研究を新たな分野として切り開くことに成功しつつある。これは，考古資料を主たる対象として分析を行っていた分析科学の研究者と，歴史学者のコラボレーションにより生み出された成果であり，総合資料学が新たに分野融合を目指した重要な成果であると言える。このように，分野の異なる研究者同士が相互の成果を検討し合うことで，新たな分野の創成へとつながったという観点からは，意義が大きいものであった。また，この異分野連携ユニットの中の一つの重要なテーマとして進められた「聆涛閣集古帖」の研究についても，IIIFデータをいち早く公開するに至ると同時に，2023年春の企画展示「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌―」へと結実するに至っている。後半については，とりわけ年輪年代法・酸素同位体比研究を歴史学分野にどのように取り入れるかについての検討が中心に進められた。これは，今後の歴博が進める自然科学的な歴史資料解析の一つの重要な拠点になったといえ，第４期にさらなる展開が期待されるものである。このように，新分野創成へのシーズを作ったという点では極めて大きな成果をもたらした。一方で，集古帖以外の研究データを入れるにまで至らなかった点は，今後の課題として残ったと言えるであろう。これは，人文情報ユニットでふれた，当初の構想からの変化（khirinの一つのデータベースに全てを入れる統合型から，データの形に応じてシステムを変える形式へ）によるところも大きい。今後は，RDM（Research Data Management）の動向なども意識しつつ，効果的にデータを入れて共有する仕組みが求められるであろう。

地域連携・教育ユニットについて述べる。同ユニットの教育活用研究の側面からは，特にモバイル展示ユニットの活用に重点が置かれたものとなった。山形・宮崎等遠隔地での活用事例や，館内でもどのような利用方法が可能かなどの検討を進めるとともに，最終的には「未来世代育成プロジェクト」をはじめとする，同プロジェクトの教育事業への活用実践へと結実した。地域連携については，歴史文化資料保全NW事業と密接に関係しつつ，研究を

進めた。災害時における資料保全のあり方についての研究がさらに進み，地域の非専門家との関わり方についてや，各種ステークホルダーとの関係の作り方，「巻き込み」への実践などの例が共有され，地域連携というユニット名の通りの地域資料保全のあり方を検討することができた。それと同時に，地域の厳しい現状も改めて共有されることになり，社会全体のありようを見据えながら，検討を進めていくことが求められる。事業後半においては，合同会社AMANEとともに地域資料の保全―とりわけ日常時における保全を考えるための研究会「学術野営」も実施された。ここでも多くのステークホルダーとの検討が進むとともに，共同研究員以外にも開かれた形で議論できたことも，重要な意味を持つであろう。また，これらの議論が進むことによって，「そもそも歴史資料とはどのようなものまでを対象とするのか？」「継承すべきものは何か。また何をすれば継承されていると見なすことができるのか」といった根本的な問いにまで議論が及んでいる。今後，さらにこれらの本質的な問いを意識しつつ，実践と理論を深化させていく必要があるであろう。

基盤データとしては，khirin-ld,a,tの三つを公開するに至ったことは前述のとおりだが，この中で13のデータセット（ldの目録データセット数，aなどでは，データセットの分類が異なる），30万件を超えるデータを入れることができている。さらに，これらの情報発見を行うべく，高度な辞書の構築を行う方向でも研究を進めてきた（Getty CIDOC CRMなど）。今後もより多くの歴史文化資料を発見できるような方法を検討することが必要であろうと思われる。また，これまでの歴史資料だけではなく，研究成果や研究プロセスに関するデータの蓄積も検討対象となる。動画データなども含めるとともに，機構本部・大学共同利用機関法人４機構との連携なども含めて，検討を進めていくことになるであろう。最終的には，歴史文化に関する資料を幅広く扱うことができる大きな基盤を作り上げるに至っている。

最後に，全体の成果について，まとめておきたい。理論的進展については，人文情報学と地域連携に関しては特に顕著に認められた。多くのステークホルダーと連携し，誰のための歴史資料か，誰のためのデータかという観点について，検証が詳細に進み「デジタル・パブリックヒストリー」といった概念にも近づきうるようなものであった。一方で，異分野連携については，新たな研究を確立できうる芽はできたものの，「総合資料学としての成果」という点では遠かった部分があるのは否めない。総合資料学という学構築の観点からは，半ばではあるものの，歴博における歴史文化資料データの新たなあり方と地域歴史資料への接続について，広く内外に示したという点では，大きな成果を挙げられたのではないかと考える。今後，これらの確立した成果をもととして，よりさまざまな論点を含む形で議論を展開させていくことを目指していきたい。

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

阿児　雄之　東京国立博物館・主任研究員
伊藤　昭弘　佐賀大学・准教授
宇陀　則彦　筑波大学・教授
大向　一輝　東京大学・准教授
岡田　義弘　九州大学・教授
奥村　　弘　神戸大学大学院・教授
五島　敏芳　京都大学総合博物館・講師
崎山　直樹　千葉大学・講師
新　　和宏　千葉市科学館・館長補佐
関野　　樹　国際日本文化研究センター・教授
高田　良宏　金沢大学・准教授
研谷　紀夫　関西大学・教授
原　正一郎　京都大学・教授
原山　浩介　日本大学・准教授
宮武　正登　佐賀大学・教授
百原　　新　千葉大学・教授
山家　浩樹　東京大学史料編纂所・教授
山田　太造　東京大学史料編纂所・助教
荒川　章二　本館・名誉教授
天野　真志　本館研究部・特任准教授
荒木　和憲　本館研究部・准教授
○大久保純一　本館研究部・副館長
小倉　慈司　本館研究部・准教授
亀田　尭宙　本館研究部・特任助教
川邊　咲子　本館研究部・プロジェクト研究員

久留島　浩　本館・特任教授　　小池　淳一　本館研究部・教授
◎後藤　　真　本館研究部・准教授　　齋藤　　努　本館研究部・教授
鈴木　卓治　本館研究部・教授　　関沢まゆみ　本館研究部・教授
高田　貫太　本館研究部・准教授　　箱嵜　真隆　本館研究部・プロジェクト研究員
橋本　雄太　本館研究部・助教　　日高　　薫　本館研究部・教授
三上　喜孝　本館研究部・教授　　村木　二郎　本館研究部・准教授

（２）広領域連携型基幹研究プロジェクト
日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築
（主導機関：国立歴史民俗博物館，国立国語研究所）
地域における歴史文化研究拠点の構築
2016～2021年度
（研究代表者　川村　清志）

１．目　的

日本列島上の地域社会においては，その構造的な変動や東日本大震災をはじめとする災害によって，歴史文化の継承が危機に瀕している。本事業は，そうした地域社会の変化に対応し，次代へ歴史と文化を継承していくためのシステムの構築を目的としている。特に地域社会における多様な文化資源を保存継承し，それらを伝えていくための拠点の形成とそれを維持していくための条件について集中的に調査研究し，具体的な提言をおこないたい。

日本列島は地震や津波，台風など古くから数多くの災害に見舞われてきた。また高度経済成長や開発によって地域社会は動揺し，人びとをとりまく生活環境は抜本的な変化にさらされている。その中で地域の文化は拠りどころを失い，記録や遺物，伝承や芸能は保存・維持することが困難になりつつある。これらは生活の基層をなしているだけにその消滅は表面化しづらく，気づいた時には取り返しのつかない段階まで崩壊している場合が少なくない。本事業では歴史学における資料保存運動や民俗学における祭礼・芸能の継承活動などをふまえ，地域社会における文化の拠点を多角的複層的にとらえ，その可能性を探るものである。これらは人文学の最も基礎的な部分を構成しており，複数の学問分野を結ぶ核でもある。この実状と再生を考えることは人文学の基盤を守ることであるとともに新たな学問領域の創成を探ることにもつながっている。

具体的に共同研究では，東北地方の太平洋岸地帯と山間部の比較検討に加え，四国地方における地域文化をさらに対象として調査分析を進める。次いで第２にそうした国内における災害や地域変動に対応できる歴史文化研究の拠点の特徴と課題を東アジア世界における比較研究に広げていく。

調査対象地としては東北地方の宮城県気仙沼市，南三陸町，石巻市，岩手県宮古市などに加えて，福島県只見町，南会津町，石川県輪島市皆月等を取りあげる。さらに四国地方では高知市，徳島市等を予定している。アジアにおける歴史文化研究の拠点比較については韓国国立民俗博物館等との協力，連携を図る予定である。

２．今年度の研究計画

宮城県気仙沼市，福島県只見町，石川県能登半島等におけるこれまでの実践的調査から収集した研究成果を集約し，データの精微化を進めて報告書等を刊行する。加えて，映像を含めた多様なメディアでの成果発信を行う。また，令和２年度コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった調査地域での研究成果還元・広報周知を主な目的としたシンポジウムを開催し，史資料の保全と研究にあたる拠点構築へと結実する実践的な理論の提示を目指す。

３．今年度の研究経過

【シンポジウム】
2021年５月２日　「多角的な視点から捉える地域の文化―博物館における研究の可視化・高度化」（オンライン）
2021年10月３日　「奥会津の戦国期文化をさぐる―学僧祐俊の旅と文化遺産」（福島県只見町，オンライン併用）

【共同研究会】
2021年10月18日　第１回研究会（オンライン）
川村清志（国立歴史民俗博物館）・内山大介（福島県立博物館）
「シンポジウム「奥会津の戦国期文化を探る―学僧祐俊の旅と文化遺産―」へのコメント」
三上喜孝（国立歴史民俗博物館）「観音堂の落書きに見える歌をめぐって」

2021年11月27日～28日　第２回研究会（徳島県立博物館ほか）
　11月27日　徳島県立博物館見学，常設展リニューアルに関する討論
　11月28日　武知家住宅・田中家住宅（藍屋敷）見学，松茂町歴史民俗博物館見学，
　　地域における歴史文化研究余点としての博物館の役割についての討論

【報告書・成果論集】
・川村清志編『七浦から世界へ―調査・研究・活用の拠点としてのフィールド』国立歴史民俗博物館，2021年６月
・西村慎太郎・木部暢子・吉田丈人・川村清志ほか著『新しい地域文化研究の可能性を求めてvol.10　多角的な視点から捉える地域の文化－博物館における研究の可視化・高度化』人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」，2021年11月
・兼城糸絵・川村清志編『あの日の僕―七ヶ浜3.11』国立歴史民俗博物館，2022年３月
・川村清志制作・編集「歴博研究映像　震災の記憶をつなぐ―あの日の僕，七ヶ浜の3.11」国立歴史民俗博物館，2022年３月
・川村清志制作・編集「歴博研究映像　石川県輪島市皆月の風景と行事―ショウゴロウフィルムから―」国立歴史民俗博物館，2022年３月
・木部暢子編『地域文化の可能性』勉誠出版，2022年３月

【大学等における教育プログラム】
・弘前大学人文社会科学部との協定に基づき，出張講義として「地域文化振興論」の授業を担当したほか，演習「民俗学ゼミナール」での学生の卒業論文執筆に関わる発表にコメントするかたちでの指導を行った。

【展示等】
・国立民族学博物館において特別展「復興を支える地域の文化―3.11から10年」（2021年３月４日～2021年５月18日）の展示協力とモバイル・ミュージアム「食と地域文化―宮城県気仙沼の食文化」「映像のなかの地域文化―石川県輪島市皆月のくらしと祭り」を開発した。また，国文学研究資料館にて開催した巡回展（2021年８月４日～９月29日）でもモバイル・ミュージアム「食と地域文化―宮城県気仙沼の食文化」の展示を通してユニット間で連携した。

４．今年度の研究成果

プロジェクトの最終年度にあたる本年もコロナウイルス感染症拡大の影響により，当初予定していた計画からの変更を余儀なくされたが，オンライン形式でのシンポジウムや研究会の開催，ブックレット・書籍・映像等さまざまな媒体での研究成果物の制作とブックレットの歴博学術情報リポジトリでの公開，プロジェクトウェブサイト・Facebookの活用を通した成果発信を行った。主だった研究成果は，下記のとおりである。

第１回研究会（2021年10月18日）はオンラインで実施し，それに先立ち行われたシンポジウム「奥会津の戦国期文化を探る―学僧祐俊の旅と文化遺産―」（2021年10月３日）に関わる討論を中心に，行政区分が対象とする地域とは異なる地域文化の広域的展開や，地域行政･文化行政側の課題に対して，それぞれの視座から意見交換を図った。第２回研究会（2021年11月27日～28日）は徳島県で開催し，2021年８月に常設展示をリニューアルした徳島県立博物館，松茂町歴史民俗博物館，藍屋敷等の巡検を行った。ARやVRなどの技術を活用した新たな博物館展示の手法開発と，地域における歴史文化研究拠点としての博物館の役割や文化施設等との連携について議論を深めることができた。

本共同研究および機構の基幹研究の成果としては，基幹研究に参画する５機関のユニットメンバーによる鹿児島大学でのリレー形式での講義をもとにした書籍『地域文化の可能性』（勉誠出版，2022年３月）を刊行した。大学等での教育に広く活かしていくための教科書となる書籍を編纂することで，若手研究者の育成と将来の人文科学の研究の発展にも寄与することができた。

このほか，宮城県気仙沼市や七ヶ浜町，石川県能登半島等での実践的調査の成果として，ブックレットや映像などを制作，配布することで調査研究成果の多様な社会還元を図った。刊行したブックレットは，当館の学術情報リポジトリで2022年３月に一斉公開し，プロジェクト終了後の継続した調査研究の社会発信の強化に努めた。

５．全期間の研究成果

プロジェクト期間全体を通して，宮城県気仙沼市・福島県只見町を対象に，文化資源の保全と活用モデルの実践調査を展開した。宮城県気仙沼市では，教育委員会と協力して，アクション・リサーチの視点を取り入れた市民参加型の被災資料の保全と資源化・活用に関する調査を実施した。これに関連して，被災後の地域が置かれた現状と資料整理のなかで集積される経験的知識へのアプローチを映像で記録化し，「歴博研究映像　モノ語る人びと―津波被災地・気仙沼から」（2018年）を制作した。本映像は，歴博映像フォーラムでの上映したほか，大学等で活用できる教育プログラムとして弘前大学，熊本大学，新潟県立歴史博物館等でも上映会を開催した。2016～2018年度にかけては，市民講座「文化財から学ぶこと」「気仙沼の漁業の歴史と民俗」「資料保存から地域文化の再発見へ」を開催し，地域住民との双方向的な意見交流の場の創出とプロジェクト活動で得られた成果の情報発信に努めた。そのほか，研究調査成果の報告書（地域文化研究フィールドノーツ）としてブックレット『気仙沼尾形家（大家）の年中行事』『物資文化を救う意味―気仙沼市小々汐の現場から―』『気仙沼のカミと妖怪』を刊行した。さらに地域文化資源の活用を目的として，資料整理で作成された資料カード約11,000点をデジタル化し，これをもとに資料目録を作成した。こうした成果を地域に還元するために，気仙沼市教育委員会と発信方法と活用の在り方についての検討を進めている。福島県只見町では，教育委員会や中世仏教を専門とする研究者らと協働して，文化資源の保全と資源化に関する調査を展開した。また，教育委員会等と連携してシンポジウム「奥会津の戦国文化を探る」「奥会津の戦国期文化を探る―学僧祐俊の旅と文化遺産―」を開催することで，気仙沼での市民講座同様に，地域住民らに対して研究成果の発信と意見交流を行った。また，ブックレット『歴史と文化のよりどころを求めて―福島県只見町から』を刊行を通して，地域史の枠組みや研究の方法にとらわれない，様々な視点や広い学問領域からのアプローチが地域の資料がもつ多元的な価値の発見につながることを提言した。

次に，過疎化・高齢化等により変貌する地域社会における文化の継承について，石川県輪島市を対象とした祭礼を中心とした民俗文化の調査研究を実施した。調査で得られた成果は，ブックレット『輪島市皆月日吉神社山王祭フォトエスノグラフィー 準備編』『輪島市皆月日吉神社山王祭フォトエスノグラフィー 祭日編』を刊行したほか，シンポジウム「七浦から世界へ－調査・研究・活用の拠点としてのフィールド」を開催し，研究拠点としての当該地域の意義と変容について，地域住民との問題意識を共有することで，調査研究のさらなる展開を図った。

研究と展示との連環による高度化の試みとして，特集展示「よみがえる地域文化―岐路に立つ共同体のいま―」（2019年度）のほか，弘前大学大学資料館企画展示「被災地と向き合う―文化財レスキューの取り組み―」，愛媛県歴史文化博物館特別展「四国・愛媛の災害史と文化財レスキュー」など共同研究会に参画するメンバーとも連携した展示を企画・開催した。このほか，国立民族学博物館の特別展「復興を支える地域の文化―3.11から10年」（2021年３月～５月）では，基幹研究に参画する５機関のユニットがそれぞれ開発したモバイル・ミュージアムを一堂に展示する機会となり，歴博ユニットからは「食と地域文化―宮城県気仙沼の食文化」「映像のなかの地域文化―石川県輪島市皆月のくらしと祭り」を展示した。なお，モバイル・ミュージアム「食と地域文化―宮城県気仙沼の食文化」は国文学研究資料館での巡回展示（2021年７月～９月）の展示を通してユニット間で連携した。

地域文化に関わる教育研究を推進させるため，弘前大学と教育研究連携のための協定締結を結んだほか，気仙沼市教育委員会との文化財資料整理事業に係る協力及び指導について連携を強化した。弘前大学とはこの協定に基づき，2017年度から連携授業を毎年度実施した。2018年度はユニット間連携を強化させて，国語研との合同で弘前大学で連携授業を行ったほか，青森県むつ市の調査を弘前大学，国語研，歴博と連携した調査も実施した。さらに，地域の民俗研究にあたってきた故佐々木達司氏の遺稿『青森県俗信辞典』を，弘前大学地域未來センターおよび弘前大学人文社会科学部の大学生５名の協力を得て刊行し，東北地方の大学，博物館・図書館等に配布した。こうしたユニット間連携の一つとして特筆すべき点として，2018年度に実施した鹿児島大学で実施したリレー形式の講義があげられる。この成果は最終的に書籍『地域文化の可能性』（勉誠出版，2022年３月）の刊行に結実し，本プロジェクトおよび機構の基幹研究プロジェクトの集大成として，大学等での活用を目指す教科書となった。

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

（館外）

笹原　亮二　国立民族学博物館学術資源研究開発センター・教授
日高　真吾　国立民族学博物館人類基礎理論研究部・教授
川島　秀一　東北大学災害科学国際研究所・シニア研究員
古川　　実　青森県立青森北高等学校・講師
山口　博之　前天童市立旧東村山郡役所資料館・館長
内山　大介　福島県立博物館学芸課・主任学芸員

田邊　　幹　新潟県立歴史博物館学芸課・主任研究員
大本　敬久　愛媛県歴史文化博物館学芸課・専門学芸員
梅野　光興　高知県立歴史民俗資料館学芸課・学芸課チーフ
磯本　宏紀　徳島県立博物館学芸課・学芸係長
田井　静明　瀬戸内海歴史民俗資料館・主任専門研究員
久野　俊彦　東洋大学文学部・非常勤講師
山田　嚴子　弘前大学人文社会科学部・教授
須田真由美　山形県立博物館・学芸員
秋山　沙織　東北歴史博物館・技師
角崎　　大　秋田県立博物館学芸課・学芸主事
葉山　　茂　弘前大学人文社会科学部・准教授

（館内）
内田　順子　本館研究部・教授
○小池　淳一　本件研究部・教授
松田　睦彦　本館研究部・准教授
三上　喜孝　本館研究部・教授
村木　二郎　本館研究部・准教授
高科　真紀　本館研究部・特任助教
◎川村　清志　本館研究部・准教授

（３）異分野融合による総合書物学の構築
（主導機関：国文学研究資料館）
古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究
2016～2021年度
（研究代表者　小倉　慈司）

１．目　的

本共同研究は2014年10月より機構内連携研究として開始された準備研究「古代の百科全書『延喜式』の総合書物学研究―多分野協働をめざして―」を踏まえて，広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」の構成ユニットとして開始するものである。2016～2019年度は科研費基盤研究（B）「史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究」16H03485（小倉慈司代表），2020～2021年度は科研費基盤研究（B）「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」20H01318（小倉慈司代表）とも連動して活動を行なった。また当館が推進する「総合資料学の創成」の一環としても位置づけられる。そのため以下の記述は，それらの成果も合わせた形で記すこととした。

本研究は，古代日本の法制書『延喜式』を「古代の百科全書」としての観点から，分析科学・薬学・食品学・考古学・技術史等，古代史（文献史学）以外の様々な分野と協働して研究を進めることにより，新たな視点に基づいた研究を生み出すとともに，『延喜式』の様々な情報が広く活用されるような体制を作り上げることを目的としたものである。『延喜式』は延長５（927）年に完成し，康保４（967）年に施行された全50巻，条文数約3500条に及ぶ古代の法制書である。古代の基本資料として知られているが，その規定の中には神社や祭祀，儀礼における調度品や食料など，様々な物品が登場し，さながら「古代の百科全書」とも言える内容を持っている。それゆえ，古代史のみならず他の研究分野からも注目されるべき資料と言えるが,「業務マニュアル」として編纂されたものであったため，部外者にとっては難解であり，『延喜式』の持つ豊かな情報が多くの研究者によって共有されているとは言い難い状況にある。

これまでの『延喜式』研究の到達点として，現在『訳注日本史料』が刊行されているが，写本研究・本文校訂の観点からは不充分な点があり，また同書に使用されていない新たな善写本が近年，学界に紹介されてもいる。そこで本研究では，まず写本研究に基づいた新たな校訂本文を作成し，さらに様々な分野の研究者と協働して現代語訳・英訳を試みるなかで，新たな『延喜式』研究を生み出していきたい。

達成目標は大きく分けて以下の２点である。

①分野の枠を越えた協働研究　古代史（文献史学）以外の分野，具体的には分析科学や薬学・食品学・考古学等の

諸分野の研究者と協働して『延喜式』の研究を進めることにより，古代の知識と技術の現代的活用など新たな視点に基づいた研究を生み出す。研究にあたっては日本国内のみならずアメリカ等海外の日本史研究者，また古代朝鮮史等の研究者とも連携し，東アジア史の視点を重視して進める。
②垣根の開放　海外も含めた幅広い分野の研究者や一般市民が最新の『延喜式』研究成果を把握できるよう，写本画像・校訂本文にタグ付けをおこなったデータベースや現代語訳・英訳データベース，さらに文献目録データベースを構築して公開する。作成にあたっては海外の研究者と連携して進めることにより，海外の研究者にとっても利用しやすい形を模索する。

２．今年度の研究計画

分科会活動について，校訂本文・現代語訳・英訳作成の他，水産品および金属加飾，土器，英訳をテーマとする多分野協働研究を推進するとともに，以下の目標を達成する。
・延喜式関係論文目録データベースの補訂
・全体研究会２回開催
・英訳に関する国際研究集会開催
・延喜式データベースの公開（「総合資料学の創成」の協力）
・プロジェクト取り組みの総括，検証

３．今年度の研究経過

延喜式関係論文目録については，引き続きデータ増補・修正を進め，12月に第六次公開として36,090件を追加し，合計77,910件のデータを公開した。主として著者名の一字目の読みが「さ」行までを追加した。

全体研究会については，研究計画策定後に講演会と古代土器シンポジウムの開催に代えることとした。それらの具体的内容については，後述【主催講演会・国際研究集会・シンポジウム】を参照されたい。また「英訳に関する国際研究集会開催」も，同欄を参照。

分科会は，本文校訂については巻39内膳司を『国立歴史民俗博物館研究報告』に掲載し，英訳は巻39正親司について後述のデータベース「デジタル延喜式　Engi shiki Database」に登載することができた。ただ当初目標としてた巻21主計寮上，巻37典薬寮，巻41弾正台の校訂本文，巻11太政官，巻39内膳司の英訳については作業が遅れ，2022年度完成に変更した。主計式（土器）は年度末にこれまでの成果をまとめたシンポジウムを開催することとし，７月25日，９月１日，１月24日にその準備も兼ねた分科会を開催，３月19日に古代土器シンポジウム「器名･器形･用途・貢納―正倉院文書・延喜式にみえる土器」をオンラインにて開催することとした。

TEI（データベース検討）は数回にわたって検討会を開催し，2021年８月に当館所蔵土御門家旧蔵本『延喜式』のkhirin-a画像正式公開を実施し，2022年４月20日に「デジタル延喜式 Engi shiki Database」を正式公開した。前者は館蔵土御門家旧蔵本『延喜式』写本のカラー画像をIIIFにて公開するもので，後者は画像と校訂本文･現代語訳･英訳を連動させたものである。複数写本の校合作業の成果をTEIで構造化した。校訂本文は巻５斎宮･巻11太政官･巻14縫殿寮・巻17内匠寮・巻39正親司を，現代語訳は巻11太政官・巻17内匠寮・巻39正親司を，英訳は巻39正親司について公開した。

６年間にわたるプロジェクトの総括の場として，2021年12月26日に開催された総合書物学シンポジウム「「総合書物学」の現在」の場を活用し，３名による報告を行なって2021年12月時点での総括を行なった。また次期プロジェクト開始のために到達点の整理を行なった。

【史料調査等】

今年度もCOVID-19感染防止のため，あまり調査を実施することができなかったが，12月２～４日に高良大社所蔵『延喜式』版本の調査を実施し，３月９～12日に九州地方の酢醸造店（宮崎県綾町・長崎県西海市・福岡県大川市）・中国甕輸入店（福岡県糸島市）の調査を実施した。

食品・水産品分野では，昨年度に引き続き，アワビなれ鮨の加工実験を実施した。今年度は『延喜式』に記載された供御のなれ鮨の材料比に着目し，記載された材料の米を追い足し分とみて加工実験を行なった。その結果，既存のつけ込み米飯に少量の米飯を追い足す製法でも，なれ鮨の加工は十分に可能なこと，同実験の前後で実施した成分分析と乳酸菌優占種の同定の結果により，優占種となる乳酸菌種が常に同種で安定することも判明した。なお，実験にはRAや院生等も参加した。

【主催講演会・国際研究集会・シンポジウム】

①2021年７月３日（土）13：00～16：00　講演会「古代典籍写本調査から史料学・地域歴史文化遺産の構想へ」（講演者：石上英一東京大学名誉教授）（科研費「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」・東京大学史料編纂所共催）於東京大学史料編纂所＋オンライン　参加者総数88名
2021年10月２日（土）13：00～16：00　講演会「古記録の筆録と書写・部類・流布―『小右記』書写本を中心に（附）史料集の翻刻を考える」（講演者：加藤友康東京大学名誉教授）（科研費「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」・東京大学史料編纂所共催）於東京大学史料編纂所＋オンライン　参加者総数100名

史料学に対する知識や興味関心を高めるため，史料学に関する講演会を２回開催した。両回とも当初の予測を超えて80人以上の参加者があり好評を得た。講演会後，講演者に依頼して原稿を執筆していただき，当日の質疑概要も加えた両講演会の記録集を2022年３月に刊行した。

②2021年12月18日（土）９：00～12：20，19日（日）９：00～13：00　国際研究集会「国境を越える『延喜式』Exploring the Importance of Engi shiki（the Protocol of the Engi Era）on a Global Level」於国立歴史民俗博物館＋オンライン　参加者数56名（うち外国人研究者19名）

小倉慈司　「挨拶」
河合佐知子　「外国史としての日本史―アメリカ合衆国における学位取得と教育」
ジョーン・ピジョー（南カリフォルニア大学教授）
「アメリカの大学でどう日本法律史を教えるか―律令及び『延喜式』を中心に」
山口えり　「『延喜式』英訳から「告文」について考える」（以上，第１日）
エミリー・ウォーレン（南カリフォルニア大学大学院歴史学科PhDキャンディデイト）
「世界食文化史研究における『延喜式』の意義」
古田一史（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）
「『延喜式』にみえる朝堂政務の形跡―考選文申送手続きを事例として」
アレッサンドロ・ポレット（京都大学大学院文学研究科日本学術振興会外国人特別研究員）
「海外における教材としての『延喜式』―巻37「典薬寮」を中心に」
井上正望　「『延喜式』からみた古代中世移行期の日本における天皇の変質」
最終討論
ブルース・バートン（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター所長）「閉会の挨拶」

国境を越えて『延喜式』の可能性を探るという目的のもと，日本およびアメリカ・ヨーロッパを含む海外から異なる国籍の報告者や参加者を迎え，『延喜式』の英訳事業及び教育・研究活動双方の場でのグローバルレベル的活用を模索した。報告者は，ポスドクや博士課程後期の院生等若手研究者を含んだ多様なメンバーで構成され，それぞれの立ち位置から経験やアイデアを共有した。『延喜式』英訳の意義,『延喜式』を使った研究による新たな視点，日米の大学授業例をはじめとする教材としてのポテンシャル等について多彩な報告を行ない，活発な意見交換をするとともに，国際レベルでの学術交流・ネットワーク作りを行なった。56名（うち外国人研究者19名。他に海外在住日本人研究者も参加）の参加を得た。

なお，国際研究集会に先立ち，報告者を中心として前年度に引き続き，今年度は３回の「国際研究集会に向けてのワークショップ」を実施した（2021年６月18日，８月20日，10月14日）。課題・問題意識等に関する議論および準備報告を行ない，国際的な場で通用するプレゼンテーション・スキルの向上を図った。

③2022年３月19日（土）10：00～17：00　古代土器シンポジウム「器名・器形・用途・貢納―正倉院文書・延喜式にみえる土器」於国立歴史民俗博物館＋オンライン　参加者総数117名

小倉慈司　「挨拶」
森川　実（奈良文化財研究所）「正倉院文書にみる古代食膳具の研究」
森内秀造（元兵庫県立博物館）「品目記載パターンから見た『延喜式』土器の調納規定の検討」
荒井秀規　「平瓶と瓶子―史料呼称と考古学用語のはざま」
余語琢磨　「延喜式にあらわれる古代の容器・醸造関連具と，醸造プロセスの民俗考古学的研究」
清武雄二　「延喜主計式記載の土器イラスト制作活動報告」
全体討論　（司会：酒井清治・小倉慈司）

これまでの主計式分科会活動の総括として，２名のメンバー外研究者を招き，古代の土器をめぐってのシンポジウムを開催した。考古学研究者および院生を含め，多数の参加を得た。

４．今年度の研究成果と成果発信

今年度の主な研究成果および成果発信は以下の通りである。

①延喜式データベース「デジタル延喜式 Engi shiki Database」の公開を開始。

2021年８月に当館所蔵土御門家旧蔵本『延喜式』のkhirin-a画像正式公開，2022年４月20日に「デジタル延喜式 Engi shiki Database」を正式公開。公開データ量はまだ限られているが，複数写本の校合作業の成果をTEI で構造化し，IIIF 画像と 校訂本文・現代語訳・英訳のTEI ファイルを紐づけるよう構造化することで，これらの国際標準に準拠したシステムを開発した。

②国際研究集会開催（上述）。

③史料学に関する講演会開催，講演記録集刊行（上述）。

④古代土器シンポジウム開催（上述）。

⑤延喜式関係論文目録データベースのデータ増補

2021年12月，第六次公開として36,090件を増補し（主として著者名１字目の読みが「さ」行までを追加），合計77,910件のデータを公開した。

⑥総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻講義「総合書物論」に協力。

⑦2022年１月18日（火）～２月13日（日）人間文化研究機構　可視化・高度化事業関連展示

「地域社会との連携による展示実践―人間文化研究の可視化・高度化―」 於国立歴史民俗博物館企画展示室B・メディアルーム

可視化･高度化事業関連展示の一環として，モバイル型展示ユニットを活用し，長鰒についての展示を行なった。

⑧2021年12月26日（日）総合書物学シンポジウム「「総合書物学」の現在」（オンライン）は，総合書物学各ユニットがパネルを組んで報告を行なったが，当ユニットではパネル「『延喜式』研究のこれから」として３名が報告し，これまでの研究活動を総括した。

小倉慈司　「『延喜式』写本研究と現代語訳・英訳」

中村覚　　「TEIを用いた『延喜式』テキストの構造化とビューアの開発」

清武雄二　「『延喜式』にみえる水産加工食品の多分野協働研究」

⑨2022年２月21日（月）大手町アカデミア×人間文化研究機構　オンライン無料特別講座「「鮨鰒」が伝える食文化と古代日本史～平安時代の行政マニュアル『延喜式』を読み解く～」（講師：清武雄二，ナビゲーター：河合佐知子）

人間文化研究機構・読売調査研究機構主催によるオンライン講座にて，YouTubeによる無料オンライン講座を行なった。申込者数496名，参加者数329名を数え，寄せられた質問や感想は講座中に62件，講座直後には120件にも及んだ。食文化への興味関心を媒介とすることにより，一般の視聴者に多様な情報を内包する『延喜式』の可能性や研究の重要性について強く印象付けることができた。

⑩広島市立大学における『延喜式』英訳に取り組むゼミ活動

共同研究員が本務校にて『延喜式』英訳に取り組むゼミ活動を実施した。

⑪東海大学海洋学部における伝統食品を利用した商品開発への協力

東海大学海洋学部は，2019年度より西伊豆町の伝統食品を活用した学生による新商品開発教育プログラムを行なっており，当プロジェクトはそれに協力してきた。2020年度に産学連携によって開発した塩カツオ飴「塩カツオＤＥ塩分チャージ」は，2021年度に商品化，販売されるようになった。

⑫2022年３月26日（土）13：00～17：00　新古代史の会との共催によるオンライン研究会開催

永島朋子「糸所考―延喜式にみえる「供御」―」

渡部敦寛「『和名類聚抄』国郡部における二つの原資料」

関東の院生も含む古代史研究者を中心に活動している新古代史の会と共催してオンライン研究会を開催し，『延喜式』に関わる報告がなされた。

【著書】

「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」･「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」（人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」歴博ユニット）編，「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」講演会記録集１・２，「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」･「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」（人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」歴博ユニット），2022年３月，129p.

井上正望，日本古代天皇の変質―中世的天皇の形成過程―，塙書房，2022年３月，ISBN978-４-8273-1330-7，408頁

小倉慈司，古代律令国家と神祇行政，同成社，2021年６月，ISBN978-４-886-21866-7，340頁

河合佐知子，Uncertain Powers：Sen'yōmon-in and Landownership by Royal Women in Early Medieval Japan, Harvard University Asia Center，2021年11月，ISBN0674260163，330頁，英語
仁藤敦史，藤原仲麻呂，中央公論新社，2021年６月，ISBN9784121026484，258頁
三舟隆之・馬場基編（小倉慈司ほか執筆），古代の食を再現する―みえてきた食と生活習慣病，吉川弘文館，2021年６月，ISBN978-４-642-04661-9，316頁
【論文・分担執筆等】
稲田奈津子，동아시아 의례연구의 새로운 시각―‘물품목록’의검토에서―（東アジア儀礼研究の新視角 ―「物品目録」の検討から），東西人文，16，pp.571-595，韓国・慶北大学校人文学術院，2021年８月，査読有り，韓国語
井上正望，古代・中世移行期における天皇の変質―「隠蔽」される天皇，史学雑誌，130-４，pp.38-63，史学会，2021年４月，査読有り，ISSN0018-2478
小川宏和，『延喜式』巻三九の写本系統と「内膳司」本文校訂（稿），国立歴史民俗博物館研究報告，234，pp.1-31，国立歴史民俗博物館，2022年３月，査読有り，ISSN0286-7400
小倉慈司（程茜訳）,古代天皇与神祇祭祀，日本学研究，32，pp.3-27，中国・社会科学文献出版社，2022年１月，査読有り，中国語
神戸航介･三輪仁美, 資料紹介　九条本『諒闇部類記』翻刻（一）　付解題, 書陵部紀要, 73, pp.49-68, 宮内庁書陵部, 2022年３月，査読有り，ISSN04474112
小風尚樹・中村覚・永崎研宣・渡辺美紗子・戸村美月・小風綾乃・清武雄二・後藤真・小倉慈司，相互運用性を高めた日本歴史資料データ実装：『延喜式』TEI と IIIF を事例として，じんもんこん2021論文集，pp.294-301，情報処理学会，2021年12月，査読有り
中村光一，上野三碑は語る，日本史学集録，42，pp.1-12，筑波大学日本史談話会，2021年７月，ISSN0913-7203
仁藤敦史，天平期の疫病と風損―国家による対策と地域―，静岡県地域史研究，11，pp.61-84，静岡県地域史研究会，2021年９月
堀部猛，トネリの勘籍―徳島県観音寺遺跡出土の木簡をめぐって―，史学雑誌，130-７，pp.43-60，史学会，2021年７月，査読有り，ISSN0018-2478
三上喜孝，古代日本における人面墨書土器と祭祀，東西人文，16，pp.301-305，韓国・慶北大学校人文学術院，2021年８月，査読有り
三上喜孝，日本出土の古代木簡―戸籍と木簡―，木簡と文字，26，pp.327-334，韓国木簡学会，2021年６月，査読有り，韓国語
三上喜孝，出土文字資料から見た払田柵の機能，国立歴史民俗博物館研究報告，232，pp.277-286，国立歴史民俗博物館，2022年３月，査読有り，ISSN0286-7400
三舟隆之，『日本感霊録』の史料性，日本歴史，881，pp.1-17，日本歴史学会，2021年10月，査読有り，ISSN0386-9164
山口えり，『日本三代実録』にみえる告文について，神道宗教，264・265，pp.49-75，神道宗教学会，2022年１月，ISSN0387-33
石川智士，第６章和食と魚，知っておきたい和食の文化，勉誠出版，2022年３月，pp.131-161，ISBN9784585330011
稲田奈津子，東アジアの律令制，古代日本対外交流史事典，八木書店，2021年11月，pp.261-265，ISBN978-４-8406-2249-３
小倉慈司, 讃岐国司解端書（いわゆる「藤原有年申文」）の再検討, 禁裏･公家文庫研究８, 思文閣出版, 2022年３月，pp.3-19，ISBN978-４-7842-2035-９
堀部猛，国衙工房と手工業生産，別冊季刊考古学37，雄山閣，2022年６月，pp.90-96
三上喜孝，東アジアの木簡，古代日本対外交流史事典，八木書店，2021年11月，pp.105-109，ISBN978-４-8406-2249-３
三上喜孝, 漢字文化の東アジア的展開と列島世界, 地域の古代日本　東アジアと日本, KADOKAWA, 2022年２月，pp.169-205，ISBN9784047036963
【書評・その他】（抄）
荒井秀規，榎英一著『律令交通の制度と実態―正税帳を中心に―』，古代文化，73-2，2021年９月，古代学協会，pp.136-138，ISSN00459232
小倉慈司，かな日記と『土佐日記』，REKIHAKU，3，2021年６月，国立歴史民俗博物館，pp.31-33，ISBN9784909658579

小倉慈司，西本昌弘編著『日本古代の儀礼と神祇・仏教』，歴史評論，859，2021年11月，歴史科学協議会，p.94，ISSN03868907
小倉慈司，口絵　葦浦継手手実（解説），正倉院文書研究，17，2021年11月，吉川弘文館，pp.101-102，ISSN13437291
小川宏和，新潟県立博物館監修『まじないの文化史―日本の呪術を読み解く―』，史学雑誌，130（８），2021年８月，史学会，pp.110-111，ISSN0018-2478
河合佐知子，「女院」から見直す日本史　Rethinking Japanese History through Examining Premier Royal Ladies（Nyoin），REKIHAKU，4，2021年10月，国立歴史民俗博物館，pp.56-57，ISBN9784909658630
中村光一，上野国府と平将門，ぐんま地域文化，56，2021年４月，ぐんま地域文化振興会，pp.6-７
三舟隆之，古代の食を再現する―みえてきた食と生活習慣病，日本農業新聞，2021年８月，日本農業新聞
【口頭報告・講演等】
稲田奈津子，歴史書編纂のはじまりと正倉院文書調査，文京アカデミア講座「史料編纂所と史料集の編纂―刊行開始120周年をむかえて―」，アカデミー文京，2021年５月29日，国内，招待有り，アカデミー文京
稲田奈津子，歴史書編纂のはじまりと正倉院文書調査，文京アカデミア講座「史料編纂所と史料集の編纂―刊行開始120周年をむかえて―」，アカデミー文京，2021年10月16日，国内，招待有り，アカデミー文京
稲田奈津子，日本古代の墓誌と東アジア，東京大学ヒューマニティーズセンター第41回オープンセミナー「東アジアのなかの墓誌」，オンライン，2021年９月３日，国内，招待有り，東京大学ヒューマニティーズセンター
稲田奈津子，日本古代的殯（mogari）与女性，「東亜宗教与王権」工作坊，オンライン，2021年12月10日，国際，招待有り，台湾中央研究院「東亜文化意象的博物書写与物質文化」主題計画・科技部「年号与東亜古代王権」専題計画
稲田奈津子，東アジアの古代儀礼を復元する―西域・長安・平城京，トンボの眼講演会，オンライン，2021年12月14日，国内，招待有り，トンボの眼
小倉慈司，天皇制の歴史，特別講義，オンライン，2021年４月10日，国際，招待有り，エジプト・ミスル科学技術大学言語翻訳学部日本語学科
小倉慈司，伊勢物語の世界―その歴史的背景を探る，伊勢物語の世界―その歴史的背景を探る，朝日カルチャーセンター千葉，2021年７月17日，国内，招待有り，朝日カルチャーセンター千葉
小倉慈司，古代日本における「文書」の誕生，中世文書の様式と東アジアにおける国際比較，オンライン，2021年11月20日，国内，国立歴史民俗博物館
小倉慈司，写本の再調査による大日本古記録本『小右記』の補訂，『小右記』シンポジウム，オンライン，2021年12月18日，国内，招待有り，新古代史の会
小倉慈司，平城京大寺院における僧侶の生活―西大寺食堂院と僧房をめぐって，西大寺食堂院跡の古代食再現！シンポジウム，オンライン，2022年３月３日，国内，科研費「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」
小川宏和，古代の鵜飼と贄―『日本書紀』神武即位前紀戊午年八月条の背景，「日本書紀の成立と伝来」共同研究会，成城大学民俗学研究所，2022年１月22日，国内，招待有り，小林真由美
河合佐知子，Book Talk：Uncertain Powers,Winter 2022 Lecture Series at the Center for Japanese Studeis, the University of Michigan,Center for Japanese Studies, the University of Michigan（オンライン），2022年３月18日，国際，招待有り，Center for Japanese Studies，the University of Michigan，英語
河合佐知子，Persistence and Resilience：The Nyoin Institution and Female Contributions to the Continuation of Monarchical Power in Early Medieval Japan，Association for Asian Studies（AAS）Annual Conference，Hawaii，2022年３月27日，国内，AAS，英語
清武雄二，『延喜式』にみる野菜･果物，くらしの植物苑観察会第273回，くらしの植物苑，2021年12月18日，国内，国立歴史民俗博物館
清武雄二，「鮨鰒」が伝える食文化と古代日本史～平安時代の行政マニュアル『延喜式』を読み解く～，大手町アカデミア×人間文化研究機構，オンライン，2022年２月21日，国内，招待有り，人間文化研究機構・読売調査研究機構
早川万年，壬申の乱と東海地域，博物館特別展記念講演，岐阜市歴史博物館，2021年４月24日，国内，会招待有り，岐阜市歴史博物館
早川万年，延喜式諸刊本の特色，名古屋古代史研究会，名古屋大学，2021年８月29日，国内，名古屋古代史研究会
堀部猛，常陸と下総を結ぶ古代の道，土浦ミュージアムセミナー2021，土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場，

2021年６月27日，国内，招待有り，土浦市立博物館
三舟隆之，古代の麺のルーツ「索餅」，うどん学会第18回全国大会，オンライン，2021年９月19日，国内，招待有り，日本うどん学会
三舟隆之，古代の食の再現，第21回ふちゅう歴史フォーラム，広島県府中市，2021年11月27日，国内，招待有り，広島県府中市教育委員会
三舟隆之，古代史料に見える鮎と鮎鮨，第４回フナズシ研究会，オンライン，2022年２月19日，国内，招待有り，龍谷大学
三舟隆之，浦島説話に見える不老不死への憧れ，東京女子医科大学看護学会第17回学術集会，オンライン，2021年10月２日，国内，招待有り，東京女子医科大学看護学会
三舟隆之，三河の古代寺院と造営氏族，公開シンポジウム「伊保谷からみた豊田市の古代」，豊田産業文化センター，2022年３月13日，国内，豊田市
三舟隆之，西大寺食堂院跡出土の果実種実と古代食の再現，西大寺食堂院跡の古代食再現！シンポジウム，オンライン，2022年３月４日，国内，主催者，科研費「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」
【データベース】
2021年８月　khirin-aにて当館蔵土御門本『延喜式』のIIIFによるカラーデジタル画像を正式公開
2021年12月　延喜式関係論文目録データベース第六次公開（データ増補）
2022年４月15日　khihin-tにて「デジタル延喜式 Engi shiki Database」の公開開始

５．全期間の研究成果

本プロジェクトは2014年10月より準備研究をスタートし，2016年度から本格的に研究を開始した。達成目標として①分野の枠を越えた共同研究，②『延喜式』研究の垣根の開放，を掲げ，具体的には古代史（文献史学）以外の分野との協働，写本画像・校訂本文・現代語訳・英訳および文献目録データベースの構築を掲げた。

以下，６年間にわたる研究成果について簡単にまとめて述べたい。

(01) 写本系統・版本修訂過程の解明

これまで近世写本の系統について充分に明らかにされてこなかったが，近年，知られるようになった写本も含めて検討したところ，一条家本系統の写本のうち，当館蔵土御門家旧蔵本（以下，土御門本）は京都大学附属図書館所蔵近衛家旧蔵本と関係が近く，土御門本の誤写等を近衛家本にて正せることが明らかとなった。近世写本のなかでは，他に天理大学附属天理図書館所蔵梵舜等書写本，京都国立博物館所蔵京都博物館本，宮内庁書陵部所蔵壬生家旧蔵本，国立公文書館所蔵慶長写本が土御門本・近衛家本と同系統の善写本であり，古写本以外ではこれらの写本を重視する必要があることが判明した。ただし巻次によって書写者・書写態度が異なる写本がまま存在することから，より精緻に研究を進めるには，巻次ごとに検討を深めていく必要がある。
また版本については，大和文華館所蔵鈴鹿文庫本が慶安印本と考えられる。慶安印本に先立つ正保刊本の可能性がある版本として高良大社所蔵本が見出され，今後の検討を俟つ。鈴鹿文庫本などいくつかの版本には，現存しない写本による書入が見られるものがあり，検討を要することも確認された。

なお，本プロジェクト終了直後に，新たな写本や現所在未確認であった写本の存在が確認された。今後の公開を待って，検討を加えていきたい。

(02) 本文校訂

写本系統がおおよそ判明したことにより，本文校訂を進めることが可能となった。ただし個別の本文校訂には内容の吟味読解が不可欠であること，また若手研究者育成とも結びつけて複数の研究者によって作業を進める体制をとったことによる方針統一の検討を要したこともあり，最終的には，全50巻中，巻５・11・14・17・39の４巻を完成させるにとどまった（他に最終修訂段階が２巻）。後述するように，ネットによる本文校訂公開もおこなったが，紙媒体とネットでは校訂の示し方に差異を設けた方が良いことがわかり，今後の検討課題である。

(03) 現代語訳

本文校訂が終了した巻について，さらに内容を深く検討することと歴史学研究者以外の活用を念頭において，現代語訳を進めた。完成したのは巻11と巻17の２巻である。現代語訳の読者としてどう想定するかは難しい問題であるが，古代史の専門用語はできる限り使用しないよう努力した。

(04) 英訳

英訳は本文校訂・現代語訳がなされた後に進められるべき作業であるため，2018年度から準備を開始し，本格的スタートは2019年度からとなった。アメリカで前近代日本史を学んでいる若手研究者の紹介を受け，研究協力者と

して日本に招き，2019年に英訳検討のワークショップを開催したが，その中心的役割を果たしていた南カリフォルニア大学の博士研究員であった河合佐知子氏が2020年より当館の特任助教となったこと，また協力を依頼した院生が日本に留学したり，博士号を取得して日本学術振興会外国人特別研究員に採用されたりしたことは幸運であった。コロナ禍によりオンライン開催ではあったものの，2021年12月18日～19日（日）に国際研究集会「国境を越える『延喜式』」が開催できたことは大きな成果であり，同集会に参加した日本側若手研究者にとっても有意義な体験となった。2021年度末までに完成した英訳はまだ１巻分にとどまり，特にネットにおける注の示し方など，まだ課題が残されているが，２巻分はまもなく完成見込みである。

（05）TEI・デジタル延喜式

東京大学大学院生の小風尚樹氏が研究協力者としてTEIに取り組み，2017年11月の「TEI 2017 VICTORIA」にて『延喜式』の単位表記に関するTEI拡張スキーマについての考察を発表したところ，幅広い関心を喚起し，単位表記のTEIタグセットがガイドラインに採用されることにつながるなど，日本語史料の取り扱いに関して国際的に取り組むためのきっかけを提供する重要な貢献となった。

2021年８月にkhirin-aにて土御門本『延喜式』のIIIFによるカラーデジタル画像を正式公開した（https：//khirin-a.rekihaku.ac.jp/database/engishiki）。2022年４月20日には「デジタル延喜式 Engi shiki Database」の正式公開（https://khirin-t.rekihaku.ac.jp/engishiki/）を開始した。これは複数写本の校合作業の成果をTEI で構造化し，IIIF 画像と 校訂本文・現代語訳・英訳のTEI ファイルを紐づけるよう構造化することで，国際標準に準拠したシステムを開発したものである。校訂本文は巻５斎宮・巻11太政官・巻14縫殿寮・巻17内匠寮・巻39正親司を，現代語訳は巻11太政官・巻17内匠寮・巻39正親司を，英訳は巻39正親司を公開した。

（06）延喜式関係論文目録データベース

これまで一般に広く公開された日本古代史の論文目録データベースは存在していなかったため，限定公開を実施している法政大学国際日本学研究所の小口雅史氏の協力を得て，虎尾俊哉編『訳注日本史料　延喜式』（集英社2000～2017年）の注釈において挙げられた論考の他，『延喜式』に関わる古代史･技術史関係論文を登載した目録データベースの作成を開始した。このうち延喜式研究会会誌『延喜式研究』１～30（1988～2015年）に掲載された論考については，許諾が得られたものはPDF公開を行なっている。2019年３月28日が第一次公開（14,185件）で，順次データを増補し2021年12月には第六次公開として計77,910件のデータを公開している（主として著者名の一字目の読みが「さ」行まで）。

（07）若手研究者育成

研究組織は年齢層が幅広くなるよう留意した。校訂本文検討や現代語訳，英訳，TEI，全体研究会・国際研究集会等での報告，長鰒加工実験など，研究活動に若手研究者に積極的に関わっていただき，期間中４名の博士後期課程院生をRAとして雇用した。うち２名は常勤の研究職に就職した（２名は大学院に在籍中）。また共同研究員であったRPD１名は大学常勤教育職に就職し，資料整理補助業務に従事した博士後期課程院生１名および博士前期課程院生１名は博物館に学芸員として就職した。研究協力者として参加した博士後期課程院生も，１名は大学常勤教育職に就職し，１名（外国人）は日本学術振興会外国人特別研究員となった。

この他，2021年度に２回にわたり史料に関する講演会をオンラインで実施し，講演会記録集を刊行した。

（08）国際的視点からの研究

『延喜式』の規定のなかには広く古代東アジア文化の影響を読み取れるものが見られる。そうした観点からの研究として，『延喜式』と韓国出土木簡に見える薬物について検討を加えた三上喜孝「慶州・雁鴨池出土の薬物名木簡再論―古代東アジアの医薬文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』218（2019年）等の成果を挙げることができた。また海外における『延喜式』の研究史についても，山口えり「海外における『延喜式』の研究状況―『延喜式』の翻訳書を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』218にまとめられた。それらを承けつつ，国際研究集会の場（（04）参照）や『国立歴史民俗博物館研究報告』誌上において日本・海外の若手研究者が成果を公表しつつある。人文情報学における成果については（05）参照。

（09）他分野との協働研究

人文情報学関連は（05）に記したが，主計式分科会には考古学研究者が参加し，協力してデータベース掲載を念頭に置いた土器イラスト作成を行ない，2022年３月19日に古代土器シンポジウムをオンライン開催して成果発信した（（10）参照）。水産学･食品学関連は（12）にまとめて記す。その他の分野では，『国立歴史民俗博物館研究報告』218に「遺跡発掘調査報告書に基づく『延喜式典薬寮』に記述された「諸国進年料雑薬」の桃仁の自給について」（植物学），「古代の鍍金と内匠式」（金属加飾）などが挙げられる。

（10）学界への成果発信

期間中，全体研究会を12回公開にて開催した。対面で開催していた時期でも毎回30名以上の参加者があり，2020

年度のオンライン開催には40名以上が参加した。2019年12月に中間報告として『国立歴史民俗博物館研究報告』218号を刊行し，研究概要および24本の論考を掲載した（総頁数508頁）。このほかにも毎年度多数の論考・書籍を刊行し，九州史学研究会（2017年）や皇学館大学史学会（2019年）等の学会にて講演・口頭報告等を実施した。2021年度には２回にわたり，史料学に関するオンライン講演会を開催し，2022年３月19日には古代土器シンポジウム「器名・器形・用途・貢納―正倉院文書・延喜式にみえる土器」をオンラインにて開催し，参加者総数117名に及んだ。また同年３月26日には新古代史の会と共催にてオンライン研究会を実施した。2022年中に『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号への投稿原稿を取りまとめ，2023年度中の刊行をめざす。

（11）社会への成果発信

キックオフを兼ね，2016年８月23日～９月19日に特集展示「『延喜式』ってなに！？」を開催し，会期中に歴博フォーラムを開催した。2017年４月から６月にかけては人間文化研究機構と共催して文部科学省エントランス企画展示「古代の百科全書『延喜式』に学ぶ，いにしえの暮らし」を開催した。このとき，古代の貢納物としての長鰒復元模型やアワビ採取，長鰒加工，都への長鰒貢納，天皇の食膳等のイラストを作成した。また2018年３月～５月開催の歴博企画展示「世界の眼でみる古墳文化」において当プロジェクトメンバーが延喜諸陵式関係展示を担当した。2018年にはモバイル型可搬展示キットを制作し，2019年３月より展示を行なった（翌年度６月まで）。このキットは2019年度には成田市芸術文化センター（７月18日～８月18日），日本科学未来館（10月20日）にて，2021年度には当館（2022年１月18日～２月13日）にても展示した。2020年３月には当館刊行の綜合情報誌『歴博』219にて特集「ひろがる『延喜式』」を組み，５名の論考を掲載した。2021年３月には清武雄二『アワビと古代国家　『延喜式』にみる食材の生産と管理』（ブックレット〈書物をひらく〉24，平凡社，100頁）を刊行，2022年２月21日には人間文化研究機構・読売調査研究機構主催による無料オンライン講座を行ない（清武雄二「「鮨鰒」が伝える食文化と古代日本史～平安時代の行政マニュアル『延喜式』を読み解く～」），参加者は329名を数えた。

（12）大学・企業等との連携

期間中，東京医療保健大学（2016年４月～）・法政大学国際日本学研究所（2016年７月～）・東海大学海洋学部（2019年９月～2022年３月）と交流協定を結び，連携して研究を進めた。いずれも共同研究員所属機関である。東京医療保健大学については卒研ゼミ活動に対し，研究計画策定支援，成分分析支援などを行なった。また同大研究者が代表を務める科研費に当プロジェクト代表が研究協力者（「古代食の総合的復元による食生活と疾病の関係解明」2017～2019年度）・研究分担者（「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」2020～2024年度予定）として参加している。法政大学国際日本学研究所は（06）に記した延喜式関係論文目録データベース作成において協力を受けており，当プロジェクトからは同大学日本古代史関係研究文献目録データベースに協力している。東海大学海洋学部との連携は，総合地球環境学研究所所属であった共同研究員が同大学に異動したことにより開始したもので，塩カツオ商品開発プロジェクト等に協力した（2019年度～）。また紹介を得て，静岡県水産技術研究所・株式会社にんべん・株式会社田子丸等にて調査を行なうことができた。この他，広島市立大学にて共同研究員が『延喜式』英訳に取り組むゼミ活動を実施した。

大学以外では，神宮司庁の協力を得て神宮御料鰒調製所の見学を行ない，長鰒加工実験の参考とした。長鰒加工実験・鮨鰒加工実験においては，味の素食の文化センター・味の素株式会社食品研究所の協力を得て，成分分析を実施した。味の素株式会社とは学術協力にかかる契約を結んだ（2021年９月６日～2022年３月31日）。また森本錺金具製作所に御協力いただいて金アマルガム法による鍍金技術についての調査を行なった。その他，集英社『訳注日本史料　延喜式』下（2017年12月刊）の刊行にも協力した。

（13）他のユニットおよび主導機関（国文学研究資料館）との連携

主としてTEIの検討から国立国語研究所とともに分科会を開催したほか，「日本語歴史コーパス 奈良時代篇III祝詞」の作成に協力した。主導機関主催の企画では，2016年７月29～30日第２回日本語の歴史的典籍国際研究集会（於国文学研究資料館）にポスター発表，2017年７月28～29日第３回日本語の歴史的典籍国際研究集会（於国文学研究資料館）に口頭報告およびポスター発表を行ない，2019年２月17日開催シンポジウム「書物を耕す―総合書物学の挑戦」（於奈良女子大学）ではパネルを組んで３名が口頭報告を行なった。2022年12月26日開催シンポジウム「「総合書物学」の現在」（オンライン）では，パネル「『延喜式』研究のこれから」として３名が口頭報告し，これまでの研究活動を総括した。この他，2020年度より総合研究大学院大学文化科学研究科共通科目「総合書物論」に協力して授業を担当した（https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sougoushomotsu.web/shomotsutxt.html）。

（14）今後の方向性

６年間を通じた活動は多岐にわたり，多くの成果を挙げたが，本文校訂・現代語訳・英訳の作成は計画当初に想定した分量まで進めることができなかった。次期プロジェクトではある程度，目標の的を絞って研究を進めることとしたい。

6．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

（館外）

相曽　貴志　宮内庁書陵部図書課・首席研究官
天野　　誠　千葉県立中央博物館・上席研究員
荒井　秀規　藤沢市生涯学習部郷土歴史課・主査上級（学芸員）
石川　智士　東海大学海洋学部・教授　（2017年度より）
稲田奈津子　東京大学史料編纂所・准教授
小川　宏和　武蔵野美術大学美術館・図書館民俗資料室・学芸員　（2017年度より　元資料整理等補助員）
小口　雅史　法政大学文学部・教授
神戸　航介　宮内庁書陵部編修課・研究員　（2019年度より　元ＲＡ）
倉本　一宏　国際日本文化研究センター・教授
小風　尚樹　千葉大学人文社会科学系教育研究機構・助教　（2020年度より　元研究協力者）
酒井　清治　駒澤大学名誉教授
中村　光一　上武大学ビジネス情報学部・教授
中村　覚　　東京大学史料編纂所・助教　（2020年度より）
西川　明彦　宮内庁正倉院事務所・所長
早川　万年　岐阜大学教育学部・非常勤講師
堀部　　猛　土浦市立博物館・市史編さん係長
町　泉寿郎　二松学舎大学文学部・教授
三舟　隆之　東京医療保健大学・教授
三輪　仁美　宮内庁書陵部編修課・研究員　（2016年９月より　元ＲＡ）
山口　えり　広島市立大学国際学部・准教授
余語　琢磨　早稲田大学人間科学学術院・准教授
Ethan Segal ミシガン州立大学歴史学部・准教授

（館内）

井上　正望　本館研究部・科研費支援研究員（2020年度より）
河合佐知子　本館研究部・特任助教　（2020年度より）
清武　雄二　本館研究部・特任助教
後藤　　真　本館研究部・准教授
鈴木　卓治　本館研究部・教授
仁藤　敦史　本館研究部・教授
林部　　均　本館研究部・教授
村木　二郎　本館研究部・准教授
○三上　喜孝　本館研究部・教授
◎小倉　慈司　本館研究部・教授

古田　一史　ＲＡ　（～2011年10月）
前野　智哉　ＲＡ　（2012年１～３月）

（４）ネットワーク型基幹研究プロジェクト日本関連在外資料調査研究・活用 ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用 ―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築― 2016～2021年度

（プロジェクト代表者　日高　薫）

1．目　的

本研究は，ヨーロッパ各地に現存する19世紀日本関連資料の調査をおこない，それらをデータベース公開，展示，シンポジウム，セミナー，教育プログラム，大学における教育など，多彩な方法により効果的に活用することによって，日本研究や日本文化理解を促進することを目的とする。３つの異なる地域における異なるレベルの事業を，現

地の博物館・大学などとの学術協力協定のもと，協同で展開することにより，日本・現地双方へ成果の還元を図るとともに，日本文化発信の国際連携モデルの構築を目指すものである。

（1）ウィーンを中心としたシーボルト（子）関係資料の調査研究では，シーボルトの子どもたちの収集「もの資料」および文献資料の総合的調査に基づく《資源基盤型》の日本文化発信をおこなう。（2）イギリスにおける日本展示活性化事業は，日本資料の展示・活用方法を，現地の学芸員や教育普及担当者と共に検討し，モデルとなる展示（常設および企画）を各地で実現させていく《対話型》の発信スタイルをとる。（3）スイスにおける大学教育連携事業は，現地大学および美術館・博物館と協力関係を保ちながら，資料調査と展示協力の過程において，学生および学芸員の教育やスキルアップを図るもので，現地において次世代の日本紹介を担うことのできる研究者の養成を手助けする《人材育成型》の事業を推進している。

2．今年度の研究計画

今年度は，基本計画に掲げた目標を達成するため，プロジェクト最終年度のとりまとめとして，ウィーン（オーストリア・ドイツ），イギリス，スイスの各チームが推進してきた調査研究を総括する論文集・報告書の刊行をおこなうこととした。在外資料の調査や展示・教育を通じた活用のあり方に関しては，オンライン国際シンポジウム等の成果をもとに，日本文化発信と国際連携の問題点抽出および今後の展望を共有する報告書を刊行する。
また，新型コロナウイルス問題によって延期された調査，シンポジウム，データベース公開，展示開催等については，すでに所期の目標を概ね達成ずみであり大きな問題は生じないが，状況が改善されれば可能な限り実施することを目指した。教育事業に関しても，オンラインでの実施を計画した。

3．今年度の研究経過

【総括チーム】

（1）国際連携展示

① ジュネーヴ市立アリアナ美術館における企画展示は，新型コロナウイルス感染拡大のなか，開催館の努力により，無事に終幕を迎えた。また，同展示図録を国内の美術館や博物館，大学等に配布した。

② ジュネーブ市立版画キャビネット所蔵の摺物に関する調査研究成果を，企画展示として開催し，展示図録をオンライン頒布した。

③ ダラム大学東洋美術館における企画展示の準備に協力し，共同開催した。

（2）シンポジウム

① 新型コロナウイルス感染拡大によって延期となったウィーンにおける国際シンポジウム「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション―さらなる洞察」をオンラインで開催した。

② 本プロジェクトを含めた過去12年以上の期間にわたるフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト関係資料の調査研究を総括する国際シンポジウムを，オンラインで開催した。

③ ジュネーヴ市立アリアナ美術館における企画展示に関連する国際シンポジウムをオンラインで開催した。

④ 上記シンポジウムと過去に開催した２回のシンポジウムの記録を掲載するプロジェクトの最終報告書を刊行した。

（3）論文集

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト研究に関する論文集を，ヴュルツブルクのシーボルト博物館との協力により，ドイツおよび日本において刊行した。

（4）その他

① ホームページ，ニューズレターにより情報発信をおこなった。

② 上記（2）③のシンポジウムに，チューリッヒ大学やバーゼル大学の大学院生たちを参加させ，若手研究者の発表の機会を与えた。

【A　ウィーン・チーム】

（1）現地調査

予定していたウィーン世界博物館所蔵，ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家，ヴュルツブルクにおける調査撮影はすべて実施することができなかった。

（2）データベース

① 「データベースれきはく」内の「シーボルト父子関係資料データベース」にウィーン世界博物館所蔵資料（もの資料）の新規データを追加した。

② データベースれきはく」内の「シーボルト父子関係資料データベース」にブランデンシュタイン城所蔵の

シーボルト父子関係史料の新規データを追加した。

（3）シンポジウム

① ミュンヘン五大陸博物館におけるフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト収集資料の調査研究や，国内巡回展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」(2016―2017)，国際連携企画展示「Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten」（邦題：「日本を集める―シーボルトが紹介した遠い東の国」）（2019―2020）を振り返り，当該分野の研究を総括する国際シンポジウム「新しいシーボルト研究への誘い― シーボルト（父）関連資料の基礎的な調査・研究・活用事業で考えたこと― Einladung zur neuen Siebold-Forschung ―Gedanken zum Projekt für die Materialien mit Bezug zu Philipp Franz von Siebold」を，2022年１月15日にオンラインで開催した。

② ウィーン世界博物館との共催により，国際シンポジウム「ハインリッヒ･フォン･シーボルトのコレクション―さらなる洞察　Neue Einblicke in die Heinrich von Siebold-Sammlung」を，2022年３月14日にオンラインで開催した。

（4）論文集

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト研究に関する論文集を，ヴュルツブルクのシーボルト博物館との協力により，ドイツおよび日本において刊行した。

【B　イギリス・チーム】

（1）現地調査

予定していたグラスゴー博物館機構等における現地調査は，すべて実施できなかった。

（2）展示

ダラム大学東洋博物館との連携による新収蔵の版画コレクションを現地で活用する「Monogatari：the art of storytelling in Japanese woodblock prints」展を共催した。

（3）学会開催など

① 国際交流基金ロンドンオフィス主催ウェビナー「Up Close and Personal：Curators' Treasures in a Castle, Palace, and Manor House」に協力し，メンバーの三木美裕（国立歴史民俗博物館客員教授）がモデレーターを務めた。

② スコットランド美術史学会との共催により，研究大会「スコットランドと日本」を開催した（2022年２月10日，対面およびオンラインのハイブリッド開催）。

（4）報告書

イギリス・チームにおける６年間の活動をわかりやすく伝えるブックレットを刊行した。

【C　スイス・チーム】

（1）展示

① 2020年12月11日よりジュネーヴ市立アリアナ美術館において開催中の国際連携展示「Chrysanthèmes, dragons et samouraïs. La céramique japonaise du Musée Ariana（菊・龍・サムライ―アリアナ美術館所蔵の日本陶磁）」は，新型コロナウイルス感染拡大の影響で一部イベント等の開催を中止したものの，10,236人の入館者数を得て無事に終了した。

② ジュネーヴ市立版画キャビネット所蔵の摺物（浮世絵版画）の展覧会「SURIMONO」をジュネーヴ美術歴史博物館において開催した。

（2）シンポジウム

チューリッヒ大学美術史研究所東洋美術史学科との共催で，国際シンポジウム「スイスに伝えられた日本陶磁ジュネーヴ市立アリアナ美術館秘蔵コレクション」を2022年１月６日にオンライン開催した。

（3）教育事業

① チューリッヒ大学において，オンライン講義「日本語を解読する―近世の鯰絵版画を読む」を実施した（全７回，講師：久留島浩，2021年９月～12月）

② 上記（２）のシンポジウムに，チューリッヒ大学やバーゼル大学の大学院生たちを参加させ，若手研究者の発表の機会を与えた。

４．今年度の研究成果

【研究成果の概要】

新型コロナウイルス問題によって延期された事業のうち，シンポジウムに関しては，規模を縮小したかたちではあるが，オンラインで開催し，予定されていたイギリスおよびスイスにおける企画展示を開催することができた。海外調査については，全く実施することができず，それによりデータベースについても予定していたすべての資料データを公開することはできなかったが，主要な資料の調査データは公開済みであり，所期の目標を概ね達成したといえる。また，コロナ下の取り組みとして，上記のオンラインシンポジウムや，前年度も実施したウェビナーのほか，新たにチューリッヒ大学によるオンライン講義を実施したが，くずし字解読はオンラインに適したテーマで教育効果に対する手応えを得ることができた。

また，プロジェクト最終年度のとりまとめとして，これまで継続してきたシーボルト（父）研究の最新成果を反映した論文集をドイツおよび日本で交換したほか，各チームが推進してきた調査研究に関わるシンポジウム報告を収録する報告書を刊行し，日本文化発信と国際連携の問題点を抽出するとともに，今後の展望を共有することができた。

【学会・シンポジウム・ウェビナー】

① 国際交流基金ロンドンオフィス主催ウェビナー「Up Close and Personal：Curators' Treasures in a Castle, Palace, and Manor House」への協力

主　　催：国際交流基金ロンドンオフィス
協　　力：国立歴史民俗博物館
開催日時：2021年８月４日　19：30-21：30
進　　行：三木美裕
報 告 者：スザンヌ･グローノウ（ナショナルトラスト･アーディック邸学芸員），レイチェル･ピート（英国ロイヤルコレクショントラスト学芸員補），メアリー･レッドファーン（チェスタービーティライブラリー学芸員）

本ウェビナーは，イギリスおよびアイルランドの美術館等が所蔵する日本資料を，「学芸員のおすすめ」をとりあげつつ，今後の「ニューノーマル」の状況下で最大限に活用するための方法について議論する目的で開催された。これまでのイギリスにおける活動の成果に基づき，三木氏が人選，コーディネートをおこない司会を担当した。前年度開催のウェビナーが好評であったため，続編として構成されたもの。

② 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「スイスに伝えられた日本陶磁　ジュネーヴ市立アリアナ美術館秘蔵コレクション」

主　　催：人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館，チューリッヒ大学東洋美術史研究室
開催日時：2022年１月６日　17：30-20：10（日本時間）９：30-12：10（スイス時間）オンライン開催
参加人数：102人

（報告）

・日高薫（国立歴史民俗博物館）「開会の挨拶および趣旨説明」
・ハンス・ビャーネ・トムセン（チューリッヒ大学）「アリアナ美術館の日本陶磁コレクション」
・大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）「『カ』銘の有田磁器について」
・渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）「薩摩焼からSATSUMAへ」
・荒川正明（学習院大学文学部）「日本陶磁に見る文様意匠の変遷～近世から近代へ」
・チューリッヒ大学東アジア美術史学科・ジュネーヴ市立アリアナ美術館「アリアナ美術館の陶磁器調査」

③ 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション―さらなる洞察　Neue Einblicke in die Heinrich von Siebold-Sammlung」

主　　催：人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
開催日時：2022年１月15日 18：00-21：00（日本時間）10：00-13：00（ドイツ時間）オンライン開催
参加人数：79人

（報告）

・久留島浩（国立歴史民俗博物館）「開会の挨拶および趣旨説明」
・日高薫（国立歴史民俗博物館）「シーボルト関係資料の調査・研究・活用事業の成果と課題」
・宮坂正英（長崎純心大学客員教授）「ブランデンシュタイン家所蔵シーボルト関係文書調査研究の経緯と課題」
・ブルーノ･リヒツフェルト（ミュンヘン五大陸博物館）「国立歴史民俗博物館シーボルト･プロジェクトがミュンヘン五大陸博物館及び展覧会「日本を集める」にもたらしたもの」

・湯川史郎（ボン大学）「越境的実践者としてのトラウツとシーボルト 総合的な視点を再獲得するための方法としての『Biographie』の可能性について」
・小林淳一（東京都江戸東京博物館）「異文化理解としての在外日本コレクション：パンデミックの後に」
・沓澤宣賢（東海大学名誉教授）「コメント」
・ヤン・シュミット（ルーヴェン大学）「コメント」

④　スコットランド美術史学会 研究大会「スコットランドと日本」
主　　催：スコットランド美術史学会，国立歴史民俗博物館
開催日時：2022年２月10日 10：00-14：20・11日 10：00-13：00（スコットランド時間）
会　　場：スコットランド国立博物館およびオンラインのハイブリッド開催
参加人数：163人
（プロジェクトからの報告）
・三木美裕「Keynote presentation」
・日高薫（国立歴史民俗博物館）「Objects to move：Perspectives of overseas Japanese lacquer ware」
・大久保純一（国立歴史民俗博物館）「Study of Ukiyo-e, landscape in later Edo period」

⑤　国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション―さらなる洞察」（“Neue Einblicke in die Heinrich von Siebold-Sammlung”）
主　　催：スコットランド美術史学会，国立歴史民俗博物館
開催日時：2022年３月14日 17：30-21：00（日本時間） ９：30-13：00（オーストリア時間）オンライン開催
参加人数：56人
（報告）
・ジョナサン・ファイン（ウィーン世界博物館館長）「開会の挨拶」
・ベッティーナ・ツォルン（ウィーン世界博物館）「フランツ・ヘーガーの日記から―1885年エルバッハ」
・山崎幸治（北海道大学 アイヌ・先住民研究センター）「交差する記録―ハインリッヒの北海道調査を中心に」
・日高薫（国立歴史民俗博物館）「明治の調べ―ハインリッヒ収集の楽器」
・シビル・ギルモンド（ヴュルツブルク大学/京都大学）「ハインリッヒ・フォン・シーボルトの「日本・中国展覧会」―ヴュルツブルク，1896/97年」
・堅田智子（流通科学大学）「さらなる洞察」を深めるために―シーボルト兄弟の日本コレクションのこれから―」
・ステファン・ケック（オーストリア科学アカデミー アジア文化・思想史研究所）「コメント」

【学術論文・口頭発表・その他刊行物等】

①　（論文集）ブルーノ・J・リヒツフェルト／ウド・バイライス／日高薫（責任編集），ヴュルツブルク・シーボルト博物館／人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館（編）『異文化を伝えた人々Ⅲ　シーボルトの日本博物館』（英文タイトル：『Transmitters of Another Culture III：Siebold’s Japan Museum』），2022 年３月31日，臨川書店
（分担執筆）
・日高薫「シーボルトが伝えようとした日本像を求めて―国際連携による在外資料調査とその活用―」
・アンドレア・ヒルナー「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796-1866）―ある日本研究家の生涯―」
・ブルーノ・J・リヒツフェルト「ミュンヘンの「シーボルト博物館」―フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの博物館に対する情熱―」
・ウド・バイライス「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの晩年（1865-1866）」
・ハンス・ビャーネ・トムセン「17世紀から19世紀の日欧相互理解」
・ブルーノ・J・リヒツフェルト，ハンス・ビャーネ・トムセン「【史料】モーリッツ・ヴァーグナーによるフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトへの追悼文および死亡記事」

②　（論文集）Hrsg. von der Siebold-Gesellschaft e.V. Mit Beiträgen von Andrea Hirner, Kaori Hidaka, Bruno Richtsfeld, Udo Beireis und Hans Bjarne Thomsen.『Philipp Franz von Siebold（1796-1866）. Sammler und Japanforscher』），2022 年３月31日，AKAMEDON（電子書籍）
（分担執筆）
・Andrea Hirner, ‘Philipp Franz von Siebold（1796–1866）Ein Forscherleben für Japan’

・Udo Beireis, 'Philipp Franz von Siebolds letzte Jahre（1865–1866）'「
・Bruno J. Richtsfeld, 'Das „Siebold'sche Museum" in München'
・Hidaka Kaori, 'Welches Japanbild wollte uns Siebold vermitteln? – Eine Suche Zur Forschung und Verwertung des überseeischen Materials durch eine internationale Forschungskooperation
・Hans Bjarne Thomsen, 'Japans Blick auf Europa vom 17. bis ins 19. Jahrhundert'
・Hans Bjarne Thomsen, 'Europas Blick auf Japan vom 17. bis ins 19. Jahrhundert'
・Hans Bjarne Thomsen, 'Japan während der Tokugawa-Zeit'
・Bruno J. Richtsfeld, Hans Bjarne Thomsen, '（Moriz Wagner）Nachruf auf Philipp Franz von Siebold'

③（報告書）国立歴史民俗博物館編『海外で《日本》を展示すること　在外資料調査研究プロジェクト報告書』, 2022 年 3 月31日,

（分担執筆）
・日高薫「在外日本資料の調査から活用へ 国立歴史民俗博物館の研究プロジェクトがめざしてきたもの」
・日高薫「人文機構シンポジウム「海外で《日本》を展示すること―KIZUNA展からその意義を探る―」趣旨説明」
・デイヴィッド・アンダーソン「交流史を見つめ直す　ウェールズにおける特別展覧会『KIZUNA』の開催」
・三木美裕「ウェールズ国立博物館での「KIZUNA」展開催までの道のり」
・荒川正明「日本のやきものを飾る―海外美術館における展示事情」
・大久保純一，日高薫，デイヴィッド・アンダーソン，三木美裕，荒川正明「総合討論」
・日高薫「Exhibiting "Japan" Overseas　海外で《日本》を展示すること―海外のコンテクストと日本のコンテクスト」趣旨説明
・ハンス・ビャーネ・トムセン「西洋における日本美術とその展示」
・福岡万里子「万延元（1860）年遣米使節団が見せようとした『日本』」
・久留島浩「コメント」
・ハンス・ビャーネ・トムセン，チューリッヒ大学東アジア美術史学科「リモート調査の試み」
・後藤真「コメント」
・日高薫「スイスに伝えられた日本陶磁　ジュネーヴ市立アリアナ美術館秘蔵コレクション」開会の挨拶および趣旨説明
・ハンス・ビャーネ・トムセン「アリアナ美術館の日本陶磁コレクション」
・大橋康二「アリアナ美術館所蔵の『カ』銘の有田色絵磁器」
・渡辺芳郎「薩摩焼からSATSUMAへ」
・荒川正明「アリアナ美術館蔵日本陶磁コレクションに見る文様意匠の変遷～近世から近代を中心に」
・ハンス・ビャーネ・トムセン，チューリッヒ大学東アジア美術史学科およびジュネーヴ市立アリアナ美術館「アリアナ美術館の陶磁器調査」
・久留島浩「新しいシーボルト研究への誘い―シーボルト（父）関連資料の基礎的な調査・研究・活用事業で考えたこと―」趣旨説明
・日高薫「シーボルト関係資料の調査・研究・活用事業の成果と課題」
・宮坂正英「ブランデンシュタイン家所蔵シーボルト関係文書調査研究の経緯と課題」
・ブルーノ・リヒツフェルト「国立歴史民俗博物館シーボルト・プロジェクトがミュンヘン五大陸博物館及び展覧会「日本を集める」にもたらしたもの」
・湯川史郎「越境的実践者としてのトラウツとシーボルト 総合的な視点を再獲得するための方法としての『Biographie』の可能性について」
・小林淳一「異文化理解としての在外日本コレクション：パンデミックの後に」
・沓澤宣賢「歴博オンラインシンポジウム『シーボルト（父）関連資料の基礎的な調査・研究・活用事業で考えたこと―新しいシーボルト研究への誘い―』の報告者に対するコメント」
・ヤン・シュミット「コメント」
・久留島浩，日高薫，宮坂正英，ブルーノ・リヒツフェルト，湯川史郎，小林淳一，沓澤宣賢，ヤン・シュミット「総合討論」

④（報告書）三木美裕『イギリスで在外の日本コレクションを考える　対話型展示構築支援事業報告』2022 年 3 月31日，国立歴史民俗博物館

⑤（展示図録）Bénédicte De Donker・Christian Rümelin編『SURIMONO』, 2022年 3 月，Musée d'art et d'

histoire（電子書籍）

（論文）

・Hans Bjarne Thomsen, 'Poésie du « surimono »'

・Christian Rümelin, 'La collection d'estampes japonaises au Musée d'art et d'histoire'

⑥ （論文）Kaori Hidaka, 'Les laques japonais du château de Fontainebleau', Art et diplomatie. Les œuvres japonaises du Château de Fontainebleau, 2021年６月，Faton

⑦ （論文）日高薫「遣欧使節が贈った漆器　フォンテーヌブロー宮殿所蔵の漆工芸」『Art et diplomatie. Les œuvres japonaises du Château de Fontainebleau』, 2021年６月，Faton

⑧ （論文）堅田智子「」

⑨ （口頭発表）山崎幸治「1878年にハインリッヒ・フォン・シーボルトが集めたアイヌ民具」，北海道大学アイヌ・先住民研究センター　2020年度前期公開講座，2020年12月16日，オンライン開催

⑩ （論文）堅田智子「ウィーン万国博覧会後のジャポニスムをめぐって――「日本古美術展」とシーボルト兄弟寄贈日本コレクション」『1873年ウィーン万国博覧会――日墺からみた明治日本の姿』2022年３月，思文閣出版

⑪ （論文）青柳正俊「幕末・明治所期の名誉領事（商人領事）を探る―ドイツを事例として―」『人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用事業」若手研究者シンポジウム若手研究者シンポジウム報告書―在外資料がひろげる日本研究―』2022年３月，大学共同利用機関法人 人 間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト 日本関連在外資料調査研究・活用事業 プロジェクト間連携による研究成果活用（研究成果活用班），国際日本文化研究センター

⑫ （口頭発表）日高薫「フォンテーヌブロー宮殿の漆器について」オンラインシンポジウム「再発見！フォンテーヌブロー宮殿の日本美術―徳川幕府からフランス皇帝への贈り物―」，東京日仏会館，2021年４月17日

⑬ （口頭発表）福岡万里子「アメリカへの贈答品ースミソニアン機構所蔵の1860年遣米使節団コレクション」オンラインシンポジウム「再発見！フォンテーヌブロー宮殿の日本美術―徳川幕府からフランス皇帝への贈り物―」，東京日仏会館，2021年４月17日

⑭ （口頭発表）日高薫「Autour de l'exposition « Art et diplomatie. Les oeuvres japonaises du château de Fontainebleau（1860-1864）»」Festival de l'histoire de l'art，フォンテーヌブロー宮殿，2021年６月６日

⑮ （口頭発表）三木美裕「Curators' Treasures in a Castle, Palace, and Manor House」国際交流基金ロンドンオフィスオンラインウェビナー，2021年８月４日

⑯ （口頭発表）堅田智子「『洋学史研究事典』作業の実際」洋学史学会９月オンラインシンポジウム『洋学史研究事典』刊行記念座談会，2021年９月

⑰ （コーディネーター，司会）堅田智子「これからの洋学のはなしをしよう―地域と洋学，津山洋学資料館の取り組み―」洋学史学会若手部会主催オンラインワークショップ，2021年９月

⑱ （口頭発表）堅田智子「青木周蔵とアレクサンダー・フォン・シーボルト―「国家を診る医者」を目指した二人の外交官―」洋学史学会若手部会オンライン10月例会，2021年10月

⑲ （口頭発表）青柳正俊「幕末・明治所期の名誉領事（商人領事）を探る―ドイツを事例として―」人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用事業」若手研究者シンポジウム「在外資料がひろげる日本研究」，2021年11月２日

⑳ （口頭発表）堅田智子「ブランデンシュタイン城シーボルト・アーカイヴ所蔵名刺群にみる アレクサンダー・フォン・シーボルトと日独交流の様相」上智大学史学会第71回大会，2021年11月

【展示】

① 国際連携企画展示「Chrysanthèmes, dragons et samouraïs. La céramique japonaise du Musée Ariana（菊・龍・サムライ―アリアナ美術館所蔵の日本陶磁）」展

会場：ジュネーヴ市立アリアナ美術館

会期：2020年12月11日～2022年１月９日（途中臨時休館あり）

主催：ジュネーヴ市立アリアナ美術館

協力：国立歴史民俗博物館，チューリッヒ大学

入場者数：10,236人

② 国際連携展示「Monogatari：the art of storytelling in Japanese woodblock prints」

会場：ダラム大学東洋美術館
会期：2022年１月28日～５月15日（予定）
主催：ダラム大学東洋美術館，国立歴史民俗博物館
　ダラム大学の卒業生JP Scot氏によって2017年に寄贈された版画コレクションを紹介する展示準備の支援は2019年に着手したが，新型ウイルスの感染拡大により延期され，ようやく開催することができた。同コレクションに含まれる浮世絵版画の人物描写や物語性に注目し，多角的に紹介する展示が完成した。

③　国際連携展示「SURIMONO」
会場：ジュネーヴ美術歴史博物館
会期：2022年３月18日～８月21日（予定）
主催：ジュネーヴ美術歴史博物館
協力：国立歴史民俗博物館，チューリッヒ大学
　ジュネーヴ市立美術歴史博物館の版画キャビネット（Cabinet d'ArtsGraphiques）は，約100 点の日本の摺物版画の秀逸なコレクションを所蔵している。摺物とは，趣味人のあいだで配られたり交換されたりする目的で注文制作された非売品の版画である。新年の挨拶や役者の襲名披露等の祝い事で使用される摺物は，費用をいとわず最高級の豪華な彫摺技術で作られた。国内よりむしろ海外のコレクションにその例が多く見られ，ジュネーヴのコレクションも，まとまって紹介されることの少ない京都や大阪で制作された大判型の作品を豊富に含む点で貴重である。同館では，2014 年秋の歌舞伎関連浮世絵版画の展覧会の成功を受け，第二弾として摺物コレクションの展覧会を企画したが，狂歌，俳諧などの日本文学や，暦，舞台芸術をはじめとする日本特有の文化と密接な関係をもつ摺物の研究には，日本側の研究者の協力が不可欠であるため，チューリッヒ大学との連携で本展の実現のための調査研究に協力した。
・展示図録（電子書籍）Bénédicte De Donker・Christian Rümelin編『SURIMONO』, 2022年３月，Musée d'art et d'histoire

（分担執筆）ハンス・ビャーネ・トムセン（チューリッヒ大学），クリスチャン・リュメリン（ゲルマン国立博物館）
（協力）赤間亮（法政大学），小林ふみ子（法政大学），大久保純一（国立歴史民俗博物館）ほか

【メディア取り上げ，その他】

①　（書評）堅田智子「小菅信子編『日本赤十字社と皇室――博愛か報国か――』吉川弘文館，2021年」『自由思想』第160号，石橋湛山記念財団，2021年，44-45頁
②　（翻訳）堅田智子「アレクサンダー・フォン・シーボルト『東亜政論――1898年７月から1900年９月まで――』（１）」『鳴滝紀要』第31号，シーボルト記念館，2021年，59-81頁
③　（メディア取材）堅田智子「明治のアイヌ集落を実地調査　小シーボルト蝦夷見聞記」読売新聞文化部編『史書を旅する』中央公論新社，2021年，226-229頁
④　（コラム）久留島浩「国際シンポジウム『新しいシーボルト研究への誘い―シーボルト（父）関連資料の基礎的な調査・研究・活用事業で考えたこと―』の開催」『ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用 ニューズレター　Vol.6』2022年３月，国立歴史民俗博物館
⑤　（翻訳）青柳正俊「【史料】モーリッツ・ヴァーグナーによるフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトへの追悼文および死亡記事」『異文化を伝えた人々Ⅲ　シーボルトの日本博物館』2022年３月31日，臨川書店
⑥　（翻訳）青柳正俊「国立歴史民俗博物館シーボルト・プロジェクトがミュンヘン五大陸博物館及び展覧会「日本を集める」にもたらしたもの」『海外で《日本》を展示すること　在外資料調査研究プロジェクト報告書』，2022年３月31日，国立歴史民俗博物館
⑦　（翻訳）青柳正俊「（ヤン・シュミット）コメント」『海外で《日本》を展示すること　在外資料調査研究プロジェクト報告書』，2022年３月31日，国立歴史民俗博物館
⑧　（テレビ番組）日曜美術館「将軍からの贈り物　フランスの古城で新発見　幕末の美」2021年10月17日，10月24日，NHKEテレ１・東京
⑨　（テレビ番組）「フランスで新発見!幕末ニッポンの秘宝『将軍からの贈り物』」2022年１月15日，２月26日，NHKBSプレミアム

５．全期間の研究成果

本プロジェクトは，研究目的にあるように，ヨーロッパの３つの地域において多岐にわたる事業を展開してきた。

ここでは，プロジェクトの特色である「もの資料」を中心とした日本関連在外資料の大規模調査に基づくアーカイヴ化事業と，展示・教育における活用事業という観点から主な成果をまとめる。

（1）アーカイヴ事業としての調査研究とデータベース公開

① 「もの資料」の悉皆調査とマルチリンガル文献調査を融合した学際的研究の継続的推進

本プロジェクトの特色は，「もの資料」だけを調査するのではなく，それに関わる文献資料の調査も合わせておこない，ともにアーカイブ化するとともに，「もの資料」と文献とを結びつけた研究をおこなうことによって，在外資料を日本の歴史文化資源として有用なものとし，新たな歴史像を構築することを目指した点にある。その結果，後述するように，シーボルト自身が19世紀におこなった展示の復元的考察など，従来の当該分野の研究にはなかった新しい研究視点を提示し，多くの新知見を得ることができた。

② 資料情報の「共有化」のためのデータベース構築

「もの資料」に関しては，シーボルトの子どもたちによるコレクションの悉皆調査を主軸に順調に調査を進め，膨大な資料を全点画像付きデータベースとして公開することができた。新型コロナウイルス感染拡大のために，まる２年にわたり調査が実施できず，ウィーン世界博物館所蔵ハインリッヒ･フォン･シーボルト収集資料の調査は未了であるが，主要な資料については調査を実施済みであり，所期の目的は概ね達成できたといえる。

文献資料に関しては，ブランデンシュタイン城に所蔵される文書のデータベース公開を進めており，フィリプ・フランツ・フォン・シーボルト関係文書の欧文目録を公開したほか，アレクサンダー・フォン・シーボルト関係文書目録を新規公開した。このコレクションは個人所蔵であるため，所蔵者の意向により，画像に関しては，現状では歴博内のみで閲覧可能である。

上記の成果は，未公開資料を多く含む膨大なシーボルト関係「もの資料」および文献資料を，Web上で公開する汎用性の高いデータベースとして利用可能としたこと，画像についてもプロジェクト期間に限定されず長期にわたって公開できる点など，アーカイブ事業に求められる基本的な要件を十分に満たしていると考える。

③ 新規データベースの公開と，既存のデータベースの統合へ

さらに，プロジェクトでは，さらなる「共有化」を目指して，各所蔵機関が構築した既存のデータベースの統合への協議も継続してきた。国際シーボルトコレクション会議やシンポジウム等での働きかけにより，当初は画像の公開に消極的であった所蔵者の姿勢も次第に変化してきているため，現状では館内のみの限定公開しかおこなえていない史料の画像の一般公開についても，将来的には可能になる可能性が期待される。

（2）在外日本資料の展示活用

プロジェクトでは，日本関連在外資料の最も効果的な活用方法として，大小・様々なレベルでの海外共催展示開催や展示支援を実践してきた。研究成果公開や日本資料活用の手段は，報告書や論文集，パワーポイントを用いた口頭発表など様々であるが，研究の対象としているのが「もの資料」である以上，その研究に最も相応しく，必須の方法ともいえる「展示」を活用することが当然と考え，積極的に取り組んできた。以下に共催・協力した展示をあげ，その連携のあり方について説明を加える。

① 「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展（2016～2017年，国立歴史民俗博物館･東京都江戸東京博物館･長崎歴史文化博物館・名古屋市博物館・国立民族学博物館を巡回）

2016年度から2017年度にかけての国内巡回展示は，歴博の展示プロジェクト方式による展示構築に，海外のメンバーも参加するかたちで準備が進められた。この展示は，ミュンヘン五大陸博物館所蔵のシーボルト・コレクションの調査成果を広く紹介するともに，19世紀におけるシーボルト自身による展示を，われわれが展示主体となっておこなう展示の中に入れ子にして復元するという挑戦的な展示でもあった。つまり，展示を単なる成果公開のメディアとして利用するだけではなく，「展示すること」を通して歴史的展示表象について考えるという方法論的な試みをおこなった。結果として研究的性格が極めて色濃い展示となったが，むしろ積極的に受け止める観覧者が少なくなかったことは新たな発見であった。

② 「KIZUNA：JAPAN | WALES | DESIGN」展（2018年，ウェールズ国立博物館）

英国における概要調査をもとに，歴博が企画段階からから加わった本展示は，ウェールズ国立博物館の希望もあり，最終的に文化庁の海外展という位置づけの中で開催された。ウェールズまたは英国所在の日本美術とともに，日本から借用した重要文化財級の美術品が多数展示されたウェールズでは初めての大規

模な日本展となった。

プロジェクトでは，現地の視点や見せ方を尊重する立場をとったが，ウェールズ側の考え方が日本国内における展示の常識と異なる点も多く，両者のあいだに意見の違いが生じることも多かったが，お互いの対話によりこれらを解決して展示を完成させたことは意義深い経験である。

本展示は，プロジェクトが実施した共催展示のなかで，入場者数や，文化的インパクトの大きさという点で，最大の成功を収めた展示だったといえる。12週で58,500人の入場者を動員して，博物館の記録を塗り替えたが，これは首都カーディフとその周辺を合わせた人口が33万人であることを考えると，６人にひとりの市民が訪れた計算となる。在外日本資料の活用のポテンシャルの高さを感じさせるという意味で，希望を抱かせる成功となった。

③「Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten（日本を集める―シーボルトが紹介した遠い東の国）」展（2019～2020年，ミュンヘン五大陸博物館）

国内でおこなった巡回展の凱旋展示にあたる本展示は，展示の趣旨や，出品資料は国内展示とほぼ同じだったが，ドイツ側のメンバーによってドイツの観覧者向けのアレンジがなされた。日本側は，展示室内で放映する動画作成協力と日本語版ブックレットの作成などに，部分的に協力したかたちである。

④「Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold（明治の日本―ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から）」展（2020年，ウィーン世界博物館）

プロジェクトのメインの活動であるウィーン世界博物館所蔵のハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクションの調査研究成果の中間発表を兼ねた展示で，企画から出品資料の選定，カタログ執筆，編集まですべてを分担し，経費的にも応分の負担を負った完全な共同展示として開催した。ブランデンシュタイン城から新たに発見された４枚の写真をもとに，これらの写真に写っている資料のみを用いて展示を構成したが，４枚の古写真は，ハインリッヒが彼のコレクションをオーストリア帝立＝王立自然史博物館（世界博物館の前身）に寄贈する以前に，ウルムのエルバッハ城内に展示していた様子を撮影させたものであることが判明した。つまり，今回の企画展示では，ハインリッヒ・コレクションの全体像を示すことはできなかったが，ハインリッヒ自身のチョイスによる日本コレクションを示し，彼の眼を通した明治時代の日本を紹介するという趣旨となった。

なお，③ミュンヘン展および④ウィーン展は同じ年に開催し，両開催館が連携した広報活動を展開して，相乗効果によって日本に対する興味を高めることを狙ったものである。

⑤「 Chrysanthèmes, dragons et samouraïs. La céramique japonaise du Musée Ariana（菊・龍・サムライ―アリアナ美術館所蔵の日本陶磁）」展（2020～2022年，ジュネーヴ市立アリアナ美術館）

「SURIMONO（摺物）」展（2022年，ジュネーヴ美術歴史博物館）

上記２件のスイスにおける企画展示では，日本側は実際の展示準備には参加せず，資料の基本情報の提供・データベースの内容の更新という展示の基礎となる作業で協力し，図録への論文寄稿やオンラインシンポジウムの開催などで関わった。アリアナ美術館の展覧会では，同館が所蔵する17 世紀から20 世紀初頭にわたるスイス最大級の日本陶磁コレクション（780 点超）が初めて本格的に紹介され，その学術的意義が明らかにされた。本格的な図録も刊行され，今後の日本陶磁の研究の基礎資料となることが期待される。ジュネーヴ市立版画キャビネット所蔵の浮世絵版画による企画展も，同館所蔵の未紹介の摺物（約100点）を公開するもので，日欧の研究者の協力の成果として意義深い。これらの事業は，大学教育との連携事業の成果であり，この点については後述する。

⑥「The Emperor's New Clothes：Transforming 19th CenturyJapan（江戸から明治へ，皇族の衣装を通した変遷）」展（2018年，ダラム大学東洋博物館）

「Monogatari：the art of storytelling in Japanese woodblock prints（ものがたり）」展，主催：ダラム大学東洋博物館

イングランド北東部に位置するダラム大学においても，大学教育と連携しつつ，東洋博物館における企画展示や常設展示構築の支援事業をおこなってきた。二つの企画展示は，ともに同館が所蔵する日本美術を活用して開催された企画展示である。「The Emperor's New Clothes」展は，明治150年を迎えるにあたり，「日本にとっての近代とは何だったのか」をダラム大学博物館所蔵の日本関係資料と歴博から提供する浮世絵などの画像資料を用いて可視化する学生たちによる企画である。準備段階においては，あらかじめ歴博の所蔵する浮世絵等の画像が課題として与えられ，これを効果的に用いながら，展示の立案から出品資料の選択・配列等を学生が担当し，展示を完成させていった。

このように，プロジェクトでは，まずは在外資料調査の成果を反映した国内巡回展示を開催した後，現地の実情

に合わせた現地における在外資料の活用という方向にシフトして，多くの海外展示を共催した。在外日本資料の所蔵先の実態はそれぞれ異なるため，それらの状況に対応した様々なレベルでの連携を実践してきたが，このような可変的なプログラムを作ることこそが重要であり，今後継承すべきモデルとなったと考えている。

（3）在外日本資料の教育活用

① スイス・チューリッヒ大学との連携

スイスの事業は，チューリッヒ大学が推進するプロジェクトに，歴博が協力するかたちで進められた。スイス国内の日本美術を所蔵する美術館に，日本美術史を専攻する学生をインターンとして派遣し，その専門的知識や日本語能力を活かして所蔵品の整理や展示の補助を務めさせ，専門学芸員のいない美術館を支援すると同時に，学生たちにとってはまたとない実務経験の機会となるというものである。これに対して歴博側は，専門の研究者を派遣し，調査実習や講義をおこなうことにより，学生のみならず所蔵先の学芸員にハイレベルな知識供与や助言を与えて，スキルアップを図るという仕組みとした。アリアナ美術館所蔵陶磁器の基礎調査や，ロイトリンゲン大学所蔵ベルツ・コレクションの調査などを実施した。

2020年度以降は，パンデミックのためにこのような調査・展示実習が不可能となったため，チューリッヒ大学の正規のカリキュラムの中で，オンラインくずし字講座を開催したり，オンラインシンポジウムに学生のリモート調査に関する研究発表の場を与えるなど，状況に合わせた教育事業を進めたが，これらは，ポストコロナの教育連携のモデルとなりうる教育事業と位置づけられる。

② 英国における日本展示活性化のための事業

英国においては，あえてロンドン以外の都市を選び，博物館学芸員や教育普及担当者との対話を重ねることにより，現地の状況やニーズに応じた日本展示を各地で支援する事業を展開した。先述の「KIZUNA」展がその代表的な成果であるが，ダラム大学東洋美術館においては，常設展示のリニューアル構築支援や，企画展示開催への協力など，様々な手段を用いて日本展示の活性化を図る試みを実践した。学生によって企画立案された「The Emperor's New Clothes」展は，展示構築にあたって日本側研究者が指導・助言を与えながら，次世代を担う人材を育成するという新しい試みであった。実際に展示が完成したのちには，歴博から派遣した講師によるワークショップを開催し，学生によるプレゼンテーションや，講師のコメント・助言と質疑や討論がおこなわれ，学生たちにとっては，通常のカリキュラムでは得られない総合的な学習機会が与えられた。

③ 国内大学との連携

国内大学との連携における教育事業としては，博物館学，総合資料学等における講義，現地調査への学生参加，調査データ整理実習などの教育活動をすすめてきた。なかでも公立はこだて未来大学との連携は，双方にとって有意義な成果をもたらした。展示用のプロジェクション・マッピングや展示映像を，情報デザインやコミュニケーション・デザインの教育の一環として制作してもらい，研究の可視化の実践学習の素材を提供するとともに，成果物を巡回展示や海外のパートナー館の展示で実際に使用した。

このように，プロジェクトでは，調査・研究・展示と教育を組み合わせた，次世代研究者の育成の方法を模索してきた。現地にあるものを調査し，整理し，そこから資料を選択して一緒に展示をつくっていく，その際に現地の学芸員，院生・学生へのワークショップを行い，その後も現地で資料を保全・活用するための人材を育てていくということは，すぐに成果が出るものではないが，継続していく必要があると考えている。

（4）国際連携モデルとしての本事業の意義

以上のように，本プロジェクトは，在外日本資料の調査研究と活用に関するプラクティカルな試みを重ねる方法をとってきた。

調査研究の過程では，シーボルトが国外に持ち出した日本地図の発見など，多くの個別の研究成果が得られたが，それ以上に，本プロジェクトの目的である資料情報の「共有化」に向けて着実な進展が見られたことが評価できる。あわせて日常協業する機会の少ない「もの資料」と文献資料の研究者が，現地で資料を見ながら議論できる学際的な場が作れたことも今後の事業の展開に向けて大きな収穫となった。これまで境界領域にあって見過ごされがちであった膨大な「もの資料」に注目し，ひとつひとつの資料をくまなく調査し，資料が内包する情報を，概念化しコンテクスト化していく，そのこと自体が研究であることが認知されるべきであろう。そのような作業の積み重ねにより新たな歴史像を紡ぎ出していくことは，たいへん時間のかかる作業であるが，これからの在外資料調査に求められていること考えている。歴博による悉皆調査の成果によりシーボルトの第２次コレクションやハインリッヒ・コレクションに対する評価に変化が生じ，展示の復元など新しい視点も提示された。また，活用の面においては，

現地における企画展示の開催が，常設展示の充実への機運を高め，市民が日本への興味をもつ契機となっている。これらの点については，海外の研究者からも高く評価されているところであり，国際連携のモデル事業として一定の成果をあげられたのではないかと自己評価している。

（5）主な刊行物

［シンポジウム報告書・論文集］

・国立歴史民俗博物館編，国際シンポジウム報告書『シーボルト・コレクションから考える』国立歴史民俗博物館，2018年３月

・日高薫責任編集／国立歴史民俗博物館編『異文化を伝えた人々　19 世紀在外日本コレクション研究の現在』臨川書店，2019年３月

・日高薫／ベッティーナ･ツォルン責任編集, 国立歴史民俗博物館編『異文化を伝えた人々Ⅱ　ハインリッヒ･フォン・シーボルトの蒐集資料／ Transmitters of Another Culture II：The Collection of Heinrich von Siebold』, 臨川書店，2021年

・ブルーノ・リヒツフェルト／ウド・バイライス／日高薫責任編集，ヴュルツブルク・シーボルト博物館／国立歴史民俗博物館編『異文化を伝えた人々Ⅲ　シーボルトの日本博物館』臨川書店，2022年３月

・Siebold-Gesellschaf e.V.（Hrsg.）, Philipp Franz von Siebold（1796-1866）. Sammler und Japanforscher, Würzburg, 2022（電子書籍）

・国立歴史民俗博物館『海外で《日本》を展示すること　在外資料調査研究プロジェクト報告書』国立歴史民俗博物館，2022年

［史料集・調査報告書］

・国立歴史民俗博物館編，ブルーノ・リヒツフェルト，福岡万里子，堅田智子著『シーボルト日本博物館の概要と解説― 欧文原本・翻刻・翻訳／ Overview and Remarks on von Siebold's Japanese Museum：Original,Transcription, and Japanese Translation』国立歴史民俗博物館，2018年３月

・三木美裕著『イギリスで在外の日本コレクションを考える（対話型展示構築支援事業報告）』国立歴史民俗博物館，2022 年３月

［展示図録］

・『よみがえれ！ シーボルトの日本博物館』（展示図録）青幻舎，2016年

・KIZUNA：JAPAN | WALES | DESIGN, Amgueddfa Cymru-The National Museum of Wales, 2018（展示図録・英語／ウェールズ語／日本語）

・Museum Fünf Kontinente（Hg.）, Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten,Museum Fünf Kontinente, Munich, 2019（展示解説書・ドイツ語版）

・Museum Fünf Kontinente（Hg.）, Collecting Japan. Philipp Franz von Siebold's Vision of the Far East, Museum Fünf Kontinente, Munich, 2019（展示解説書・英語版）

・国立歴史民俗博物館編, 青柳正俊訳『日本を集める― シーボルトが紹介した遠い東の国』国立歴史民俗博物館，2020年（展示解説書・日本語版）

・Bettina Zorn, Hidaka Kaori（Hrsg.）, Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold, Wien, 2020（展示図録・ドイツ語／日本語）

・国立歴史民俗博物館編『明治の日本― ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から（論考編）』国立歴史民俗博物館，2020年10月（展示図録・論考編・日本語版）

・National Museum of Japanese History（ed.）, Japan in the Meiji Era：The Collection of Heinrich von Siebold（Essay Part）, National Museum of Japanese History, 2020. 10（展示図録・論考編・英語版）

・Weltmuseum Wien,（Hg.）, Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold, 2020（展示解説書・ドイツ語版）

・Weltmuseum Wien,（ed.）, Japan in the Meiji era：The collection Heinrich von Siebold, 2020（展示解説書・英語版）

・Ana Quintero Pérez, Stanislas Anthonioz（dir.）, Chrysanthèmes, dragons et samouraïs. La céramique japonaise du Musée Ariana, Éditions Georg, Genève, 2020（展示・フランス語／英語）

・Christian Rümelin, Bénédicte De Donker（dir.）, SURIMONO, Musée d'art et d'histoire, 2022（オンライン展示図録・http://institutions.ville-geneve.ch/fr/mah/expositions-evenements/expositions/surimono/ より無料ダウンロード可能）

6．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

（館外）

大場　秀章　東京大学・名誉教授
堅田　智子　流通科学大学・専任講師
工藤雄一郎　学習院女子大学・准教授
小林　淳一　東京都江戸東京博物館・副館長
齋藤　玲子　国立民族学博物館・准教授
佐々木史郎　国立アイヌ民族博物館・館長
笹原　亮二　国立民族学博物館・教授
櫻庭　美咲　神田外国語大学・講師
原田　　泰　公立はこだて未来大学・教授
保谷　　徹　東京大学史料編纂所・教授
松井　洋子　東京大学史料編纂所・教授
三木　美裕
宮坂　正英　長崎純心大学・客員教授
宮崎　克則　西南学院大学・教授
山崎　幸治　北海道大学アイヌ・先住民研究センター・准教授
横山百合子
ベッティーナ・ツォルン　ウィーン世界博物館・学芸員
ヨハネス・ヴィーニンガー
レイチェル・バークレイ　ダラム大学東洋博物館・学芸員
ジェニファー・メルベル　スコットランド・ナショナルトラスト財団・学芸部長
アンドリュー・レントン　ウェールズ国立博物館・学芸員
ハンス・トムセン　チューリッヒ大学・東洋美術史学科・教授
アレクシス・シュヴァルツェンバッハ　ルツェルン応用科学芸術大学
クリスチャン・リュメリン　ゲルマン国立博物館・学芸員
ウド・バイライス　シーボルト協会・会長
ブルーノ・リヒツフェルト　ミュンヘン五大陸博物館・副館長
ヴィルヘルム・グラーフ・アーデルマン　ブランデンシュタイン城シーボルトアーカイブ・司書

（館内）

青柳　正俊　本館研究部・プロジェクト研究員
○大久保純一　本館研究部・教授
澤田　和人　本館研究部・准教授
齋藤　　努　本館研究部・教授
島津　美子　本館研究部・准教授
鈴木　卓治　本館研究部・教授
◎日高　　薫　本館研究部・教授
福岡万里子　本館研究部・准教授
松田　睦彦　本館研究部・准教授

（協力者）

荒川　正明　学習院大学・教授
伊東　哲夫　文化庁・文化財調査官
大橋　康二　佐賀県立九州陶磁文化館・名誉顧問
沓沢　博行　東京都江戸東京博物館・学芸員
黒川　廣子　東京藝術大学大学美術館・館長
小酒井大吾　東京都江戸東京博物館・学芸員
斉藤　汐里　国立歴史民俗博物館・資料整理等補助員
佐々木守俊　清泉女子大学・教授
三野宮定里　株式会社ソフトディバイス

長岡　枝里　長崎歴史文化博物館・学芸研究員
原　あゆみ　学習院大学・大学院生
渡辺　芳郎　鹿児島大学・教授

（5）北米における日本関連在外資料調査研究・活用―言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築―
2016～2021年度
（歴博ブランチ代表者　松田　睦彦）

1．目　的

本研究では，主として北米に移住した日本人に注目し，言語史・社会史・生活史を基点としながら，新たな資料論の創出を含む資料調査，並びに研究を行う。

北米日系社会の移民資料を整備し活用する必要性は，現地の関連機関においても認識されている。しかしその整備の中心は，マスターナラティブとの関わりにおいて有用とされるものが多く，しかも画像資料や英語資料に傾斜しがちである。

この状況に対し，本研究では，①日系人に関わる音声・映像資料について，データ救出と資料の評価を行う。これら資料は，劣化や廃棄リスクが高まっており，ことに使用言語が日本語の場合は現地での評価が困難であるため，対応の緊急性が高い。これに対し，データ救出・媒体変換と内容分析を，音響学，図書館学の研究者とも連携しながら行う。

さらに，②日系社会の歴史のうち，これまでの十分に光が当たってこなかった領域の析出と，これに関わる資料調査・集積を行う。これは，①のインタビューやオーラルヒストリーの内容分析と連動しており，そこでの応答とマスターナラティブの間の緊張関係を踏まえながら，資料調査として補われるべき領域を析出するとともに，移民をめぐる新たな資料論へとつなげる。

なお，データベースを構築し，研究者コミュニティ，現地の日系社会等に提供する。同時に国際シンポジウムや講座，国立歴史民俗博物館等における展示を実施する。これらの活動を通して，日本研究および日本文化理解の促進を図る。

2．今年度の研究計画

本プロジェクトは，主として北米に移住した日本人に注目し，言語史・社会史・生活史を基点としながら，新たな資料論の創出を含む資料調査，並びに研究を行うことを目的としてスタートした。昨年度は，新型コロナウイルス感染症により，海外渡航が不可能となったため，大幅な計画変更をせざるを得なかった。その中で，令和元年度に国立歴史民俗博物館での企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」の内容をもとにした展示を山口県周防大島町での企画展示「周防大島とハワイ～移民たちの足跡～」（開催期間：2021年３月15日～2021年５月９日）を開催した。この他には，整備を進めてきた，ハワイ大学ウエストオアフ校，ハワイ日本文化センター，サクラメント歴史センター所蔵の音声資料の書き起こし，並びに資料目録の更新を行った。また，スタンフォード大学フーヴァー研究所と連携して進めているハワイの邦字新聞『日布時事』写真データベースを，スタンフォー大学のサーバーにおいて追加公開した。

これらの活動に基本計画ならびに中間評価で得た評価を踏まえ，今年度は，周防大島町で実施している企画展示を無事に終了させるとともに，研究発表会，2020年度に開催予定であった「在外資料論の構築」を目指したシンポジウムを開催する。これらを通じて，資料をめぐる今日的課題と今後の見通しを社会的に発信する。また，資料調査も新型コロナウイルス感染症の状況を見極めながら，ハワイ・北米で継続する。データベースについては，公開対象とする資料を拡充させる。教育プログラムについては，これまで教育プログラムを担当した研究メンバーと在外資料を活用した授業デザインについての評価を行い，取りまとめを行う。

3．今年度の研究経過

（１）国立歴史民俗博物館の企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」の内容を踏まえた特別展示（「周防大島とハワイ：移民たちの足跡」）を2021年３月15日から５月９日にかけて山口県周防大島町（於：宮本常一記念館）で開催した。本企画展示には約940人の来館者があった。本企画展示については，主催者である周防大島町の公報や中国新聞で取り上げられた。この展示終了後，周防大島町内３ヶ所で同内容の展示を2021年６月から10月にかけて行い，2,245人の来館者があった。

（2）これまで収集してきた資料を活用したオンライン研究発表会を２回開催した（2021年６月26日，11月27日）。
（3）日系社会資料（写真・音声・映像資料）の整備を継続した。スタンフォード大学フーバー研究所との連携で整備を進めている「日布時事」写真データベースの整備を継続した他，音声資料については，サクラメント歴史センター所蔵のオーラルヒストリー調査の整備を進めた。また，これまで収集した音声資料の書き起こしを業務委託する形で進め，資料整備に用いるとともに，書き起こし資料を口述資料，または言語資料として学術利用した。
（4）ハワイ・北米における資料調査についても，新型コロナウイルス感染症の影響により，現地機関への立ち入りが禁止となり，日本からの海外出張が困難な状況が続いたため，昨年度と同様，資料調査を見送ることとした。
（5）和歌山県串本町で保存されている伴野物産に関わる資料群についての調査を行った。同資料群は，ミクロネシア・オセアニアに展開した和歌山県出身者が経営していた商社の資料であり，本共同研究のテーマからは少し距離があるが，展開時期がアメリカへの移住が困難になった時期と重なっているため，アメリカを含む各地へ多くの移民を送出した和歌山県の経過と関わりが深いとの判断できたこと，未整理のまま埋没する危険性があると判断したこと，新型コロナウイルス感染症の影響で海外調査が困難であることなどから，本資料の調査を実施した。この調査は，研究期間終了後に，仮目録にまとめる計画である。

４．今年度の研究成果

※展示を除き，歴博ブランチ分のみ掲載

●2020年度の研究教育活動（成果を出す以前の研究・調査途中のものも含む）

一　研究業績（公開，発表，刊行済みのもの）

【刊行物】

柿崎京一「新池の農業機械化をめぐる調査を語る（下）」（『村落研究ジャーナル』第54号, pp25-38, 日本村落研究学会）2021年４月（公開研究会のとりまとめ）

【セミナー】

原山浩介「ハワイ：多様性の島々から考える」（公財）長崎市平和推進協会　青少年平和交流事業，オンライン，2021年８月16日

【展示】

特別展示　「周防大島とハワイ：移民たちの足跡」2021年３月15日～５月９日　宮本常一記念館（山口県周防大島町）

【データベース】

「日布時事フォト・アーカイブス」（スタンフォード大学フーヴァー研究所と共同）

５．全期間の研究成果

【協定等】

ミシガン大学日本研究センター・ミシガン大学評議会との学術交流・協力に関する協定（2017年８月10日～2021年３月31日）

スタンフォード大学フーバー研究所との協定（2018年１月18日～2022年３月31日）

企画展示「周防大島とハワイ～移民たちの足跡～」（仮）開催に関わる覚書（山口県周防大島町）（2020年）

【国際シンポジウム】

NINJAL-NMJH-UHM Workshop：Underdescribed Languages and Histories：Linguist's and Historian's Challenges（ハワイ大学マノア校），2017年５月18日

（報告：Harayama Kosuke, *Koji Ariyoshi in the context of Japanese History*）

Spies, Prisoners, and Farmers：The Origins of Japanese Studies at Michigan（ミシガン大学），2017年11月29日

（報告：Harayama Kosuke, *Communism and Revisionism：The Story Derived from a Nisei Soldier's Experience in Yenan*）

【国立歴史民俗博物館国際研究集会】

ハワイ移民の「もう一つの歴史」を考える *Revisiting Migration Histories of Hawai'i*（国立歴史民俗博物館），12月21日（土）

Dennis M. Ogawa（デニス・オガワ）（ハワイ大学マノア校，Hawaii Times Photo Archives Foundation 代表）

ハワイの「一世」とは?：1920～30年代を中心に　*Who Were the Hawaii Issei：Focusing on the 1920-30's*

上田薫（スタンフォード大学フーヴァー研究所）「日布時事フォト・アーカイブスにみる日系人」

飯田耕二郎（元 大阪商業大学）「ホノルルにおける日本人町の形成」

原山浩介（国立歴史民俗博物館）「ハワイの人種的多様性と日本人移民・日系人」

【公開研究会】
ミシガン大学岡山分室と日本・アメリカの人文科学―インテリジェンス・日本語教育・地域研究―（国立歴史民俗博物館），2017年２月17日・18日
　第一部　基調報告
　　中生勝美（桜美林大学）「アメリカの日本研究 ： ミシガン大学の日本研究・戦争・陸軍日本語学校・日本研究センター」
　第二部　アメリカの日本語教育
　　朝日祥之（国立国語研究所）「戦時中の日本語教育と陸軍日本語学校」
　　高田智和（国立国語研究所）「陸軍日本語学校の漢字教育―Philip M. Foisie paperから―」
　第三部　ミシガン大学日本研究センターの活動と日本の人文科学研究
　　柿崎京一（宇都宮大学名誉教授），篠原徹（琵琶湖博物館館長）
　　「ミシガン大学岡山分室と戦後日本の地域研究を語る」
　　コーディネーター　河村能夫（龍谷大学名誉教授／京都府立農業大学校校長）
　　谷口陽子（専修大学 非常勤講師）「ミシガン大学岡山分室の研究成果」
　総合討論
　　話題提供（原山浩介（国立歴史民俗博物館）「人文科学研究の再審／再考：岡山フィールドからの問い」）

【展示】
「比嘉太郎ふるさと展」2019年６月，沖縄県北中城村あやかりの杜
「比嘉太郎ふるさと展」2019年10月－11月，沖縄県立図書館
企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」2019年10月～12月，国立歴史民俗博物館
特別展示「周防大島とハワイ：移民たちの足跡」2021年３月15日～５月９日，宮本常一記念館（山口県周防大島町）

【展示協力】
ビショップ・ミュージアム企画展示　*Gannenmono*：*A Legacy of Eight Generations in Hawai‘i*　2018年，ビショップ・ミュージアム

【展示図録】
国立歴史民俗博物館編『展示図録 企画展示 ハワイ 日本人移民の150年と憧れの島のなりたち』，2019年10月

【刊行物】
原山浩介「ハワイ立州の周辺にみるポリティクス」（『現代思想』第45巻第18号（９月号），青土社）pp.219-225
原山浩介「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」（『総合誌「歴博」』第216号，国立歴史民俗博物館，2019年９月）pp.18-19
原山浩介「アーカイフブズを訪ねる ハワイ州立公文書館から考える（歴史家とアーキヒビストの対話（第６回））」（『歴史学研究』987号，歴史学研究会，2019年９月）pp.45-49
原山浩介「『布哇新聞』第76号」（資料解説）（『日本歴史』857号，吉川弘文館，口絵）2019年10月
原山浩介「太平洋戦争後のハワイにおける民主化過程」（『歴史研究の最前線』Vol.22，総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館，pp.32-48）2020年３月
原山浩介「地域に構造化される「人の移動」：村落研究をめぐるパースペクティブの再考にむけて」（『年報 村落社会研究』56，pp.235-254，日本村落研究学会，2020年11月15日（査読有）
原山浩介「「移民展示」の可能性と課題」（『千葉史学』千葉歴史学会）2020年５月17日
原山浩介「「差別」と多様性をどう展示するか」（『REKIHAKU』１，pp.50-52，国立歴史民俗博物館）2020年10月26日
柿崎京一「新池の農業機械化をめぐる調査を語る（上）」（『村落研究ジャーナル』第53号, pp25-33, 日本村落研究学会）2020年10月（公開研究会のとりまとめ）
原山浩介「「多様性」の問い方：素朴さの意義とその向こう側」（『REKIHAKU』２，pp.27-29，国立歴史民俗博物館）2021年２月26日

『ハワイ移民の「もう一つの歴史」を考える 2019/12/21』国立歴史民俗博物館，2021年３月25日

【口頭発表】
原山浩介「体験のなかの「トランスナショナル」日本移民学会，天理大学，2019年６月
原山浩介「コメント：移民研究の立場から」日本村落研究学会，茂庭荘，2019年11月

【講演会等】
原山浩介「ハワイから見直す近現代：移民・戦争・民主主義」歴博講演会，国立歴史民俗博物館，2019年11月
原山浩介「太平洋戦争後のハワイにおける民主化過程」日本歴史研究専攻大学院公開講演会，国立歴史民俗博物館，2019年６月

【セミナー等】
原山浩介「日本人移民とハワイ」ハワイ州観光局 ハワイアン航空共催FAM 出発日研修，ホテルマイステイズプレミア成田，2020年２月
原山浩介「移民博物館をつくる」JICA日系社会研修「博物館における資料と展示技術の有効活用およびネットワーク強化コース」，国立歴史民俗博物館，2019年11月
原山浩介「ハワイ移民史をたどり直す」ハワイ州観光局 ハワイ歴史セミナー，国立歴史民俗博物館，2019年11月
原山浩介「ハワイ：多様性の島々から考える」（公財）長崎市平和推進協会 青少年平和交流事業，オンライン，2020年８月14日

【データベース】
「日布時事フォト・アーカイブス」（スタンフォード大学フーヴァー研究所と共同）

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）
　樋浦　郷子　本館研究部・准教授
◎松田　睦彦　本館研究部・准教授
○吉井　文美　本館研究部・准教授
　川村　清志　本館研究部・准教授
　（国立国語研究所のブランチと連動）

【基幹研究】

（１）近代日本における産業・労働の展開とジェンダー
2019～2021年度

（研究代表者　横山　百合子（2019年４月１日～2021年３月31日）・吉井　文美（2021年４月１日～2022年10月１日）・樋浦　郷子（2021年10月２日～2022年３月31日））

１．目　的

近代日本は，明治維新以降，新たに成立した国家体制と国際環境のもとで急速に近代化を遂げてきた。同時に，明治維新に続く産業革命，20世紀の重工業化にいたる過程は，産業および労働分野でのジェンダーの構築を不可避的に伴うものであった。本研究は，このような産業と労働という経済的側面から近代日本におけるジェンダーの構築と変容の過程を明らかにすることを目的とする。研究にあたっては，近世からの移行，および現代社会への連接を意識し，対象とする時期を19世紀中葉から高度成長期までと比較的長く設定し，産業化にともなう男女の労働の変容をジェンダーの視点から捉え直し，新たな歴史像の構築を目指す。

２．今年度の研究計画

次の二点を念頭に遂行した。①2020年度企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」における研究成果の発信を円滑に進める。②近代展示リニューアル事業での成果の活用について検討を始める。なお，研究開始当初に計画していた海外博物館（台湾，アメリカ合衆国）におけるジェンダー展示の調査は，新型コロナ感染拡大等の状況に鑑み，実施の有無を柔軟に判断することとした。

３．今年度の研究経過

2021年度は横山百合子の退職にともない，吉井文美が４月１日から研究代表，樋浦郷子が前年度末に副代表として参加することとなり，10月２日からは樋浦が研究代表，吉井が副代表の体制となった。複数回の緊急事態宣言，まん延防止等重点措置の期間は歴博側，共同研究者所属機関側双方に出張制限が厳しく敷かれていたため，前半は研究会の開催を延期せざるを得なかった。新型コロナ感染症の状況を睨みつつ，下記のようにオンライン・対面並行で11月以降に計３日間の研究会を実施した。

2021年度第１回（通し第５回）　2021年11月27日（土）
①長志珠絵「初期の労働省婦人少年局とメディアとしての紙芝居考」
②樋浦郷子　企画展示「学びの歴史像」解説

2021年度第２回・３回合同研究会（通し第６回，７回）　2022年３月26日（金）
①横山百合子「幕末維新期新吉原遊廓における遊女屋・遊客・遊女―高橋由一画「花魁」のモデル稲本屋小稲ほか遊女の書状を素材として―」，
②廣川和花「「救済」の一環としての明治40年法律第11号「癩予防ニ関スル件」」
３月27日（土）
③倉敷伸子「高度成長期を経た農家女性の就労―香川県を例に―」
④野依智子「戦前・後における若松港門司の港湾労働と女性港湾労働者」

４．今年度の研究成果

本基幹研究第２年度までの研究成果を総括的に示したものとして，『新書版性差（ジェンダー）の日本史』を刊行した。

また，具体的な産業に即した個別研究をとおして，本年度の研究から浮かび上がった具体的な論点としては，以下があげられる。一つは，港湾や農村における女性労働の実態解明を通して，基礎的な労働組織の形態とそこでの女性労働の位置付けは産業技術のレベルによって変動し，その結果産業組織におけるジェンダーが変容していくことが明らかになったこと，もう一つは，女子労働者やハンセン病患者など弱者として位置付けられた人びとへの政策や，性産業のような近世以来の連続と近代以降の新たな法的･社会的条件という断絶を併せ持つ分野の政策など，国家的な産業・労働政策の動向を考える場合にも，地域の社会的実態の分析が重要であること，の二点である。

以上の論点を含む本年度のおもな成果は，以下の通りである。

国立歴史民俗博物館展示プロジェクト編『新書版性差（ジェンダー）の日本史』集英社インターナショナル，2021年
谷本雅之「書評 石井寛治著『資本主義日本の地域構造』」『社会経済史学』887（２），2021年
長志珠絵「紙芝居の発展史 特別編 労働省婦人少年局作成の「紙芝居」」『子どもの文化』53（６）599　2021年
松沢裕作『日本近代社会史：社会集団と市場から読み解く 1868-1914』有斐閣，2022年
廣川和花「ハンセン病史研究の新地平を切り拓く 本書の意義と課題（2020年11月例会 療養所における「自治」の経験とその射程を問う：松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』を素材に）」『歴史科学』2021年
倉敷伸子「書評 岩島史著『つくられる〈農村女性〉：戦後日本の農村女性政策とエンパワーメントの物語』」『歴史評論』862，2022年
同　　「共同的記憶がつくる「民主主義」」大門正克・長谷川貴彦編『「生きること」の問い方：歴史の現場から』日本経済評論社，2022年
満薗勇「ヒーブ（HEIB）の日本的展開をめぐって：消費・ジェンダー・企業社会（特集 家政学の思想）」『現代思想』50（２），2022年
樋浦郷子「帝国日本の清潔と清潔感」国立歴史民俗博物館･花王株式会社 編『〈洗う〉文化史：「きれい」とは何か』吉川弘文館，2022年
横山百合子「遊廓の明治維新―身分とジェンダーの視点から―」『人民の歴史学』231，2021年
同　　「書評 沢山美果子著『性からよむ江戸時代：生活の現場から』」『歴史評論』864，2022年

５．全期間の研究成果

本研究の目的は，産業と労働の側面から近代日本におけるジェンダーの構築と変容の過程を明らかにすることで

ある。研究にあたっては，近世からの移行，および現代社会への連接を意識し，産業化にともなう男女の労働の変容をジェンダーの視点から捉え直し，新たな歴史像の構築を目指した。また本研究は，2018年度に終了した基盤研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」の成果を取り込みつつ，基幹研究として発展させたものでもある。

成果の第一は，本基幹研究２年目に基盤研究の成果展示としての企画展示図録「性差（ジェンダー）の日本史」を一般の新書として刊行するという，歴博の共同研究成果の発信としてはこれまでにないといってよいほどの展開を成しえたことである。通史をジェンダーの観点から読み直すという本研究の眼目は，社会のあらゆる層や場面において，切実に必要とされていたことを知らしめ，われわれも改めて認識できた。

「今年度の研究成果」以外の具体例として，次のような論点を挙げることができる。

（１）鉱山労働：夫婦共働きをしなくては生存できない人々の存在，その結果，女性保護ための鉱夫労働規則（1924年）が女性を同一賃金の坑内労働から除外するものとなり，炭鉱労働全体の性別役割分業を進めたという複雑な側面を指摘。

（２）事務職：珠算という技術を銀行と競合しつつ逓信省貯金局への集中的な登用を立証。戦後社会へも影響が推定。戦後は労働省の地方分室から女性の増加。

（３）福祉や病：「恤救規則」（1874年。生活保護法に類するもの）を受給した人々には縁者から支援を拒絶された女性が存在したことなどから，現代的「自己責任論」を想起させる現象が存在したと推定。ハンセン病をめぐっては，別ブランチの「学知」共同研究および「学び展」では生存のために療養所内で否応なく文化活動に引き込まれる患者という側面を強調した。しかし，同じテーマをジェンダーの観点から観察した場合，所内で結婚のあっせんを男性自治会長が行ってきたことが明らかになり，療養所内が所外の世界と同様に，厳密な性別役割やジェンダー観のもとにあったとの見解が示された。

成果の第二は，近現代日本の産業化や労働のありかたに焦点化して，ジェンダーの視点で眺めなおしたことである。たとえば，繊維産業に若い女性が従事し，その後工業化には男性労働者が貢献し，世紀転換期に「職業婦人」が登場する，1910年代から20年代にかけて性別役割分担が進展するなど，教科書での言説や本館の展示がある。これに対し本研究では，近代においては性別役割分担の側面も否定できないものの，他方で夫婦共働きをしなくては生存できない人々の存在や，部局によりさまざまな形態をとる公務員の女性採用など，複雑で多様な労働のかたちが併存するという近現代の労働のありさまを浮かび上がらせた。

上記に関連して第三には，これらの成果を含めながら，近代展示リニューアル（展示の可視化・高度化）事業へと連結させることに道筋をつけた。近代展示リニューアル事業で，従来は「職業婦人」として想定されてきた新展示のコーナーを「帝国の都市空間とジェンダー」というかたちで計画を拡充する予定となった。ほかの各所も随所に「近代日本社会の形成・展開についての学際的・国際的研究」の二つの共同研究の成果を取り入れ，参加者にリニューアル事業への協力者として引き続き助言を仰ぐ予定となっている。例を挙げれば次の通りである。

（１）近代日本における労働：現在の第五展示室の「紡績工女から製鉄工夫へ」という単線的描き方を改め，都市ではなく農村社会に残って生きる人びとや，鉱山労働に従事した人々には男性も女性も存在していたという観点に立って描きなおす。たとえば鉱山労働での女性の労働をこれまでの展示よりも注意深く，かつ大きく扱う。

（２）ジェンダーと労働：現在は「職業婦人」というテーマで扱われているコーナーを，「帝国主義の時代」と「ジェンダー」をテーマに入れて大きく変更する。2018年度終了の基盤研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」の近代関係部分もあわせて，このコーナーに多くを反映させる。

（３）病者の近代：徴兵検査で発見されるハンセン病者を，「近代に求められた男性性から排除される男性」（＝男性らしさへの風圧の強さ）というジェンダーの観点から描く。

展示新構築事業に加え，『国立歴史民俗博物館研究報告』の刊行を予定している。

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

谷本　雅之　東京大学大学院・経済学研究科・教授
長　志珠絵　神戸大学大学院国際文化学研究科・教授
松沢　裕作　慶應義塾大学経済学部・教授
廣川　和花　専修大学文学部・教授
野依　智子　福岡女子大学国際文理学部・教授
倉敷　伸子　四国学院大学文学部・教授
満薗　　勇　北海道大学経済学研究院・准教授
青木　隆浩　本館研究部・准教授
柴崎　茂光　東京大学農学生命科学研究科・准教授

○◎樋浦　郷子　本館研究部・准教授
◎○吉井　文美　本館研究部・准教授
　横山百合子　本館研究部・名誉教授
RA 五味玲子　千葉大学大学院生

（２）水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成
2019～2021年度
（研究代表者　松木　武彦）

１．目　的

水稲農耕が始まった弥生時代以降，日本列島各地の人びとが「水」をどのように認知し，制御し，活用することによって，再生産が可能な社会を織りなしていったのか，その歴史的なプロセスとメカニズムを解明することを目的とする。

「水」を主軸とした日本史の叙述はこれまでにも試みられているが，本研究の特色は，水と社会との関係史を，単に技術的・経済的側面の発展プロセスだけではなく，認知・儀礼・世界観という心的・文化的側面の変容プロセスを重視し，前者と後者との相互作用に光を当てて日本の社会と文化の形成過程を叙述するところにある。

このような特色を発揮するために，本研究は，考古学と民俗学を両輪とし，それに歴史学・地理学・分析科学などの分野が加わって，どの分野からも接近可能な「水」を共通の土俵に，各分野対等の学際研究を進める。具体的には，それぞれの時代と地域について，（１）人々は水をどう認知してどういう要請からどのような土木技術を実現し，（２）その土木技術が水をめぐる社会関係をどのように作り上げ，（３）その社会関係がどのような儀礼を媒介にどのような世界観として演出されたか，という３点を明示することを，各分野が共有する分析視角とする。

さらに具体的には，上記（１）＜土木技術＞について，先史・古代の村落と都城における用・排・防水システム（考古学・地理学），村落・都市の用・排・防水のシステムと運営（民俗学）などを明らかにする。（２）＜水をめぐる社会関係＞については，水利の争奪・掌握と先史～古代の社会統合（考古学・歴史学），水争い・水利慣行と中～近世の村落組織（民俗学・歴史学）などを検討する。（３）＜水の儀礼と世界観＞については，水に関連する祭祀遺跡（考古学），村落における水と祭祀（民俗学），国家祭祀と水（歴史学），絵地図の水表現や色彩（地理学・分析科学）などを分析する。

まとめとして，各時代・地域で明らかになった，水をめぐる「認知と技術→技術と社会→社会と儀礼・世界観」の関係を敷衍・一般化することによって，日本列島の歴史と文化の特性を抽出する。

２．今年度の研究計画

最低３回の研究会を行う。COVID-19の感染拡大という状況を踏まえ，年度の前半にzoomによる遠隔方式で最低１回の研究会（研究発表）を予定し，年度の後半になって状況が好転すれば，昨年度予定していてできなかった岡山での現地研究会（巡検）を予定する。弥生時代初期の水田形成，岡山城下町と旭川の治水，倉敷市真備地域における2018年の豪雨水害の痕跡と復興状況等々について，関連遺跡や出土資料の見学，および調査研究に携わった共同研究者及び地元の研究者の研究発表を実施する。さらに，本研究（A班）とともに研究課題「水と人間の日本列島史」を構成する基幹研究「水をめぐる生活世界―実用と信仰の視点から」（関沢まゆみ代表:B班）と合同して，年度末に沖縄にて研究会（巡検）を実施する。これらと並行し，共同研究者は必要に応じ調査旅行も交えながら各自資料の充実を行う。

３．今年度の研究経過

COVID-19の感染は波を繰り返しながら存続する中，年度の前半に予定していたzoomによる研究会（第１回研究会）と後半に予定していた岡山での巡検（第２回研究会）は予定通り実施した。年度末にA班と合同で予定していた沖縄での巡検は現地の状況により実施できず，zoomでの研究会に変更した（第３回研究会）。内容は次のとおりである。

第１回目は，2021年６月27日（日）にzoom会議（歴博アカウント）で開催し，井上智博氏「弥生時代の水田域構成の変化とその背景」，島津美子氏「絵画における「水」色の表現と青の彩色材料」の２本の報告を得た。井上報告では，日本列島の社会と「水」とが積極的な関わりを持ち始める契機となった弥生時代の水田について，もっとも大規模な大阪平野の好例（池島・福万寺遺跡など）を中心に，最新の知見によってその実態が復元された。島

津報告は，絵画において「水」がどのような色彩と材料（顔料の化学成分）によって表現されているかを時系列で追い，その変化や画期を明らかにし，本研究の視座の拡がりを示すものとなった。

第２回目は，岡山での巡検として2022年１月22日（土）・23日（日）の２日間にわたって実施した。22日は，万城あき氏（岡山市郷土文化財団）の案内と解説により，後楽園（岡山市）の園内・外園水制・用水川末などを見学し，近世大名庭園として著名な後楽園が，機能的にも文化的にもいかに密接に水と関わっているかについて認識を共有した。その後，同じく万城氏の案内と解説で，百間川一の荒手，祇園大樋，池田光政公御涼所跡（いずれも岡山市）を巡検し，岡山城下町や岡山平野の新田開発における旭川の水の制御と活用の跡を詳しく検討した。続いて松木の案内により，瀬戸内では瀬戸内では最古級の弥生時代の水田と集落が発掘成果に基づき復元されている津島遺跡（岡山市）を踏査した。夕刻より岡山市内で研究会を開催し，万城あき氏「旭川と後楽園」，中村晋一郎氏（名古屋大学大学院工学研究科）「平成30年７月豪雨災害にみる近代治水の課題と限界」，松多信尚氏（岡山大学大学院教育学研究科）「真備町被災地域に関連して」，山口雄治氏「津島岡大遺跡・百間川遺跡の水田等の遺構について」の４本の報告を得た。万城報告と山口報告は，当日巡検した岡山平野における水の統御と利用についての，中村報告と松多報告は翌23日に踏査する倉敷市真備水害被災地についての理解を深めるものであった。23日は，松多氏の案内と解説によって，2018年７月の集中豪雨に伴う破堤と浸水によって多大な被害を出した倉敷市真備地域を訪れ，過去の水害の痕跡や記念碑，2018年水害時の破堤箇所，復興状況などを見学し，災害を契機とした水と社会との関係の変化や再構築について認識を共有した。

B班との合同として実施した第３回目は，2022年３月20日にzoomによって開催した。B班の２本の報告（阿利よし乃氏「沖縄の暮らしと水―沖縄県立博物館・美術館所蔵資料を中心に―」，「沖縄における水に関わる村落祭祀―沖縄県南城市字仲村渠の事例を中心に―」）のあと，最終年度を迎えたA班の各メンバーが『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号に投稿する成果の内容を紹介した。

４．今年度の研究成果

〔論考〕

井上智博2022「河内平野北東部における弥生時代後期～古墳時代の地形変遷と人間活動」（蔀屋北遺跡論集〔題名未定〕，六一書房（掲載予定）

井上智博2022「羽曳野市尺度遺跡で検出された庄内式期～布留式期初頭の灌漑施設の再検討」（『大阪文化財研究』55（掲載予定）

仁藤敦史2021「天平期の疫病と風損―国家による対策と地域―」『静岡県地域史研究』11：61-84

仁藤敦史2021『藤原仲麻呂』中公新書，2021，全258頁

藤井弘章2021「線香原料製粉の歴史と民俗　―和歌山県古座川流域･三栖家の製粉場（線香水車）と製粉工程―」『近畿大学大学院総合文化研究科紀要 混沌』18：89-116

趙哲済・南秀雄・大庭重信・中条武司・別所秀高2022「「大阪市域の河内低地西部と天満砂州における縄文時代早期以後の年代・岩相層序対比―14C年代と地盤沈下の補正に基づいて―」『大阪市文化財協会 研究紀要』23：53-74

別所秀高2021「自然地理編」『摂津市史』

村上忠喜2021「神社の祭礼と造形芸術」（新谷尚紀編『講座日本民俗学３・行事と祭礼』朝倉書店，pp.181-196

〔学会発表〕

５．全期間の研究成果

本研究の当初のねらいは，水と社会との関係史を，単に技術的･経済的側面の発展プロセスだけではなく，認知･儀礼・世界観という心的・文化的側面の変容プロセスを重視し，前者と後者との相互作用に光を当てて日本の社会と文化の形成過程を叙述するところにあった。そのために，考古学・民俗学および歴史学・地理学・分析科学などの各分野から接近可能な「水」を共通の土俵として，（１）人々は水をどう認知してどういう要請からどのような土木技術を実現し，（２）その土木技術が水をめぐる社会関係をどのように作り上げ，（３）その社会関係がどのような儀礼を媒介にどのような世界観として演出されたか，という３点を明示することを目ざした。

（１）の＜土木技術＞については，先史・古代の村落と都城における用・排・防水システム（考古学・地理学），および中世以降の村落・都市の用・排・防水のシステムと運営（民俗学）などを明らかにすることを具体的な目的とした。まず，先史・古代の村落・都城については，山口雄治氏「岡山平野における縄文時代後期～弥生時代前期の環境と生業」「津島岡大遺跡・百間川遺跡の水田等の遺構について」および井上智博氏「弥生時代の水田域構成の変化とその背景」によって先史の農耕村落に伴う水田技術が詳しく明らかになった。古代都城についての直接の検討はできなかったが，2019年の大阪巡見に伴う別所秀高氏「地形学的にみた古代淀川低地の治水戦略」と南秀雄

氏「難波堀江の学際的再検討」によって，難波宮を擁する大阪平野での古代の用・排・防水システムの一端を明らかにできたことには意義がある。中世以降については，とくに近世の都市について，2021年の岡山巡検とそれに伴う万城あき氏「旭川と後楽園」などの報告によって，岡山城下町を対象とする具体的な検討が進み，また，渡辺浩一氏「1742年江戸大水害と奥多摩渓谷」によって江戸の分析も深まった。さらに近代については，折しも本研究の発足直前に生じた岡山県倉敷市真備地域の水害を事例として，災害と用・排・防水システムとの双方向的関係について，岡山巡検やそれに伴う中村晋一郎氏「平成30年７月豪雨災害にみる近代治水の課題と限界」と松多信尚氏（岡山大学大学院教育学研究科）「真備町被災地域に関連して」などによって，具体的な検討を深めることができた。

（２）の＜水をめぐる社会関係＞については，水利の争奪・掌握と先史～古代の社会統合（考古学・歴史学），水争い・水利慣行と中～近世の村落組織（民俗学・歴史学）などを具体的なテーマに据えた。これについては民俗学から検討の深化が進み，村上忠喜氏「越境する境界祭祀―木津川流域の水にかかわる祭祀儀礼―（補遺）川のなかの墓地」が，木津川流域を対象として村落と河川と儀礼の関係を例示した。一方で，当初は予測していなかった河川での生産活動やそれを取り巻く環境についての検討が，伊藤廣之氏「淀川の環境と河川漁撈」や菅豊氏「水鳥の味を忘れた日本人―近代における「水辺」の環境破壊と文化変容」らによって進展し，重要な成果となった。

（３）の＜水の儀礼と世界観＞については，水に関連する祭祀遺跡（考古学），村落における水と祭祀（民俗学），国家祭祀と水（歴史学），地図や絵画の水表現（地理学・分析科学）などを具体的に検討した。古墳を含む祭祀遺跡について，松木武彦「古墳と水の関係についての研究動向」や坂靖氏「古墳時代の「流水祭祀」と水支配」による考古学的検討と，仁藤敦史氏による「古代ヤマト王権と水」「古代の雨乞いについて」など文献古代史からの考察がつながり，日本列島の首長権や王権あるいは支配理念の成立過程における「水」の重要な役割が明らかとなった。また，民俗学的視座からは，藤井弘章氏「和歌山県の雨乞い習俗」と関沢まゆみ氏「ニソの杜と水源」が，水と祭祀の具体的な関係に新たな光が当てられた。地図や絵画の水表現については，担当予定者の転出により地図の検討ができなかったが，島津美子氏「絵画における「水」色の表現と青の彩色材料」によって絵画からの検討が進み，本研究の拡がりと今後の発展の方向性を示すことができた。

本研究は，１年目の後半（2021年１月以降）から一貫して新型コロナウィルス感染拡大の影響を受け，大きな実践の目的としていた巡検が，当初予定していたうちの３割程度しか実施できなかった。しかしながら，zoomによる遠隔会議方式を最大限に活用して，２回の巡検以外に３年間で８回の研究会を実施し，上記に述べたように，概ね発足時の研究課題を充たすことができた。

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

井上　智博　（公財）大阪府文化財センター
菅　　豊　東京大学大学院
坂　　靖　奈良県地域振興部
藤井　弘章　近畿大学
別所　秀高　（公財）東大阪市文化振興協会
村上　忠喜　京都産業大学
山口　雄治　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
渡辺　浩一　国文学資料館
島津　美子　本館研究部・准教授
○関沢まゆみ　本館研究部・教授
仁藤　敦史　本館研究部・教授
◎松木　武彦　本館研究部・教授
林部　　均　本館研究部・教授

（３）水をめぐる生活世界―実用と信仰の視点から―
2020～2022年度
（研究代表者　関沢　まゆみ）

１．目　的

人と水の関係には，生物学的生存のために人びとが蓄積してきた水利用の技術と歴史があり，一方，くり返し起こる洪水などには人間が勝てない水の世界（自然の驚異，災害）がある。水の精神性（心理的かつ象徴的な意味づけ）の面では，芸術・音楽，癒しなど水をめぐる芸術と信仰がある。このような水と人間の関係史の視野から，生

物学的生存のための水（実用としての水）と，心の部分（信仰としての水）とについて研究を行い，人びとの生活と水の関わりについて具体的・実用的な面と，象徴的・信仰（精神）的な面とをあわせた歴史と民俗伝承の実態の解明を目的とする。具体的な課題は以下の３点である。

（１）日常的な水の確保　上水道普及以前には，飲料水，炊事，洗濯，風呂など家庭生活のなかでどのように水を確保してきたのか。日常的な実用としての水については，近代的な上下水道が完備される以前の水資源の確保の歴史と民俗の把握が重要である。とくに島嶼部においては上水道の普及が昭和40年代以降で，民俗誌にはそのような水の苦労について断片的な記述があるが，今回は経験者への聞き取りを行なっておく機会と考えている。

（２）水の信仰・儀礼伝承　実用の水の儀礼化には水への関心の高さと意味づけとがあらわれている。正月の若水汲みや七月七夕の井戸浚え，棚機女の伝承，盆行事などの年中行事や，神社の立地などにみる水の信仰的な意味にあらためて注目する。また，井戸の水神祭祀や村の水源や田の水口の祭祀などをあらためて水と人との関わりという視点で見直すことによって，水の神とは何か，古代以来の歴史文献と日本各地の民俗伝承との両面から分析を行う。とくに水に苦労した島嶼部においては，上水道が普及してすでに使用されなくなった井戸を今も大切にして，信仰の対象としている例が少なくない。この（１）と（２）は併行して考察していく。

（３）水の確保をめぐる歴史の記憶　青森県十和田市の三本木原開拓，玉川上水，多摩川の二ケ領用水，琵琶湖疏水等の工事，また富士川の信玄堤や雁堤等々の水害予防など，各地の水に関わる大土木工事について，その記録と記憶が学校教育や地域の祭りのなかで伝えられてきているが，その歴史と伝承の実態に注目する。水資源確保のための大規模土木工事とその記憶については，水資源確保のための歴史的事実がその後どのように記憶され伝承されていくのかという伝承分析の視点を活用する。

これらについて，現地における聞き取り及び文献記録資料類の調査を通して研究を進め，研究期間中に研究集会を開催し，成果の公開をはかり，若手研究者育成への貢献をはかることも目的の一つと考えている。

２．今年度の研究計画

今年度は，４回の研究会を開催し，ゲストスピーカーを交え，考古学，文献史学，民俗学等の「生活と水」に関する研究発表を行ない，情報の共有を行う。コロナ禍において現地調査ができなかったため，各位の調査事例のなかから，生活と水という視点で研究発表を蓄積していくこととした。

３．今年度の研究経過

（１）研究会

●第４回研究会　2021年７月17日（日）　10時～16時　（Zoom）

10：00～10：15　挨拶，参加者の自己紹介

10：15～12：00　阿利よし乃「井戸の伝承と儀礼―沖縄県石垣島白保の事例―」

13：30～15：45　新谷尚紀「河童と水―柳田・折口・石田英一郎の研究より―」

15：45～16：00　打ち合わせ

阿利氏の発表では石垣島白保は明和の大津波で被害を受けたが，その復旧の際，井戸を発見した家が今も井戸の祭祀において一定の役割を果たしている点，また新谷氏の発表では河童について①柳田，折口，石田の研究整理，②河童と猿と馬との関係の歴史と民俗伝承の構造的理解のための着眼点，などが示され注目された。

●第５回研究会　2021年11月６日（日）10時～16時　（Zoom）

10：00～12：00　藤崎綾香（筑波大学大学院）「戦前の海面利用慣行と村落運営―沖縄県南城市奥武島に残された『海頭日記帳』の分析から―」

13:00～14:30　神谷智昭「沖縄における水道普及以前の水利用について―八重瀬町字東風平の事例（昭和20～40年頃）―」

14：30～16：00　阿利よし乃　資料紹介「歌謡・古写真・民具にみる沖縄の人と水―沖縄県立博物館・美術館収蔵資料を中心に―」

藤崎氏の発表では南城市奥武島における『海頭日記帳』（明治45年１月～昭和20年３月）の分析から地先海面利用の変化とその収益の利用などについて，神谷氏の発表では東風平における井戸の立地とその利用について体験者への聞き取り調査を含めた報告，そして阿利氏は「おもろさうし」の井戸に関する古謡，水汲みのクバ製民具の制作動画，水甕や樋などが写されている古写真などが紹介された。

●第６回研究会　2022年２月12日（土）10時～15時30分　（Zoom）

10：00～10：15　挨拶，参加者の自己紹介

10：15～12：00　岩瀬春奈（國學院大學大学院）「山住神社の祭礼―山の水・川の水・海の水―」

13：00～15：00　関沢まゆみ「「奈良県風俗志」にみる生活と水」
15：00～15：30　打ち合わせ

岩瀬氏の発表では天竜川流域の神社祭祀における遠州灘や天竜川の水の利用，山住神社の祭礼について報告された。関沢の発表では奈良県下はじめその他近代農村の生活と水使用の実態について報告され，水で洗う行為と儀礼についての分析が示された。

●第７回研究会　2022年３月20日（土）10時～15時30分　（Zoom）

2020年度，2021年度と沖縄においてAB合同研究会を計画していたが，実現できなかったため，本研究会では沖縄における水をテーマに発表が行われた。

阿利よし乃「沖縄の暮らしと水―沖縄県立博物館・美術館所蔵資料を中心に―」
神谷智昭「沖縄における水に関わる村落祭祀―沖縄県南城市字仲村渠の事例を中心に―」

この後，今年度で終了するA班の『研究報告』に執筆予定の論文構想についての発表が行われ，B班の参加者にも情報共有がなされた。

（２）映像「久礼八幡宮秋季例大祭　御神穀祭」の製作

神社祭祀と水について，高知県中土佐町久礼の氏神である久礼八幡宮で旧暦８月１日～15日の満月の夜まで半月間にわたって行なわれる御神穀祭の映像製作を行った。当屋から神社に御神穀（おみこく）と呼ばれるその年に収穫された稲からとれる米が奉納されると，毎年決まった川から水を汲んできて佾（イツ）と呼ばれる巫女の少女によって一夜酒が作られるのが特徴である。清めの水，酒の水，川上に位置する大坂組の祭礼における役割などの観点から祭礼の記録と分析を行った。

４．今年度の研究成果

今年度も，コロナ禍で現地調査や資料調査が十分できず，研究会では，これまで各位が調査してきた情報を共有するかたちでの発表とディスカッションが中心となった。そのなかで注目されたのは以下の点である。

（１）神社祭祀と水

前述のようにこれまで注目されていなかった水の視点から，半月にわたって行なわれる御神穀祭を調査したところ，ホウドウ地から神社へのお渡りの時に先頭をいく大榊につるした竹筒（清めの水），御神穀奉納後に佾（イツ）と呼ばれる少女によってその米飯と川の水と麹で醸される一夜酒，そしてその水源である大坂谷川上流の神社の祭祀との関係などが注目された。昨年度の，水源（湧水）祭祀の伝承，水の視点からみた神社の立地と祭祀など，水をめぐる神社祭祀の形の変遷についての民俗学の追跡の視点をさらに深めることができたといえる。

（２）沖縄における水の確保と儀礼

沖縄本島は，地形的に高地で森林が多く川がある北部と，石灰岩質で川がない低地の南部とに分かれるが，その南部では清水が湧き出るところや井戸（カー）が多く存在する。南城市はじめ南部地域における上水道普及以前の生活用水の確保の仕方や，水田や井戸における儀礼から水の物理的な確保と水への信仰について，昨年度に引き続き理解を深めることができた。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

阿利よし乃　沖縄県立博物館・美術館・学芸員
神谷　智昭　琉球大学法文学部・准教授
新谷　尚紀　國學院大学大学院・客員教授
武井　基晃　筑波大学人文社会系・准教授
柴崎　茂光　東京大学大学院農学生命科学研究科・准教授
○三上　喜孝　本館研究部・教授
◎関沢まゆみ　本館研究部・教授

【基盤研究】

（４）近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会 2019～2021年度

（研究代表者　若林　邦彦）

１．目　的

弥生時代にはBC４世紀中頃以後，青銅器文化がみられ，鉄器の存在と使用も論じられている。青銅器は主に祭祀具として，鉄器は利器として発達するが，古墳時代になって石製利器を用いない完全なる金属期社会になるまでのプロセスは，祭祀による集団統合や輸入金属素材の流通の広域管理･統制の有無や質をめぐって重要である。個々の金属器の生産目的・共有システムの展開そのものが，列島規模の中心－周縁関係の形成つまり古墳時代や初期国家形成過程上重要な要素となる。国家形成過程における，金属器生産の展開と社会変容の相互作用について，その中核的狄役割を担った近畿地方に焦点を絞り検討することを研究の目的とする。

金属器の受容を生産という視点で評価することは，近年つとに注目されているところである。北部九州における武器形青銅器や近畿地方の銅鐸鋳造が弥生時代中期前葉にさかのぼることが明確となり，鉄器に関しても中期前半の朝鮮半島製鋳造品関連品や発達した鉄器が，北部九州だけでなく北陸地方（石川県八日市地方遺跡出土中期前半例）にまでみられることが確認されている。鉄器化が列島規模で達成される古墳時代初頭以前の金属器生産の実態については多くの発言があり，広域におよぶ完全鉄器化が古墳時代への変化の動因として有力視もされている。ただ，そのプロセスについては明確ではない。弥生時代における青銅器と鉄器生産の双方の痕跡が明確な北部九州においては詳細な議論も進んでいるが，それ以外の地域では十分ではない。

こうした現状をふまえ，青銅器の型式学的な検討と理化学的な分析，遺構論を含めた解析をおこない，弥生時代の青銅器生産の技術的・型式学的・生産論的研究を統合することと，古墳時代中期以前の鉄器生産体制を遺構論・集落論から検討することに取組み，弥生時代～古墳時代の金属器生産と社会の変化の各段階を定義づけることを目指す。

２．今年度の研究計画

●近畿地方の弥生～古墳時代初頭鉄器製作技術について，出土資料の分析を継続して実施し，鍛冶実験生成物や既存の分析資料との比較検討をおこない，弥生時代末～古墳時代初頭の鍛冶技術について定点となるデータを提示することをめざす。

●近畿地方出土小型弥生青銅器の集成作業を進め，滋賀県域・京都府・奈良県・大阪府域の情報の拡充につとめる。また，滋賀県域出土資料など，いくつかの出土品について，鉛同位体比分析をおこなう。

●理化学分析を主体とした，出土資料及び製作技術の分析で得られた情報を対照して，各共同研究員が分担する鉄器製作技術研究・青銅器生産遺跡研究を進め，弥生時代近畿地方の金属器生産技術のレベルと変化，地域性などについて総合した議論をおこなう。

３．今年度の研究経過

●第１回研究会

（2021年６月６日　オンライン開催

「弥生～古墳時代初頭鉄器鍛冶実験成果品と出土鍛冶関連遺物の理化学的分析結果について」（真鍋成史）

「弥生時代の金属器と古墳時代の金属器―「違い」を評価する視点―」（上野祥史）

●第２回研究会

（2021年８月29日　オンライン開催）

「淡路島における重要文化財３銅鐸をめぐる諸問題」（森岡秀人）

「弥生小形青銅器・中国鏡の近畿への流入について」（戸塚洋輔：ゲストスピーカー：彦根市役所・文化財課）

「今後の進め方とシンポジウムについて」（若林邦彦）

●滋賀県近江八幡市南田B遺跡・九里氏館遺跡出土青銅器調査・分析

（2021年11月１日　於：国立歴史民俗博物館）

南田B遺跡・九里氏館遺跡出土銅鏃・銅鏡につき，歴博にて分析試料採取（鉛同位体比分析）と３Dデータ記録作業をおこなう。

●共同研究公開セミナー

（2022年２月23日　オンライン開催）

趣旨説明「金属器生産から見た弥生～古墳時代変化」（若林邦彦）

テーマⅠ「青銅器生産の変化（弥生中～後期）と製作技法」

「弥生時代青銅器生産研究における諸問題」（菊地望：ゲストスピーカー：東京国立博物館）

「コメント：弥生時代後期の青銅器生産に関する諸問題」（戸塚洋輔：ゲストスピーカー：彦根市役所・文化財課）

テーマ２「弥生後期の近畿地方での鉄器製作～古墳時代への変化にむけて～」

「鍛冶実験の成果と理化学分析・田辺天神山遺跡出土例との比較」（真鍋成史）

「鉄器生産と流通からみる近畿中部と中部高地・南関東の比較」（鈴木崇司：ゲストスピーカー：駒澤大学大学院博士課程）

テーマ３「金属器と弥生社会の変化」

「弥生青銅器祭祀の転換」（吉田広）

「金属器の製作と利用からみた生産の変革：画期の評価をめぐって」（上野祥史）

全体コメント（森岡秀人）

討論

※共同研究を終了するにあたり，これまでの議論を集約する研究会を，より広く情報発信することを目的として，公開セミナーの形で実施した。

●京都府西京極遺跡出土微細遺物及び交野市鍛冶実験試料の分析

パレオ・ラボにて，粒状滓や鍛造剥片等の資料の蛍光X線分析を実施した。

４．今年度の研究成果

本年度も，コロナの影響を受けて，実際に活動を展開したのは後半期に限定されたが，個別の調査分析活動とオンライン研究会を通じて，着実に成果を重ねることができた。

出土資料の理化学分析は，滋賀県南田B遺跡・九里氏館遺跡出土資料の鉛同位体比分析を実施し，金属器製作に伴う微細遺物について，京都府西京極遺跡出土の微細遺物や交野市での鍛冶実験での生成微細片を対象として蛍光X線分析をおこなった。この両資料の所見を得て，弥生時代後期の青銅器・鉄器の製作実態や生産の局面が，より具体的に展望できるようになった。

弥生時代小型青銅器の集成作業については，これまで着手してきた滋賀県・奈良県域・京都府域について，公開（研究報告）に向けて情報を整えた。さらに兵庫県域・大阪府域の情報についての作業を進めた。

２回の研究会では，製作技術論と社会論の二つの視点で議論が深化した。第１回研究会では，真鍋報告にて，これまでに金属器生産・加工が想定される遺跡での生産関連微細遺物に関する理化学分析や鍛冶実験をふまえて，弥生後期の鉄器生産の実態が想定され，生産を検証する根拠が展望された。上野報告では，古墳時代へ移行するなかでの青銅器・鉄器の生産体制の変化をとらえ，弥生と古墳という社会体制の変革と生産の画期との相互対照がなされた。第２回研究会では，森岡報告にて，新出の松帆銅鐸を対象としつつ，銅鐸の復古現象や，保有の継続や埋納の意義へと論を進め，銅鐸をめぐる行為には意識を固定化する観念化の機能があること，その断絶が中期と後期にその断層があることが指摘された。戸塚報告では，後期に広域分布する小型青銅器と鏡を対象として，各種の青銅器を相互に対照しつつ，東方・近畿地方への青銅器流入過程を整理した。2020年度後半からの研究会を通じて，弥生時代後期の金属器生産と器物の流通過程について，一連の議論が完結したことになる。

これらをふまえ，公開セミナーでは，「青銅器生産体制の変化」「鉄器生産の実態」「生産と社会体制の相互関係」の３つの視座で，近畿地方の弥生時代後社会を検討した。弥生時代中期と後期の質的差異，後期と古墳時代前期の質的差異を明確にし，金属器の生産と使用からみたその時空的特質の輪郭を鮮明にした。これについては約140名もの研究者・学生などの参加を得，当研究の目的や成果の必要性が明確となった。また，当研究の共同研究者・協力者を越えたディスカッションを通じて共同研究成果を相対化することもできた。

５．全期間の研究成果

青銅器と鉄器の製作と使用を通じて，弥生時代後期社会を相対的視点でとらえなおすことが本研究の目的である。初期国家を形成する古墳時代社会の前史として理念的にとらえられがちな同期の社会を，出土遺物の認識に基づいて，製作技術論や生産体制論，金属器利用形態などの議論から，実証的に実態をとらえなおすことに取り組んだ。

青銅器に関しては，銅鐸の生産と小型青銅器の生産とを対置でとらえ，中期と後期の断層を製品形態や製作技術，生産体制という複合的な視点で改めて認識することができた。鉛同位体比の分析は，数例に限定されたものの.，後期の青銅器生産の実態を想定させる興味深い貴重な結果を得ることができた。

鉄器に関しては，遺跡・遺物から想定される弥生時代後期の低温鍛冶操業を復元した製作実験をおこない，製品，製作過程で生じた大小さまざまな生成物，生産後の炉跡の状況など，つぶさに情報を取得することで，弥生時代後期の鉄器生産で何をつくり，どのような痕跡が遺跡・遺構・遺物に残るのか，実証的に示すことができた。併せて，実際の出土資料と実験で得た試料を理化学分析し，情報を同調させることで，それを検証した。「弥生時代後期の鉄器生産」を認識する実証モデルの提示は，断片的な出土情報から鉄器生産を復元する上での指標となり，今後の同期の鉄器生産研究に与える影響は大きいと受け止める。

これら，製作技術論の視点をふまえ，社会が金属器を如何に管理したのか，利用と実態をふまえた生産管理体制

論を展開させ，製作技術にみる弥生時代後期社会の生産の画期が，社会変革，社会体制の変革という画期と対応するのか否か，社会論として検討をおこなった。そこでは，中期と後期の断層が明確になるとともに，後期と古墳時代前期とのヒアタスは時代名称の転換ほどに大きくはないことが示された。

３つのテーマで，製作技術論と社会体制論，マクロとミクロの視座を交差させつつ，弥生時代後期社会の歴史的意義を検討してきた。そこでは，弥生時代から古墳時代へと至る「画期」の歴史的意義がより明確になったものと考える。巨大墳墓の現出から受けるインパクトほど，その懸隔は大きくなく，金属器生産・生産体制の転換は，集落動態と類似した局面をみせる。弥生時代中期と後期の断層も，銅鐸の生産技術，形態論，小形青銅器の生産技術など，多次元で転換が複合して生じていることを改めて確認した。金属器生産は前後の時期に接続するものの，弥生時代後期社会の特質が改めて浮彫りとなった。それは，弥生時代という概念を問なおす原動力となる可能性を秘めている。また，公開セミナーの中で，本共同研究の成果がどのように研究者の間で受け止められ議論の対象となるかも知ることができた。こういった反応にさらに答える形で研究報告の刊行等の研究成果の公開が行われば，新たな議論の展開を促すとともに共同研究の意義はより大きなものとなろう。

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）（50音順）

○上野　祥史　本館研究部・准教授
　齋藤　　努　本館研究部・教授
　清水　邦彦　茨木市教育委員会
　真鍋　成史　交野市教育委員会
　森岡　秀人　関西大学文学部
　吉田　　広　愛媛大学ミュージアム
◎若林　邦彦　同志社大学歴史資料館

（５）古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究
2019～2021年度
（研究代表者　高田　貫太）

１．目　的

本共同研究は，古墳時代における日朝関係史像を，当時の交渉経路や寄港地（交渉拠点）の実態という観点から再構築することを目的とする。

これまでの研究によって，古墳時代（≒朝鮮半島の三国時代）は，倭の社会が朝鮮半島から先進文化を盛んに受容した時代と評価されている。また，朝鮮半島の諸勢力（百済，新羅，加耶，栄山江流域）も当時の緊迫した政治情勢の中で，時には厳しい対立をふくみつつも，基本的には倭との友好的な関係を模索したことが明らかとなりつつある。特に近年の研究の進展によって「任那支配論」や「朝鮮出兵論」を震源とした倭の軍事的活動が日朝関係の基本とする見方を相対化し，王権，地域社会，集団のより基層的で多元的な交互交渉の様態が想定されるようになっている。申請者もこの研究動向を積極的に評価する一人である。

ただ，これまでの研究では倭，百済，新羅，加耶など政治勢力（王権）を単位として，その間の交渉様態を分析する形式が大部分であり，王権に属しながら対渉活動を実際に担った地域社会や集団の連繋性に主眼を置く研究はいまだ数少ない。また，実際の航路についても，例えば加耶と倭の交渉の場合，抽象的に釜山・金海―壱岐・対馬―北部九州―瀬戸内―近畿というような概括的な提示がなされているにすぎない。

すなわち当時の多様で錯綜した日朝関係史を，より具体的かつ実証的に描いていくためには，実際にどのような航路や寄港地を用いて行われていたのか，その航路や寄港地がどのような形で管理・運営されていたのか，それが時空間的にどのように変動したのか，という課題について，考古資料に即した検討を深めていくことが不可欠である。ここに本共同研究の目的と意義がある。

このような立場から，本共同研究では具体的な課題を大きく２つ設定する。ひとつめは，朝鮮半島中南部と西日本地域を対象とし，朝鮮半島西・南海岸，瀬戸内海沿岸，日本海沿岸をつたう交渉経路とその経路に沿って点在した（と推定される）寄港地の具体的な復元である。そのために，沿岸地域や島嶼部，河口に位置し（臨海性が高く），朝鮮半島系資料（倭系資料）が確認される集落遺跡や古墳の基礎的整理（遺跡の性格，時期，分布）を行い，その動態を分析する。日本考古学の側には資料の蓄積は十分にあり，韓国においても，臨海性の高い遺跡の調査，研究が急速に進展している。

この基礎的な分析を土台として，当時の日朝関係の動向の中で，交渉経路や寄港地がどのように王権や地域社会に管理・運営されていたのか，という課題について検討する。これまでの研究によって，おおむね６世紀前半頃には，倭，百済，新羅の各王権によってそれぞれの圏域の対外交渉権が掌握されたと推定されている。その動きをより具体的に把握するためにも，交渉経路や寄港地の管理・運営の主体やその変動を考察する。

以上の研究を通して，王権間の力学関係に重きが置かれてきた古墳時代の日朝関係史像を再構築していく。

２．今年度の研究計画

前年度までの研究成果に基づき，朝鮮半島中南部と西日本地域の航路や寄港地を復元する。また，航路や寄港地の管理・運営の主体や，日朝関係の全体的な動向との連関性を明らかにする。

①研究会の開催：全体参加の共同研究会を２回程度行う。最終の研究会においては，研究員個々にそれぞれの研究成果の概略を報告してもらい，本報告の章立てを組み立てる。

②共同調査：大韓文化財研究院の調査・研究に主要なメンバーが参加する。そして，３年間の調査成果についての総括をめざす。ただし，コロナ禍の影響のため，韓国側と日本側にわけて，それぞれ実施する。

③資料調査・分析：必要に応じて，前年度までに扱わなかった地域（中南部九州地域や東日本地域，朝鮮半島北部）などの朝鮮半島系，倭系資料についての分析を行う。

３．今年度の研究経過

①研究会の開催

第１回共同研究会

2021年４月25日（日）10時～13時（オンライン）

・共同研究員の研究進捗状況についての発表（各自５～10分）

日韓の共同研究員が一堂に会し，現在進めている研究の進捗状況について，各自発表を行い，討論した。それぞれの分担に基づいて，金工，馬匹，埴輪，集落などの観点から，古墳時代の日朝関係の多元的な状況と，その技術，情報，モノ，人の伝わり方についての前年度に引き続いて検討を深めている状況を確認した。また，日本側研究員は，畿内地域と日本海沿岸地域を取り結ぶルートとの関連性から，琵琶湖の湖上交通の要衝地に位置する滋賀県新開１号墳の副葬品についての資料調査を行うことで合意した。さらに韓国側研究員は，朝鮮半島南海岸の寄港地関連の集落・墳墓の踏査を共同で行うことで合意した。

第２回共同研究会

2021年11月７日（日）10時～16時（滋賀県立安土城考古博物館）

・日本側研究員が，畿内地域と日本海沿岸地域を取り結ぶルートとの関連性について，滋賀県新開１号墳出土副葬品の資料調査を踏まえながら，討論を行った。瀬戸内海ルートのみならず，日本海沿岸―若狭地域―琵琶湖―畿内地域というルートもまた，朝鮮半島諸社会との交渉において重要な役割を担ったことをあらためて確認した。

第３回共同研究会

2021年12月26日（日）10時～13時（オンライン）

・研究発表

中久保辰夫「古代日朝交渉経路・寄港地と渡来系集団」

瀬戸内海ルート沿いに位置する播磨地域をケーススタディーとして，海上交通ルートと陸上ルート（≒のちの山陽道ルート）との相関性や時期ごとの変動について，墳墓・集落・朝鮮半島系文物（主に土器）の分析から検討した。

李釩起「霊岩内洞里双墳墓の調査成果」

栄山江の河川ルートを活用した有力な地域集団の墳墓として注目される霊岩内洞里双墳墓の発掘調査について，発表を行った。埋葬施設，副葬品などに多彩な外来系要素が確認し得る点や，その文物や情報の入手において，栄山江を介した対外交渉が重要な役割を担っていたことについての報告があった。

②共同調査

朝鮮半島南海岸地域における集落・墳墓の踏査

2022年２月17日（木）～19日（土）韓国釜山，昌原，巨済など

・韓国側研究員が，朝鮮半島の南海岸を伝うルート上に位置する寄港地関連遺跡についての踏査を行った。

③資料調査

2021年11月７日（日）10時～16時（滋賀県立安土城考古博物館）
・滋賀県立安土城考古博物館のご協力の下，日本側研究員が滋賀県新開１号墳の副葬品について資料調査を行った。装飾馬具，帯金具，武器・武具類など，多彩な副葬品には，新羅（≒洛東江以東地域）系の文物が多数含まれていることを改めて確認した。

４．今年度の主な研究成果
・高田貫太『アクセサリーの考古学　倭と古代朝鮮の交渉史』吉川弘文館，2021年５月１日ISBN 978-４-642-05922-０
・国立光州博物館・全羅南道・咸平郡『咸平礼徳里新徳古墳』ISBN 978-89-86824-56-８　93910
（2019年度の研究活動成果。国立光州博物館の報告書作成作業に共同研究が協力を行った。）

５．自己評価
当初の計画との変更点
・コロナ禍の影響のため，対面による共同研究会は実施し得なかったが，オンラインを活用して，２回の日韓の共同研究員が一堂に会した研究会を実施することができた。
・日韓共同の資料調査や共同調査についても，コロナ禍の影響により実施し得なかった。しかしながら，韓国側と日本側それぞれで，資料調査（日本側　新開１号墳の副葬品調査）と共同調査（韓国側　朝鮮半島南海岸地域の集落・墳墓の踏査）を実施することができた。

自己評価　オンラインを活用して，全体の共同研究会を実施し，研究員各自の研究進捗状況の把握，それに対する討論，２名（中久保・李釩起）の研究発表を通して，活発な議論を行うことができた。それによって，韓国側と日本側それぞれの成果や総括の共有が可能となり，研究員各自が具体的に航路や寄港地の把握，その変遷についての認識や知見を深めることができたと考えている。その内容を成果報告書に反映させていきたい。

６.全期間の研究成果
本共同研究のひとつめの課題は，朝鮮半島中南部と西日本地域をつなぐ交渉経路とその経路に沿って点在した（と推定される）寄港地の具体的な復元である。この点に関しては，以下のような成果を挙げることができた。
・朝鮮半島西海岸ルートの寄港地のひとつである咸平湾一帯を本拠地とした地域集団の墳墓の様相を明らかにすることができた。咸平金山里方台形墳がそれであり，葺石，形象埴輪，副葬品などに倭系，百済系などの外来的な要素が確認された。咸平湾一帯の地勢や，他の集落・墳墓で確認された外来系要素を合わせて考えると，咸平湾が西海岸ルートにおける主要な寄港地であったことは確実である。
・６世紀前半頃に築造された咸平新徳１号墳の発掘調査報告書の作成（国立光州博物館）に協力することで，その多彩な倭系，百済系の要素を詳細に把握し得たことも大きな成果である。咸平新徳１号墳は，やや内陸に位置しているけれども，その造営集団が西海岸ルートや栄山江水系を活用しつつ，活発に近隣の地域集団，倭，百済などとの交渉を重ねるなかで，さまざまな副葬品や墳墓造営に関する情報を入手し得ていた状況が，改めて浮き彫りになった。
・瀬戸内海ルートを活用した主要な地域社会である播磨地域の動態を考察する中で，瀬戸内海ルートとそれに沿う陸上ルート（≒のちの山陽道），内陸へ往来するルートが連動していることが明らかとなり，外部からの文物や情報が瀬戸内海ルートを介して伝わり，それが内陸へと拡散していく状況を考古資料に即して把握することができた。

その一方でコロナ禍の影響のため，研究の途上にある課題も下記のようにいくつかある。
・墳墓に関する情報伝播を具体的にしめす埴輪の分析に基づいた交流様相の把握。

九州北部に散見されるタタキを有する埴輪と，朝鮮半島西南部に確認できるタタキを有する埴輪の相関性については，資料調査を行うことがかなわなかった。
・日本海沿岸ルートの実態の把握。

日本海沿岸の若狭地域と畿内地域をむすぶ結節点に位置する滋賀県新開１号墳の副葬品の資料調査は実現し得た。しかしながら，中国地域における日本海沿岸ルート沿いの資料については資料調査や踏査を断念せざるをえなかった。

以上のように，達成し得た課題と達成し得なかった課題はあるけれども，総体的に判断すれば，朝鮮半島西南部と西日本地域を取り結ぶ航路沿いに位置する寄港地の復元は，ある程度達成し得たと判断する。その具体的な内容は，成果報告書において報告する予定である。

二つめの研究課題としては，当時の日朝関係の動向の中で，航路や寄港地がどのように王権や地域社会に管理・運営されていたのか，という点である。もっとも基層的な交流関係においては，寄港地一帯に居を構えた地域集団によって管理・運営されていたという把握は，共同研究員の間でおおむね共通的といえる。しかしながら，王権と航路・寄港地の関係については，全体共同研究会の中で共同研究員それぞれの解釈が提示され，必ずしも見解の一致をみたわけではない。だからこそ，このような課題を設定する必要性があった。論点をあえて整理して提示すれば，大きく２つある。ひとつは朝鮮半島西南部（≒馬韓・栄山江流域社会）の航路や寄港地が，百済にどのように掌握されたのか，という点である。二つめは，瀬戸内海ルートや九州北部の玄界灘沿岸地域や有明・八代海沿岸地域の航路や寄港地が，倭王権にどのように掌握されたのか，という点である。

まず前者については，倭系古墳が西南海岸地域に点在するようになる５世紀前半頃とみる見解と，栄山江流域に百済の墓制である「陵山型石室」やそれを模した石室が広まる６世紀中葉意向とみる見解などがある。後者については，倭王権の（ある程度）強力な関与が4,5世紀には存在したと把握する見解と，５世紀後半のいわゆる「吉備の反乱」伝承，あるいは６世紀前半の「磐井の乱」などと考古学的状況（朝鮮半島系資料の動態）がある程度の一致をみせることを根拠に，倭王権が徐々に関与を強め６世紀中葉に，航路・寄港地の掌握が達成されたとみる見解などがある。

このような論点が早急に見解の一致をみることは難しいけれども，航路・寄港地の具体的な把握に基づいたさらなる検討が必要という点を，共同研究員の間で共有することはできたと考える。その具体的な内容については，成果報告書において報告する予定である。

コロナ禍の影響のため，道半ばで共同研究を終了せざるを得なかったことは，非常に残念ではあるけれども，幸いにも2022年度から４年間，科学研究費（基盤研究B）「航路・寄港地から見た倭と古代朝鮮の交渉史に関する日韓共同研究」が採択されたので，引き続き研究を進めていきたいと考えている。

７．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

李　　暎澈　大韓文化財研究院・院長
鄭　　一　大韓文化財研究院・調査課長
林　　智娜　大韓文化財研究院・調査課長
権　　五栄　ソウル大学校・教授
金　　洛中　全北大学校・教授
洪　　潽植　公州大学校・教授
李　　釩起　全南文化財研究所・所長
中久保辰夫　京都橘大学・准教授
諫早　直人　京都府立大学・准教授
廣瀬　　覚　奈良文化財研究所・主任研究員
金　　宇大　滋賀県立大学人間文化学部・准教授
土屋　隆史　宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室・室員
◎高田　貫太　本館研究部・教授
○上野　祥史　本館研究部・准教授

（６）日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法と展示手法の再構築 2020～2022年度
（研究代表者　青木　隆浩）

１．目　的

くらしの植物苑は，1995年に開苑して，植物という生きた資料と本館展示との関わりを意識してきたが，これまで苑内の資料を全面的に意識した共同研究を立ち上げたことがなかった。1999年の「伝統の朝顔」展から始まった「季節の伝統植物」展では，九州大学の仁田坂英二氏や恵泉女学園大学名誉教授の箱田直紀氏，台東区立中央図書館の平野恵氏，日本大学の水田大輝氏など第一線の研究者から協力していただいて，最先端の研究成果を反映する展示を開催してきたが，常設展示に関しては歴博で植物苑の運営を開苑後しばらく担っていた辻誠一郎氏が東京大学に転出してから，ほぼ手付かずの状態である。

くらしの植物苑の解説プレートのいくつかは，すでに文字がほとんど読めなくなるほどに劣化しており，かつ植物の枯死や最近の研究成果を反映できていないことから，現状の植栽と合っていない状況でもある。そこ

で，まずはくらしの植物苑の開苑目的に基づいて，人と植物の関係史をあらためて検証し，その成果を解説プレートの改善に活かして，常設展示のリニューアルに結び付けていきたいというのが，本共同研究課題における最大の目的である。

そのために強く意識していることは，植物の利用や品種の維持に対する認識が，研究分野や時代によって大きく異なるということである。そこで，本共同研究課題では，できるだけ分野横断的であることと，時代によって植物利用のあり方を重視することに重点をおきたいと考えている。

具体的な作業としては，植物苑に植栽されている品種のリストに基づいて，これまで各分野で蓄積してきた研究成果を突き合わせていきたい。植物に関するデータベースがいくつか公開されているので，それを用いながら，植物の利用法について分野横断的な検証をおこなう。

そのうえで，人と植物の関係に基づいた解説プレートの新たな作成を検討する。現状の解説プレートは劣化が進んでいるので，いずれにしても交換が必要である。この解説プレートの作成を踏まえながら，来苑者が目的に合わせて歩けるような導線を，コンパクトなガイドブックと苑内地図の作成によって紹介したい。

また，くらしの植物苑であえて植栽していないイネや小麦などの農耕植物をどのように紹介していくか検討する。農耕植物の多くは，植物苑の土地条件によって植栽できていない。イネについては，バケツ栽培などを検討している。そして，人と植物の関係史をみていくには，本館展示とも関連した解説方法を検討する必要がある。

さらに，ヒョウタンやウリを加工した道具類や工芸品の保存と植物苑外での展示を検討していく。これによって，モノ資料と植物苑での生きた資料との関連が強化できると考えている。

２．今年度の研究計画

３．今年度の研究経過

４．今年度の研究成果

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

辻　誠一郎　東京大学名誉教授
岩淵　令治　学習院女子大学国際文化交流学部・教授
工藤雄一郎　学習院女子大学国際文化交流学部・准教授
菅根　幸裕　千葉経済大学経済学部・教授
西田　治文　中央大学理工学部・教授
平野　　恵　台東区立中央図書館・専門員
三浦　励一　龍谷大学農学部・准教授・
黒河内葉子　東京大学大学院農学生命科学研究科・助教
日高　　薫　本館研究部・教授
村木　二郎　本館研究部・教授
柴崎　茂光　本館研究部・准教授
荒木　和憲　本館研究部・准教授
島津　美子　本館研究部・准教授
○澤田　和人　本館研究部・准教授
◎青木　隆浩　本館研究部・准教授

（７）家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会
2020～2022年度
（研究代表者　土居　浩）

１．目　的

本研究の目的は，現在も進行しつつある家内における死者祭祀の変容，ひいては家族観･死生観の変容について，従来の歴史像を再検討しつつ，新たな歴史像を提示することである。そのため，主に物質文化（モノ）へ着目した検討に取り組む。時代としては近世から現代までを射程に入れており，中軸とするのは家内に安置された仏壇（お

よび位牌）である。仏壇は，日常的な先祖祭祀・死者祭祀の場として，人々の間に広く浸透しており，遺体・遺骨の収蔵施設である墓とは異なる性格を有する装置として，生活空間内で重要な役割を果たしてきた。近年，改めて仏壇や位牌に注目する研究が，さまざまな研究領域で単発的に散見されており，相互の知見を架橋し総合的に検討を行う。

２．今年度の研究計画

近世から近現代にかけての死者の家内祭祀の展開を検討する「仏壇祭祀の展開」班は，考古学的調査報告からうかがえる仏壇仏具の展開について，その対象資料決定する。また位牌の形態や祭祀のあり方などにみる地域的偏差にも注意をはらいつつ，民俗学や文献史，近世考古学，さらには仏教思想史などの関係諸領域相互の知見を架橋し，統合的な歴史像の構築を目指す。

現在の仏壇じまいとその同時代的動態を検討する「仏壇祭祀の変容」は，仏壇じまい・墓じまいなど，かつての祭具・仏具が，その終焉（しまわれ方）を含めどのような変容を迎えているのか，なかでも老人ホームなど施設へ入所する高齢者が増加していく現在，かつての祭具・仏具のその後について，調査対象の選定と調査内容の検討と交渉を行う。

研究史を回顧し従来の歴史像を再検討する「先祖祭祀の系譜」班は，「仏壇祭祀の展開」・「仏壇祭祀の変容」の両班が研究を進める中で，物質文化（モノ）に着目し提示されるはずの歴史像が，単に資料の量的増加に陥り従来の歴史像を無批判に前提していないか，そのフィードバックの役割も担うべく，両班と連携しつつ取り組む。

さらに，今年度は研究成果の一端として，特集展示「亡き人と暮らす：位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗」を開催する。

３．今年度の研究経過

新型コロナウイルス感染症の蔓延に対応するため，遠隔地での開催予定回も含め，対面での共同研究会を取り止め，Zoomでの研究会を開催した。一方，千葉県匝瑳郡のある旧家で使用された近世以来の位牌の一括や，手元供養，日露戦争戦死者の写真付き位牌など，家内祭祀に関わる仏壇に関する業界紙やカタログ等の資料購入を行い，それに対する研究を実施した。

対面での研究会に付随して行われる各種研究の打ち合わせや意見交換を代替するため，事前打ち合わせをZoomで数回開催して班員へ公開し，研究代表者・副代表者以外でも日時の都合がつけば参加可能とした。

４．今年度の研究成果

まず，特集展示「亡き人と暮らす：位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗」の開催である。この展示に際して，仏壇の多様性を近世期の読本等版本の挿絵から明らかにすることができた，また収集された新潟県佐渡市の仏壇では，村落の階層によって金仏壇や造り付けなどその形態が異なっており，仏壇の形態と社会階層の研究の必要性があきらかになった。また位牌については，現代の形態の差異は，おもに台座の相違であり，それは宗教宗派の相違ではなく，地域における流通の違いと喪家の嗜好であることは判明した。とくに，春日位牌については，現在基本的に全国的な使用が認められるが，戦前期の近畿地方では把握することができず，おもに東日本において戦後流通するようになった可能性が大きい。春日位牌のバージョンとして，葵角切型や勝美型があるが，いずれも東日本の方が多い。また，遺影の取扱については，位牌との融合が明治期から散発的に行われ，現在は手元供養品として融合しつつあることが分かってきた。以上のような成果とかともに，来年度の最終年度に向け，報告書作成の検討をしていくこととなった。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎土居　　浩　ものつくり大学・教授
大場　あや　大正大学・講師
問芝　志保　日本学術振興会・特別研究員
細田　　亮　はもれびクリニック・院長
村上　紀夫　奈良大学・教授
瓜生　大輔　東京大学・助教
朽木　　量　千葉商科大学・教授
徳野　崇行　駒澤大学・准教授
村上　　晶　駒澤大学・准教授
○山田　慎也　本館研究部・教授

（８）定期市からみた地域の生活文化の歴史と多様性に関する研究 2020～2022年度

（研究代表者　島立　理子）

１．目　的

日本各地では，資本主義経済のグローバル化や大都市への人口一極集中によって，地域社会の疲弊がおこっている。今，地域社会では，豊かな生活世界を持続的に維持する方策が求められている。その解決策は，地域のなかに自立的な生活文化（経済的，社会的，文化的な循環）をもち，地域ごとの多様性を維持することだと考える。その役割を果たしてきた１つが，市・定期市（地域の人びとが中心になりモノを売買し維持・発展させてきた場）だと予測している。

本研究では，人文系，自然史系を含む異なる専門分野の研究者が連携し，①市・定期市に通底する原理と，国と地域ごとの差異を，地域の歴史を絡めながら明らかにする。具体的な調査地として，千葉県（勝浦等），新潟県（長岡市，新潟市），台湾（台北市内）の３地域を設定し，各地の市と地域社会を比較する。そして，②市を持続的に活用するのに必要な基盤を考察するために，市・定期市の運営，販売商品の内容と流通ルート，売り手と買い手の利用形態の基本的メカニズムを明らかにしつつ，市でモノを売り買いする個人に焦点をあて，個人と市との関係を明らかにする。さらに，③総合的かつ学際的な方法論を編み出すことを目的とし，市を映像として記録するだけでなく，調査者の市における調査方法そのものも映像で記録し，調査の過程を可視化することによって，新たなフィールド調査の方法を編み出す。

２．今年度の研究計画

千葉県勝浦の朝市を中心に調査・研究を実施する。１年目は，勝浦朝市の全体像の把握と朝市運営組織との関係形成を目的として調査を実施した。２年目となる今年度は，運営に関わる資料（出店記録等）の収集と分析のほか，市でモノを売り買いする個人に焦点をあて，個人と市との関係を明らかにすることを目的として調査を実施する。朝市での商売を専業とする農家，陸海双方の生産品を扱う事業者などを中心に，商品の内容と流通ルート，売り手と買い手の利用形態などを具体的に明らかにする。また，朝市の歴史的変遷を明らかにするために，記録写真・記録映画をデジタル化し，現地に還元して聞き取り調査を実施する。これらの研究の成果を，中間報告とさらなる情報収集を目的として，移動型展示什器などを活用し，現地で簡便な展示会を実施して報告する。また，新型コロナウイルスの感染拡大の状況によるが，千葉県下の朝市の特徴と比較するため，新潟･台湾において調査を実施する。

３．今年度の研究経過

新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から，研究計画のうち，千葉県内での現地調査を中心に進めた。夏から秋にかけて計画していた調査は，緊急事態宣言により中止せざるを得なかった。また，勝浦の朝市との比較のために実施する計画であった，地域の生活市の性格の強い新潟県の定期市については，コロナ禍においてインテンシブな調査を実施することが難しいと判断し，実施を断念した。また，台湾への渡航も目処が立たない状況であった。そこで，勝浦の朝市との比較研究のため，五城目（秋田県）及び呼子（佐賀県）の市の調査を実施した。

【打ち合わせ】

2021年４月14日 勝浦市観光協会関係者と千葉中央博物館所蔵の写真コレクションによる写真パネル展示の計画について打ち合わせを実施した（かつうら商店にて，本共同研究から２名参加）。

2021年５月26日 勝浦市観光協会関係者と写真パネル展の計画を検討した（本共同研究から２名参加）。

【研究会】

2021年５月17日　13：00～17：00（オンライン開催，８名参加）

報告：勝浦での写真パネル展「教えてください，勝浦朝市のこと」について

協議：今年度の調査について

2021年９月29日　15：00～17：00（オンライン開催，９名参加）

協議：今年度の調査について

2022年３月４日　13：30～16：00（オンライン開催，10名参加）

報告：

吹春俊光（ゲストスピーカー）「勝浦朝市における山野の資源利用―震災以前の勝浦朝市におけるキノコの販売」

各調査班（●は班長）

①基礎データ収集班（●小田島，西谷，梅崎，内田）
②売り買いのやりとり調査班（●川村，内田，西内）
③写真・雑誌・新聞の調査班（●内田，島立，小田島，柴崎）
④山・畑の調査班（●島立，柴崎，大久保，水野，川村）

【現地調査】

６月26日～28日　勝浦（８名参加）出店者への聞き取り，朝市の出店料金徴収記録の閲覧
７月17日　勝浦（２名参加）出店場所，商品調査，出店者への聞き取り
10月９日　勝浦（３名参加）出店場所，商品調査，出店者への聞き取り
11月14日　勝浦（５名参加）出店場所，商品調査，出店者への聞き取り
11月26日～27日　五城目（秋田県）（２名参加）勝浦との比較のための調査
12月12日　勝浦（２名参加）出店場所，商品調査，出店者への聞き取り
12月26日～27日 勝浦（６名参加）出店場所，商品調査，出店者への聞き取り
１月９日　勝浦（２名参加）出店場所，商品調査，出店者への聞き取り
１月16日～17日　呼子（佐賀県）（４名参加）勝浦との比較のための調査
３月20日　勝浦（２名参加）出店場所，商品調査，出店者への聞き取り
３月27日　勝浦（１名参加）出店場所，商品調査，出店者への聞き取り

【出張展示】

勝浦朝市関係者から提供された写真のほか，千葉県立中央博物館が所蔵する勝浦の生活文化に関する写真30点による写真パネル展示「教えてください　勝浦と朝市のこと」（会期：2021年７月15日～８月31日，主催：一般社団法人 勝浦市観光協会・国立歴史民俗博物館・千葉県立中央博物館）を，かつうら商店（勝浦市観光協会アンテナショップ）にて開催した。

４．今年度の研究成果

緊急事態宣言等で現地調査が困難な時期もあったが，新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策を講じつつ，勝浦朝市を中心に，順調に調査を進めることができた。また，初年度に構築できた朝市の運営組織との協力関係により，出店状況や商品を記録した数年分の紙資料の提供を受け，デジタル化と分析を進めることができた。また，初年度に続いて今年度も，写真パネルによる出張展示を，勝浦市観光協会・国立歴史民俗博物館・千葉県立中央博物館の３者により，勝浦で開催することができた。

今年度の関連する刊行物
内田順子「市のたのしみ　第３回」『REKIHAKU』３，国立歴史民俗博物館，pp.104-105，2021年６月26日

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大久保　悟　国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構・農業環境変動研究センター・ユニット長
梅崎　昌裕　東京大学大学院医学系研究科 国際保健学専攻 人類生態学講座・教授
黄　　貞燕　國立臺北藝術大學・圖書館長
小田島高之　千葉県立中央博物館・生態・環境研究部長
西内　李佳　千葉県立中央博物館・生態学・環境研究科・研究員
水野　大樹　千葉県立中央博物館・企画調整課・副主査
川村　清志　本館研究部・准教授
柴崎　茂光　本館研究部・准教授
○内田　順子　本館研究部・教授
◎島立　理子　千葉県立中央博物館・企画調整課長

（９）秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究
2021～2023年度
（研究代表者　下田　誠）

１．目　的

本研究は，中国秦漢時期の文字使用をめぐる人間活動を対象として，歴史資料の研究資源化・高度情報化を目的

とする学際的研究である。東アジア歴史空間でひろく共有された，文書行政による社会運営システムの源流を探究する試みである。

中国では，戦国時期から秦漢時期にかけて官僚制の形成に伴い文書行政が発達した。それを支えたのは書写材料としての木簡・竹簡（あわせて簡牘と呼ぶ）と印である。秦漢時期の中国では，皇帝以下地方の下級役人まで，諸官が印を文書行政に使用していた。中国古代史の解明では，出土数や情報量の多い簡牘に注目が集まり，出土数の限られる封泥への注目は少ない。しかし，当時の中国社会を支えた文書行政システムを総体としてとらえるためには，簡牘と印・封泥を含めて，文字を使用するさまざまな局面での人々の行為・所作をトータルに復元する必要がある。歴博総合展示第１室「先史・古代」で竹簡と共に筆や削刀，印や封泥を展示するように，こうした視点で秦漢時代社会をとらえることが本研究の目的である。

日本では，漢と交渉した弥生時代以降，木簡を使用した７世紀後半にも，封泥は存在していない。簡牘の日中比較研究はさかんであるが，存在しない封泥への関心は薄い。古代日本の交渉対象，あるいは行政システムの源流として中国を評価するには，日本に直接結びつくもの，日本にも存在するものだけでは不十分であり，本研究が取組む「総体としての文字使用環境」と比較してこそ，弥生時代の日中交渉や日本古代の簡牘システムを相対的に評価することが可能になる。本研究は封泥を中心にして，秦漢時期の文字使用をめぐる人間の活動や身体所作をトータルに復元することを，第１の目的とする。

印と封泥は，秦漢国家の管理・運営のシステムを象徴するモノである。本研究では，戦国末秦・統一秦期の封泥を対象として，封泥を用いた新たな情報・物資伝達システムの確立と実態を検討する。秦封泥の解明は，文書行政システムの端緒を明らかにし，その研究意義は大きい。同封泥に対する歴史学的分析，考古学的分析，理化学的分析を統合することによって，文書行政システムが帝国中国の全領域で確立してゆくプロセスを解明する。これが本研究の第２の目的である。

本研究は「文字使用」のツールにかかる議論を集約し「文字を使う環境」を総合的に復元・検討し，「文字使用をめぐる学際的研究」のモデルを提示する。それは，日本をはじめ，簡牘を利用した東アジア各地の古代史を評価する上でも有益な視点が提示できると考える。

２．今年度の研究計画

本研究は，秦封泥の形態情報の精査と理化学的分析の展開と，秦漢時代の封泥の歴史学的評価をもって推進する。日本国内所蔵の秦封泥の精査をおこない，形態・文字情報を検討することと（封泥形態論），封泥を中心として文字使用環境を体系的に復元すること（封泥システム論）の二つの方向性で推進する。

形態論では，封泥の３次元情報をもとにして，押印により形成された封泥上の文字形状や配置といった文字情報，封泥に遺る梱縛の痕跡や圧痕の整理をおこなう。文字情報は，既存の封泥及び印章の集成情報を対照することにより封泥・印の編年研究の整備を進め，使用痕跡情報をもとに，押印所作の復元と類型化を進める。後者は，模擬実験等を展開し，理解モデルを検証する予定である。また，封泥の材質分析及び封泥付着対象物の材質推定をおこない，利用素材の視点でも封泥の評価をおこなう。封泥をめぐるさまざまな所作を，封泥に遺された諸情報から，多元的に復元してゆくことを形態論の目的とする。

システム論では，封泥を利用した社会システムを復元することに主眼を置く。文字使用の場での簡牘と封泥との関係，封泥出土遺蹟（地点）の評価，出土資料としての刀筆・簡牘・印章・封泥との相互関係，封泥（印章）文字情報に基づいた歴史地理環境の復元などを論点として設定する。

形態論とシステム論とは，個別分担課題の枠にとどまらず，相互に連携して研究を推進する予定である。なお，日本古代史の簡牘研究や，弥生時代文字関係資料として注目される硯研究などとの連携も想定されるが，随時ゲストスピーカーを迎えることによって，対応してゆく予定である。

資料の調査に関しては，国内所蔵の秦封泥を歴博に搬入し，３次元情報（透過撮影を中心）の取得や，蛍光X線分析及び電子顕微鏡を利用した材質分析を予定している。３回予定している研究会では，形態論・システム論ともに，現状での認識と問題点を整理し，上記基礎情報及び課題を共有することをめざす。

３．今年度の研究経過

●第１回研究会　（2021年６月25日　オンライン開催）

鶴間和幸「秦封泥から見た始皇帝の陵廟への献上品」

下田　誠「秦郡官小考―封泥を中心として―」

●X-CT装置を利用した分析　（2021年10月27・28日　東北大学）

分析･方法論の模索を目的として，東北大学学術資源公開センター（総合学術博物館）にて，高分解脳CTスキャ

ンシステムを利用し，秦漢封泥の調査をおこなった。

●第２回研究会　(2021年11月13・14日　於観峰館)

瀬川敬也「観峰館蔵封泥に関する所見」

松村一徳「秦封泥の見方」

上野祥史「封印の所作と文字行為の復元」

青木俊介「小官印の使用範囲とその封泥の出土に関して」

髙村武幸「秦漢時代の官印使用の状況」

籾山　明「簡牘をめぐる〈しごと〉―秦封泥研究の前提として―」

観峰館特別展示の観覧／資料検討

●第３回研究会　(2022年３月　オンライン開催)

箱﨑真隆「封泥に残る植物圧痕の分析について」

島津美子「封泥の化学組成と材質分析の試み」

谷　豊信「秦封泥の形状分類について」

４．今年度の研究成果

形態論とシステム論を両輪として，「文字使用環境」の体系的検討視点の確立がおこなえた。封泥という共通の音資料を対象としつつ，議論は４つの方向で相互に関連をもちつつ進行した。第１は印面や印字に着目した検討で，鶴間報告や下田報告では，行政系統や歴史地理空間の復元，あるいは物資流通の一面への接近が図られ，歴史地理情報に対照した封泥資料の活用が展望された。第２は封泥の形態に関する検討で，松村報告，瀬川報告，上野報告，谷報告がそれに該当するが，検討は二つの方向性を以て進行した。一つは，松村報告や谷報告でなされた印字や封泥の形態から時間指標を抽出しようとする分類・編年の検討であり，今一つは，瀬川報告や上野報告でなされた封泥の諸痕跡から押印所作を復元する試みである。いずれも封泥の形態分類から，秦封泥の特徴・特質を抽出しようとする取組みである。第３は，封泥の形態と関連した，理化学分析であり，箱﨑報告や島津報告では，封泥に残る圧痕から使用された木質系の材の推定や，鉱物・土質的視点での分析方法について，模索がなされた。第４は，封泥生成・押印所作の場への注目であり，青木報告，髙村報告，籾山報告では，出土文字資料と典籍文献をもとに，幅広い社会階層を対象にして所有印や業務における押印の所作が復元・展望された。上野報告では，葬俗に反映された印の保管に注目した検討もなされ，この検討と相互に関係している。

各報告を通じて個別の視点が深化した一方，各視点を横断・連結する方向で討議は進行しており，形態論とシステム論を交差させつつ，秦漢時期の文字使用環境を体系的に復元する素地は整えられたと評価する。かつ，観峰館での特別展を見学することにより，資料に対しての認識を共有しつつ，論点の整理をおこなえた意義は大きい。

なお，X-CT装置を利用した内部情報を含めた封泥の理化学分析は，外部調査機関と連携した高精度分析の方法を模索し，その体制を確立することができた。ただ，年度末後半には分析主対象の一半の撮影・分析に取組む予定であったが，コロナの社会影響が深刻化する中で，実施を2022年度に見送ることになった。

５．全期間の研究成果

今年度は第１年度であり，論点の共有，分析方法の確立，議論の方向性を模索という第１年度に予定している当初の目的は概ね果たせた。今年度の研究成果の項目に記したように，各種理化学分析は予察段階にとどまっており，来年度以降，本格的に稼働する予定である。

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

青木　俊介　清泉女子大学

島津　美子　本館研究部・准教授

瀬川　敬也　観峰館

髙村　武幸　明治大学文学部

谷　　豊信　東京国立博物館

鶴間　和幸　学習院大学文学部

箱﨑　真隆　本館研究部・プロジェクト研究員

松村　一徳　シールロード研究所

籾山　　明　東洋文庫

◎下田　　誠　東京学芸大学次世代教育研究センター

○上野　祥史　本館研究部・准教授

(10) 映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究―制作とアーカイブスの実践的方法論の検討
2021～2023年度
（研究代表者　村上　忠喜）

1．目　的

2．今年度の研究計画

3．今年度の研究経過

4．今年度の研究成果

5．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

(11) 番方旗本家に関する総合的研究―大番士・儒者杉原家文書を中心に―
2019～2021年度
（研究代表者　三野　行徳）

1．目　的

本研究は，旗本杉原家を対象に，近世の番方旗本家の存立状況を復元的に検討することを目的とする。

国立歴史民俗博物館所蔵幕府儒学者杉原平助関係史料（杉原家文書）は，江戸幕府旗本杉原家に伝来した史料群である。史料名に「儒学者」とあるが，杉原家は江戸開幕以来，代々「大番士」を勤めて幕末を迎える。史料名に「儒学者」とあるのは，幕末期に当主となった杉原平助が儒者として登用され，幕末外交にも関与したこと，および，本史料には平助関係の史料が多く残されていることによる。すなわち，杉原家文書には，幕府官僚制の伝統（軍団組織の身分制的編制と継承）と革新（身分制を超えた登用）が併存するわけである。ひとつの家に両側面が存在する，極めて興味深い家である。これまでの調査の結果，杉原家文書の重要な特徴は①番方旗本として類例のない大規模史料であること，②旗本のなかで最も人数の多い階層（200俵）の旗本家であること，③大番士の日常業務や生活に関わる日記類が多数残されていること，④昌平黌儒者となって幕末外交にも関与することとなる杉原平助を輩出し，平助の学問や職務に関わる史料が多く残されていること，⑤明治維新期・維新後の史料が残されており近代士族の研究が可能であること，⑥初等教育や絵画，屋敷に関する史料など，旗本家を復元的に研究できる史料が残されていることとまとめることができる。一般的に残存状況の厳しい旗本家資料にあって，特筆すべき特徴といえる。本研究の目的は，このような価値･魅力を持つ杉原家文書をあますことなく分析し，同文書を手がかりとして，近世の旗本家について，総合的・復元的に検討することである。

以上の点を踏まえ，本共同研究では，以下の４つの研究課題を設定して研究を進める。

①旗本・士族杉原「家」の研究：旗本の中核を占める階層である杉原家を素材に，家の継承・教育資本の形成・屋敷地の活用など，「家」に即した近世初期から明治期までの研究。

②杉原家の職務に関する研究：大番士の職務に関する史料を中心に，江戸幕府の官僚制・軍団の構成員の日常を復元的に検討し，幕藩官僚制の基礎的研究を行う。

③儒学者杉原平助の研究：杉原平助による儒学研究・教育・著述と，儒者としての職務を，その幕末外交への関わりを含めて検討し，近世後期の儒学者の存立状況を研究する。

④アーカイブズ学的研究と研究資源化：2000点を超える杉原家文書の構造についてアーカイブズ学的に分析するとともに，主要史料の翻刻やデジタル化など研究資源化を行う。

以上の４つの視角から，本共同研究を終えた後も，杉原家文書がさまざまに活用される途を模索し，併せて，国内で既に確認されているいくつかの旗本家資料について実地調査や複写の入手を行い，「旗本家資料」研究の可能性を展望したい。

2．今年度の研究計画

2021年度は，共同研究最終年度として，研究成果をまとめることが課題となる。まとめにあたっては，各自の研究に加えて，共同研究の「旗本杉原家を総合的・復元的に明らかにする」という課題に一定の成果を示す必要がある。設定した４つのアプローチ方法それぞれから，旗本杉原家旗本杉原家の存立状況を複合的に明らかにするため，以下の計画で研究を遂行する。

研究会は３回（５月，８月，12月）開催し，各自の研究で得られた成果をまとめる。

併せて，2022年２月頃にシンポジウムを開催し，各班単位での研究成果を発表し，旗本杉原家および旗本資料について総合的に議論する。

また，国内のまとまった旗本資料については，2021年度も引き続き調査を行い，旗本資料の資料論的特徴の検討を進める。具体的には，神戸市（川村家），長野市（室賀家），仙台市（新見家），五島市（五島家）などを予定している。併せて，宮内庁書陵部・東京大学史料編纂所・武蔵村山市歴史民俗資料館等の他機関所蔵の未調査旗本資料についても，積極的にデジタル化を進める。

３．今年度の研究経過

本年度は前記のような計画のもと研究を開始したが，コロナ禍のため，調査などの活動をほとんど実施することができなかった。そのため，各自が研究した成果を研究会で報告し，成果を共有しまとめることを中心に進めた。実施した研究会・シンポジウム・調査・資源化は以下の通りである。

【研究会】

①第１回研究会　2021年５月23日　於：オンライン（zoom）

第１回研究会では，家班・役職斑を中心に，以下の内容で研究報告会を行った。

役職斑　小池駿介「杉原家文書と日次　総括」

平助班　浦木賢治「杉原家文書の絵画資料について―「画図百花鳥」，狩野派粉本ほか―」

三野行徳　「これまでの成果と課題」

全体打ち合わせ／グループミーティング

最終年度の最初の共同研究研究会として，杉原家文書中の日次や絵画資料といった特徴的な資料について，資料論的なアプローチでその価値を共有することができた。併せて，共同研究全体としての課題を検討することができた。

②第２回研究会　2021年９月25日　於：オンライン（zoom）

第２回研究会では，家班・役職斑を中心に，以下の内容で研究報告会を行った。

家班　　小粥祐子「明治以降と考えられる杉原家住宅の平面図について」

役職斑　高久智広「大番組の組織と役割―二条・大坂在番を中心に―」

平助班　工藤航平「昌平坂学問所と杉原平助」

三野・中谷・高橋・小粥・野本・高久・小池・小川・梁・浦木「これまでの成果と課題」

全体打ち合わせ／グループミーティング

最終年度の第２回の研究会として，杉原平助の昌平坂学問所儒者としての勤務に関する研究を中心に研究報告を行うとともに，全参加者のこれまでの研究成果を報告し，共有することができた。

③班ごとの小研究会・打ち合わせ　於：オンライン（zoom）

以上の研究会のほか，最終年度として成果をまとめるべく，以下の日程で班ごとの小研究会を実施した。

５月２日，６月15日，６月25日，６月29日，７月11日，７月21日，12月23日，12月26日，１月７日，１月31日，２月12日

【シンポジウム】

本共同研究では，2021年２月27日に埼玉県立歴史と民俗の博物館・関東近世史研究会の共催で開催したシンポジウム「旗本研究のこれまでとこれから―埼玉から旗本を考える―」につづき，本年度は共同研究の成果を公表すべく，オンラインシンポジウムを開催した。内容は以下の通りである。

オンラインシンポジウム「旗本杉原家の世界」

三野行徳　趣旨説明

髙橋喜子　杉原家の当主と由緒書類

髙久智広　大番士の二條・大坂在番―旗本杉原家・鈴木家の事例を中心に―

小池駿介　杉原家文書における日次―役職と記録類の作成―

小川和也　心斎杉原平助の思想―朱子学から清朝考証学へ―

小粥祐子　杉原家の拝領屋敷地と住居変遷
浦木賢治　美術史研究の視点から旗本資料の可能性を探る―「小川破笠筆関羽像」模本，狩野派粉本・絵手本―
岩淵令治　コメント
久留島浩　閉会挨拶
13時から17時の長時間のシンポジウムであるにもかかわらず，62名もの参加者を得ることができ，共同研究の幅と広がりを多くの研究者や市民と共有することができた。

【史料調査】
①宮内庁書陵部　旗本戸川家文書の調査を行った。
②神奈川県立金沢文庫　旗本依田家文書の調査を行った。
③大分県立先哲資料館　旗本時枝小笠原家史料の調査を行った。
④茨城県立歴史館　旗本本堂家史料の調査を行った。
⑤栃木県那須歴史探訪館　旗本芦野氏関係資料の調査を行った。
⑥港区郷土資料館　旗本久保家資料の調査を行った。
本年度は，本来であれば，長野県や宮城県，愛知県などで長期間，一定の人数で資料調査を行う予定であったが，コロナ禍のなかで，そうした調査はすべて中止とせざるを得なかった。そのため，関東近県の資料所蔵機関で，展覧会などの開催と併せて，簡易に短時間の調査を実施することに留まらざるをえなかった。しかし，これまで未調査・未確認の多くの旗本資料の存在を確認でき，一定の成果を得ることができた。
【資源化】
①デジタル化
　杉原家文書中の刀剣等の撮影を進め，杉原家文書すべてのデジタル化を終えた。
　武蔵村山市歴史民俗資料館寄託の旗本井上清直関係資料のデジタル化を行った。
②筆耕
　杉原家文書中，諸種日記や外交関係資料などなど主要史料46点の筆耕を行った。
③複写収集
　宮内庁書陵部で旗本戸川家文書の複写収集を行った。

４．今年度の研究成果

2021年度は，共同研究のまとめとして，①各自の分担する役割について，研究を完成させることを目標として設定した。併せて，②全国の資料所蔵機関に伝来する旗本資料の調査を行い，旗本資料の資料的特徴を検討すると共に，③旗本研究の意義を歴史研究者や一般社会に問うための公開研究会を開催することを目指した。

以上の３点を課題として掲げたが，コロナ禍によって②は当初の計画を変更せざるを得なかった。そのため，共同研究全体での研究会に加え，各班でこまめに小研究会を開催し，研究成果をまとめつつ，③の公開研究会の開催を目指した。

本年度は，各自の研究の進捗に加えて，各班としての成果をまとめることに留意した。すなわち，家班では，旗本家の成立・継承とはどのように実現するのか，に留意して初代から明治期までの杉原家の継承を検討すると同時に，家の継承を実現する仕組みとしての婚姻や屋敷に注目し，また，家の継承を文書的に位置づける「先祖書」「明細書」「由緒書」「親類書」と称される一連の資料群について，家班全体の課題として議論した。これらの文書は旗本家に多く伝来するが，それがいつどのような場面で，何のために作成されたのか，という点について検討できたことは，旗本資料の特徴を考える上でも意義のある研究となった。

当初，大番班として設定した班は，初年度の研究の成果を受けて，２年度目に役職班と名称を変えた。杉原家当主が代々大番士を勤めていたことから大番班としたが，研究を進め，資料を詳細に見ていくと，大番以外の職務に関する記録も多く残され，番方の旗本の職務をより多様に分析できると考えたためである。役職班では，役職に関わる多くの日記史料や記録類に着目し，資料論的な分析と内容の分析を各自のテーマに沿って行った。また，大番士が二条城や大坂城に勤番する在番についても検討を行った。これらは幕府の軍事制度の中心的な仕組みに関わる問題でありながら，これまで資料的な制約から充分に検討されてこなかった問題であり，杉原家文書の特徴を活かして幕府官僚制度の実態に迫る成果を得ることができた。

当初平助班として設定した班は，初年度の成果を受けて，２年度目に平助･文化教養班と名称を変えた。これは，幕府儒者であり幕末外交に関わった杉原平助についての研究，という視覚から当初アプローチしたが，初年度の研究により，杉原家に残された多種多様な資料の特徴を活かし，旗本家の文化・教育環境を踏まえて平助を理解し，

また旗本家の文化資本を含めて旗本杉原家を理解すべきだと考えたことによる。平助・文化教養班では，儒学に関する分析に大きな進展を見ることができた。平助が勤仕した昌平坂学問所について，平助の思想や役割，学問所の仕組みに注意して分析を行うと同時に，学問所儒者を超えた儒学者杉原平助の思想に迫ることができたのは，大きな成果である。さらに，杉原家文書に残された多くの美術資料についても本格的に分析に取り組み，これらの資料の成立背景に迫ると同時に，旗本家に伝来する，多くは名品・美品では無い美術資料についての，資料的価値に言及できたことは，今後の旗本研究や美術研究の展望を示す成果と言えよう。

以上のように，各班，各分担者とも，これらの分析から旗本家の継承・役職・文化教養・儒学についての成果をまとめており，また，共同研究としても，成果を共有して旗本家や杉原平助の実像に迫ることができ，多様な視点から旗本家の様相を浮かび上がらせることができた。また，2022年２月27日にオンラインシンポジウムを開催したことにより，共同研究の成果を一定程度社会と共有することができた。

資源化という点では，杉原家文書全点の撮影を終えたことに加え，関連する旗本資料である井上清直関係資料のデジタル化を終えたことも重要な成果である。昨年実施した本多家文書のデジタル化も加えて，今後の旗本研究の基盤整備を進めることができた。また主要史料の筆耕も進んでおり，共同研究終了後に，杉原家文書が充分に活用されるための準備が整いつつある。

研究成果の公開，という点では，２月27日にシンポジウムを開催し，杉原家文書が伝来した杉原家の方々を含め，研究者・市民合計62名の参加を得ることができた。

以上のように，コロナ禍の下，資料調査を中心として大きな制約のなかでの活動であったが，着実に研究を進め，３年間の研究成果をまとめることができたと考える。

【論文等】

関東近世史研究会『関東近世史研究』第89号　2021年９月

特集「《シンポジウム　旗本研究のこれまでとこれから―埼玉から旗本を考える―》

三野　行徳：趣旨説明

【個別報告】

中村　陽平「旗本を展示する」

野本　禎司「旗本研究の課題と展望―「武蔵国の旗本」展から」

澤村　怜薫「埼玉から旗本知行論を考える」

ディスカッション要旨

榎本　博「シンポジウム参加記」

埼玉県地方史研究会『埼玉地方史』83号　2021年11月

［特集　北武蔵地域における旗本研究の射程］

澤村怜薫　特集にあたって―いま，旗本を考える意味―

三野行徳　地方文書のなかの旗本史料―旗本小堀家と金子家・巻島家―

野本禎司　幕末期の旗本知行所支配における家臣書簡 ―旗本牧野家の「在役」宛書簡の検討―

中村陽平　旗本菩提所の「成立」と護持―旗本水野家菩提所昌国寺を事例に―

澤村怜薫　旗本家の由緒と家職ゆかりの知行地―忍鴻巣御鷹場支配天野家を事例に―

重田正夫　旗本筒井政憲と甲山村の豪農根岸家―プチャーチン来航への対応ー

【学会報告】

2021年９月10日　小粥祐子「旗本・杉原家の拝領屋敷地および屋敷の変遷について『幕府儒学者杉原平助関係資料』の研究 」日本建築学会大会（東海）学術講演会・建築デザイン発表会

2022年１月30日　三野行徳「17世紀武蔵野新田の開発と旗本抱屋敷」関東近世史研究会企画例会「江戸西郊地域の開発と武家」

2022年２月27日　オンラインシンポジウム「旗本杉原家の世界」

三野行徳　趣旨説明

髙橋喜子　杉原家の当主と由緒書類

髙久智広　大番士の二條・大坂在番―旗本杉原家・鈴木家の事例を中心に―

小池駿介　杉原家文書における日次―役職と記録類の作成―

小川和也　心斎杉原平助の思想―朱子学から清朝考証学へ―

小粥祐子　杉原家の拝領屋敷地と住居変遷

浦木賢治　美術史研究の視点から旗本資料の可能性を探る―「小川破笠筆関羽像」模本，狩野派粉本・絵手本―
岩淵令治　コメント
久留島浩　閉会挨拶
2022年３月19日　三野行徳「維新期，旗本家の構造―解体過程から考える―」歴史学研究会日本近世史部会大会支援報告

５．全期間の研究成果

本共同研究は，杉原家文書をあますことなく分析し，同文書を手がかりとして，近世の旗本家について，総合的・復元的に検討すると同時に，杉原家文書が共同研究終了後に研究・文化資源として共有されるべく資源化を進め，併せて他の旗本資料についても調査・研究を進めることを目的として発足した。詳細は冒頭に記したので繰り返さないが，①家班②役職班③平助・文化教養班の３つの班を編成し，班ごとに課題を設定して，複合的に旗本家を分析することを目指した。

本共同研究の第一の課題である，複合的な視点から旗本家を分析する，という課題はある程度達成できたと考える。旗本研究において基本的な分析視角である①家班による旗本家の継承という問題についても，戦国末期の家の誕生，近世化した旗本家の成立から維新期の家の存続や明治期の展開について，基礎的な事実の解明と共に，婚姻や縁戚関係などの家の横の関係や女性の位置の問題，家の存立の根拠となる由緒書等の史料，居住した屋敷など，複合的な視点からアプローチしたことは共同研究ならではの成果と言えるだろう。同じく旗本研究の基本的な分析視角である②役職についても，杉原家が務めた大番士という職務について新たな事実を多く明らかにしたと同時に，大坂在番の実態に迫ったのは重要な成果である。また幕末期の番方武士の実態に迫った点も重要な成果である。さらに，杉原家に残されたこれらの役職遂行の根拠となる膨大な日記や記録類について，史料論的に分析すると同時に，その大部分を筆耕し終えたことは，今後の旗本研究の基盤形成としても大きな意味を持つ。杉原家の個性に注目するなら，③平助・文化教養班の成果は杉原平助という強烈な個性に迫ることができた。大番士の家に生まれ，儒学の教養によって昌平坂学問所儒者に登用され，学問所での儒学教育をはじめとする業務に携わると同時に，開国期以降の動乱の中で，米露との外交問題に間接的に関わるとともに，清朝考証学を背景としたイデオローグとして活動した杉原平助の内面に，意見書や著作を含む諸史料から迫ることができた。旗本家を複合的に分析するという方法から，他班の成果とも併せて議論することにより，立体的な旗本家像，杉原平助像を描くことが可能になった。また，史料論的には，旗本家に残された美術関係史料を分析し，研究資源としての価値に迫ったことも大きな成果である。従来，名品・美品ではないこれらの史料が積極的に分析されることは無かったが，旗本家の存立を可能にする文化資本や文化環境という視点と，美術史的方法や知見とを併せて分析することで，旗本家の文化環境を検討すると同時に，こうした美術資料の研究資源としての価値や研究方法を提示できたことは大きな成果ではないだろうか。

第二の課題である資源化，という点では，従来，伝来する史料の少なさから研究が進展してこなかった旗本研究にとって，重要な資源化を実現できたと考える。杉原家文書は刀剣等のモノ資料も含めて全点の撮影を終え，併せて，国立歴史民俗博物館に伝来するもう一つの旗本史料である本多家文書も，マイクロフィルム全点のデジタル化を終えた。これらの史料データは，早ければ2023年度には全点が国立歴史民俗博物館のデータベース「Khirin」で公開される予定であり，今後の旗本研究をはじめとする様々な研究の資源として，あるいは市民共有の文化資源として，活用が可能になる。

第三の課題である全国の旗本史料調査については，コロナ禍の影響を受けて充分な調査を行い得なかった。とくに遠方での調査がほぼ実施できなかったのは，非常に悔やまれる点である。とはいえ，関東近郊を中心に以下の旗本史料の所在を確認し，調査を実施することができた。今後の課題として，全国の旗本史料や知行所史料の情報の総合化を想定しており，そのための基礎作業としても，今回の調査成果は重要な意味を持つ。

調査を実施した旗本関連史料：旗本新見家文書（東北大学附属図書館狩野文庫），旗本本堂家・家臣史料（茨城県立歴史館），旗本芦野家・家臣史料（那須歴史探訪館），旗本戸川家文書（宮内庁書陵部），旗本依田家文書（神奈川県立金沢文庫），旗本時枝小笠原家知行所史料（大分県立歴史博物館），港区郷土資料館（旗本久保家文書），江戸東京博物館所蔵旗本資料，旗本知行所御用場高嶋家文書（国文学研究資料館），福本池田家資料・備中後月旗本池田家資料（鳥取市歴史博物館・やまびこ館）

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎三野　行徳　東洋英和女学院大学・非常勤講師（総括・家班代表・維新期～明治期）
小川　和也　中京大学・教授（平助・文化教養班代表・儒学）

工藤　航平　東京都公文書館・専門員（平助・文化教養班・昌平坂学問所）
野本　禎司　東北大学・助教（役職班代表・季七郎）
浦木　賢治　静嘉堂文庫美術館・学芸員（平助・文化教養班・絵画資料）
小粥　祐子　東京都公文書館・専門員（家班・屋敷）
小池　駿介　日本銀行金融研究所アーカイブ・アーキビスト（役職班・日記資料）
髙木まどか　国文学研究資料館・プロジェクト研究員（家班）
高久　智広　神戸市立博物館・学芸員（役職班・幕末期）
高橋　喜子　国立公文書館・調査員（家班・近世後期）
中谷　正克　株式会社ワンビシアーカイブズ（家班・近世前中期）
梁　　媛淋　学識経験者（平助・文化教養班・儒学教育）
濵島　実樹　早稲田大学大学院・博士後期課程（RA）
○福岡万里子　本館研究部・准教授（平助・文化教養班・幕末外交）
久留島　浩　本館研究部・特任教授（役職班・官僚制全般）

(12)『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究
2020～2022年度
（研究代表者　家永　遵嗣）

1．目　的

本研究の目的は，国立歴史民俗博物館所蔵『広橋家旧蔵記録文書典籍類』の全体像を歴代当主の伝記を軸として整理して提示するとともに，包含史料それぞれの価値を提示し，本史料群を用いた研究の多様化と活発化を促すことにある。具体的には，当該史料群に含まれる日記・公務関係文書・先例調査文献を，歴代当主それぞれの経歴と結びつけて位置づけ，その全体像をイエの歴史として整理して提示する。さらに，近年試みられている業務書類や故実研究典籍についての研究方法を適用し，これら史料群の内容とその価値を解明・紹介することを通じて，本史料群を用いた研究の多様化と活発化を促す。また，近代における史料の整理・補修によって当該史料群の現状が如何に形成されたのか，についても示す。あわせて，広橋家に関係する史料に関わる研究文献を調査し，研究文献目録を作成して活用の一助とする。

2．今年度の研究計画

史料架蔵機関の公開状況が改善すること，共同研究員の調査出張が可能になるということが，プロジェクト業務の本格的な展開にとって重要な条件になる。とはいえ，共同研究員は当該史料群の調査についての長年の実績を有しており，研究交流による視野の拡張や観点の発見により大きな成果が得られると見込まれる。

歴代各当主の伝記的研究と，各代において注目すべき個別史料，朝廷財務など特定分野についての通史的研究という観点で，共同研究員およびプロジェクト外の研究者を招待して研究発表を進める。これらの方々に『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号への寄稿を依頼してゆく予定である。本特集号が歴代の伝記を通観する手引きとなり，注目すべき研究分野や注目すべき史料を研究するための糸口・手がかりになるように推進してゆく。

以上より，コロナ状況の解消を期待しつつ，対面・オンライン併用の研究会を通じて研究交流を進め，調査活動の条件が整い次第，調査活動に取り組むことを予定する。最終年度に実施するフォーラム・特集展示については今年度に計画を策定し，令和５年度に特集号の刊行を実現できるよう準備を進めてゆく。

3．今年度の研究経過

今年度も新型コロナウィルスの感染拡大により，館蔵史料を用いた研究会と史料調査を実施することができず，下記の３回の研究会を開催するにとどまった。なお，研究会は感染拡大予防の観点から，対面とオンラインの併用で開催した。

①第４回研究会（2021年５月１日）
高橋秀樹「藤原兼仲の『勘仲記』と年譜」
田村航「広橋本『薩戒記抄』と広橋親光（兼郷）の記録」
末柄豊「町広光の活動と広橋本」
村井祐樹（研究協力者）「南北朝期室町幕府における水論裁定」

②第５回研究会（2021年８月31日）
遠藤珠紀「勘解由小路光業を探る」
桃崎有一郎（研究協力者）「『綱光公記』に探る公家実務リテラシーの形成環境」
木下昌規「広橋国光と武家権力」
③第６回研究会（2021年12月26日）
廣田浩治「『守光公記』にみる守光の姿勢―武家との関わりを中心に―」
田村航「広橋兼郷の晩年」
瀬戸祐規「広橋守光の政務と『守光公記』―戦国期の広橋家と日記―」

４．今年度の研究成果

①遠藤珠紀「広橋家文書の伝来寸描」（東京大学史料編纂所研究成果報告2021―８『藤波家旧蔵史料の調査･研究』，2021年）
②遠藤珠紀「伝『大外記中原師生母記』（播磨局記）文禄四年別記」（『古文書研究』91号，2021年）
③遠藤珠紀「天正十六年『聚楽行幸記』の成立について」（『アジア遊学』262号，2021年）
④遠藤珠紀「「『院中御湯殿上日記』（天正一六年七月・八月記）の研究」」（『禁裏・公家文庫研究』第八輯，2022年）
⑤遠藤珠紀・金子拓「『兼見卿記』紙背文書（七）慶長十四年記紙背」（『ビブリア』155号，2021年）
⑥遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎「綱光公記　宝徳二年七月～一二記」（『東京大学史料編纂所研究紀要』32号，2022年）
⑦遠藤珠紀・宮崎肇・金子拓「宣教卿記」（『早稲田大学図書館紀要』69号，2022年）
⑧遠藤珠紀・高橋敏子・三枝暁子『賀茂別雷神社史料３　賀茂神主経久記Ⅰ』（山代印刷，2021年）
⑨尾上陽介「東京大学史料編纂所所蔵『藤波家蔵文書記録目録』に見える『民経記』原本の構成」（東京大学史料編纂所研究成果報告2021―８『藤波家旧蔵史料の調査・研究』，2021年）
⑩末柄豊「新撰菟玖波集と後土御門天皇」（『日本文学研究ジャーナル』19号，2021年）
⑪末柄豊「尊経閣文庫所蔵『盲聾記』解説」（前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成76蔗軒日録・盲聾記』八木書店，2021年）
⑫末柄豊・田島公・牧野淳司ほか『明治大学図書館所蔵三条西家本　除目書』（八木書店，2021年）
⑬高橋秀樹「藤波家旧蔵史料の現状と伝来」（東京大学史料編纂所研究成果報告2021―８『藤波家旧蔵史料の調査･研究』，2021年）
⑭高橋秀樹「『勘仲記』を観る」（『國學院雑誌』122―11号，2021年）
⑮高橋秀樹・櫻井彦・遠藤珠紀『史料纂集　勘仲記第七』（八木書店，2021年）
⑯田中大喜「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』所収文書群の書誌的考察」（東京大学史料編纂所研究成果報告2021―８『藤波家旧蔵史料の調査・研究』，2021年）
⑰久水俊和「中世後期における天皇主宰仏事の展開―正月三仏事を中心に―」（『國學院雑誌』122―11号，2021年）
⑱久水俊和『「室町殿」の時代　安定期室町幕府研究の最前線』（編著，山川出版社，2021年）

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎家永　遵嗣　学習院大学文学部・教授
榎原　雅治　東京大学史料編纂所・教授
遠藤　珠紀　東京大学史料編纂所・准教授
小倉　慈司　本館研究部・教授
尾上　陽介　東京大学史料編纂所・教授
甲斐　玄洋　佐伯市歴史資料館・学芸員
末柄　　豊　東京大学史料編纂所・教授
瀬戸　祐規　神戸松蔭女子大学・非常勤講師
高橋　秀樹　國學院大學文学部・教授
田中　奈保　鎌倉女子学院中学校・高等学校・教諭
○田中　大喜　本館研究部・准教授
田村　　航　明治学院大学・非常勤講師
久水　俊和　明治大学・兼任講師
廣田　浩治　静岡市文化振興財団事務局・係長

湯川　敏治　学識経験者

(13) 高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究―額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に―
2021～2023年度
（研究代表者　下村　周太郎）

1．目　的

本館が所蔵する「額田寺伽藍並条里図」および「栄山寺寺領文書」は，奈良・平安時代の寺院および寺領荘園に関する同時代史料として知られ，前者は国宝，後者は重要文化財に指定されている。本研究ではデジタル技術も活用することで，両史料に関する研究基盤の構築・高度化を図るとともに，古代史・中世史双方の研究者が参画することで，古代～中世における寺院・寺領荘園の総合的・多角的研究の推進を目指す。

前者は現在の奈良県大和郡山市に所在する額田寺（現・額安寺）の境内地および周辺の寺領を，麻布に彩色で描いた絵図で，天平宝字年間（757～765）の作成とされる。奈良時代の寺院や寺領を描出する史料として極めて貴重であり，史料の乏しい当該期の寺院史・荘園史研究において積極的に活用されるべきである反面，退色や朽損が進んでおり，保護・保全への適切な配慮も求められるものである。そこで，本研究ではデジタル撮影により得られた高精細画像の公開を推進するとともに，高精細画像を活用しながら，現物では視認が困難化している記載内容の検討，絵図に用いられた顔料や麻布の自然科学的な分析，記載内容と現地景観との突合による歴史的景観の遡及的復元などに取り組む。

後者は現在の奈良県五條市に所在する栄山寺の平安期の寺領に関する史料で，特に11～12世紀（摂関・院政期）のいわゆる王朝国家段階における古代荘園から中世荘園への転換状況を示すものとして著名である。中でも，条里の坪ごとに租税の免否を確定するためになされた栄山寺と国司とのやり取りに関する一連の史料（栄山寺牒）は，古代中世移行期の荘園史研究における基本史料となっている。ただし，やはり経年の劣化が進んでおり，文字の判読に困難な箇所も生じており，特に細字の注記や朱書きなどについては改めて厳密に解読・確定していく必要がある。また，錯簡ないし断簡が疑われている史料もあり，接続関係についての慎重な検討も望まれる。本研究では，前者と同様に，デジタル撮影により得られた高精細画像の公開を推進するとともに，高精細画像を活用しながら，記載された文字・数字の分析とデータ化および記載内容と現地景観との突合による歴史的景観の遡及的復元などに取り組む。

前者は奈良時代の絵図史料，後者は平安時代の文書史料という別はあるが，いずれも古代～中世における寺院および寺領荘園の実態にアプローチしうる稀有な史料である。文化財としての適切な保存と研究資源としての積極的な活用の両立という観点から，デジタル技術を駆使した高度情報化研究による研究基盤の構築を図り，その上で古代史・中世史双方の研究者が参画し，古代から中世における寺院・寺領荘園の変容過程を断絶・連続の両面から追究することで，寺院史・荘園史研究の新段階を招来したい。

2．今年度の研究計画

「額田寺伽藍並条里図」および「栄山寺寺領文書」について，基礎的なデータの把握を行う。高精細デジタル画像の活用や原本の熟覧調査などに基づきながら記載されている文字の解読・確定とカード化や，接続関係の確認・復元を行い，得られた知見をデジタルデータ化する。「額田寺伽藍並条里図」については，印影の存在・位置を確定するとともに，顔料や墨，料紙や麻布についても科学的な分析の可能性を検討する。記載内容の確定にあたっては，現在の地形や地名との突合が有効であることから，現地調査も実施する。

3．今年度の研究経過

2021年８月に当館にて館蔵史料の熟覧調査を行った。17・18日（火・水）に「額田寺伽藍幷条里図」の調査を行い，大和国印が押されている箇所を確認・計測し，データ化した。また，24日（火）に「栄山寺寺領文書」の調査を行い，重ね書き箇所の文字の確認など刊本の校訂を行った。

11月21日（日）には，オンラインで研究会を行った。初年度ということもあり，研究対象となる「額田寺伽藍幷条里図」・「栄山寺寺領文書」および栄山寺・額田寺に関する研究状況や基礎情報について，共同研究メンバー間での認識の共有を目指した。具体的には，仁藤敦史「額田寺伽藍幷条里図の研究史」，服部一隆「免除領田制と栄山寺文書」，中島皓輝「古代栄山寺の歴史」，下村周太郎「中世栄山寺の歴史 ―文書と由緒からの概観―」，赤松秀亮「中世荘園史研究における現地調査の歩みと課題」の５つの報告を得た。

12月25～27日（土～月）には共同研究者の多くが参加して，奈良県五條市および大和郡山市での現地研究会を実施した。25日は栄山寺の境内を巡見し，26日の午前は栄山寺寺領故地を巡見し，午後は市立五條文化博物館にて寺蔵栄山寺文書の熟覧を行った。27日は，「額田寺伽藍幷条里図」に描かれている額田寺周辺を巡見した。

2022年３月21日（月）には，オンラインで研究会を行い，メンバー各自の調査研究活動の成果を共有した（東京大学史料編纂所共同研究拠点一般共同研究課題「中世大和国宇智郡関連史料の研究資源化―栄山寺を中心に―」との共催）。具体的には，鈴木景二「菅原遺跡，八角？建物についての試案」，菊地大樹「栄山寺の石造物調査について（続）」，服部光真「栄山寺関連史料調査の報告―戦国～江戸時代の聖教４点の紹介―」の３つの報告を得た。

４．今年度の研究成果

仁藤敦史『藤原仲麻呂』中公新書，2021年６月刊

５．全期間の研究成果

仁藤敦史『藤原仲麻呂』中公新書，2021年６月刊

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

赤松　秀亮　別府大学文学部・講師
坂本　亮太　和歌山県立博物館・学芸員
高木　徳郎　早稲田大学教育・総合科学学術院・教授
服部　光真　元興寺文化財研究所・研究員
山崎　竜洋　五條市教育委員会事務局・学芸員
◎下村周太郎　早稲田大学文学学術院・准教授
鈴木　景二　富山大学学術研究部人文科学系・教授
山口　英男　東京大学史料編纂所・教授
鷺森　浩幸　帝塚山大学文学部・教授
三河　雅弘　専修大学文学部・准教授
○仁藤　敦史　本館研究部・教授
三上　喜孝　本館研究部・教授
島津　美子　本館研究部・准教授
後藤　　真　本館研究部・准教授

(14) 歴博研究映像の制作・保存・活用―苧麻文化の映像記録化を中心に 2019～2021年度
（研究代表者　春日　聡）

１．目　的

本研究では，「歴博研究映像」の制作を，日本列島の歴史・民俗を記録・分析・研究する手段として位置づけ，歴博が制作してきた過去の研究映像の蓄積を活用し，新たな課題設定のもとに調査・撮影を実施して，新規の研究映像を作成するほか，それらの利活用をとおして，歴博の研究映像の成果全体の発信力を高めていくことを目的とする。

２．今年度の研究計画

初年度・２年度の成果をふまえて検討した撮影計画に基づいて現地撮影を実施する。共同研究会（年３回実施予定）で，調査・撮影の中間報告をおこなう。２年目に調査・撮影を計画していながら，コロナ禍で実施できなかった対象を含めて進めるため，３年度いっぱいかかる見込みであり，撮影対象者等への確認作業をおこないながらの編集は，共同研究終了後の令和４年度に継続して行わざるを得ない。

３．今年度の研究経過

【調査・撮影】

４月12日～24日　参加者１名（うち17日～18日は２名，面談者のべ21名），撮影対象と場所：苧麻糸生産関係者等（宮古島市）

11月20日～11月21日　参加者１名（うち20日は２名），撮影対象と場所：「文化庁 日本の技フェア」（東京都千代田区）に参加する「からむし生産・苧引き」（昭和村）関係者と「苧麻糸手績み」（宮古島）関係者
11月30日～12月３日　参加者１名（面談者のべ17名），撮影対象と場所：宮古島市下地字川満（喜佐真御嶽）における神行事，宮古島伝統工芸品センター，苧麻糸生産関係者（宮古島市）
12月11日～12月15日　参加者１名（面談者のべ８名），撮影対象と場所：苧麻糸生産関係者等（宮古島市）
１月４日～１月12日　参加者２名（面談者のべ25名），撮影対象と場所：苧麻糸生産関係者等（宮古島市），琉球大学（中頭郡西原町），琉球藍生産者（国頭郡本部町）
３月22日～３月26日　参加者２名（面談者のべ16名），撮影対象と場所：苧麻糸生産関係者等（宮古島市）
３月29日～３月30日　参加者１名，撮影対象と場所：神麻続機殿神社等（三重県松阪市），麻績神社等（三重県多気郡）

【研究会】
７月３日　10時～13時（オンラインで実施），参加者７名
内容①報告　春日聡「2021年４月におこなった調査・撮影の報告」
②討論　③今後の予定
10月31日　13時～16時（オンラインで実施），参加者７名
内容①報告　春日聡「2019～2021年までにおこなった調査・撮影資料の共有」
②討論　③今後の予定
３月19日　13時～17時（オンラインで実施），参加者６名
内容①報告　春日聡「2021年12月，22年１月の調査・撮影報告」
②報告　春日聡「研究映像『ブーンミの島』全体章立てについて」
③報告　研究映像『ブーンミの島』全体視聴
④討論　⑤今後の予定

【その他】
- 2021年５月15日　歴博映像フォーラム15「映画とアイヌ文化」
  日時：2021年５月15日（３月６日延期分）　12時50分～16時30分
- 英語版DVDの作成：『物部の民俗といざなぎ流御祈祷』（2002年度研究映像，制作担当：松尾恒一・常光徹，84分）

４．今年度の研究成果

【調査・撮影】
昨年度計画していながら，コロナ禍で実施できなかった調査と撮影を，最終年度に実施した。今年度もCOVID-19の感染状況の悪化により，夏から秋にかけての緊急事態宣言下では調査・撮影が実施できなかったため，最終年度後半に集中しての実施となった。１月４日～１月12日および３月22日～３月26日の調査・撮影には，昭和村のほか，宮古・八重山地域の苧麻文化をテーマに研究・講演・文筆活動をおこなっている須田雅子氏にインタビュアとして協力いただき，限られた時間と機会の中で，調査・撮影を進めることができた。

【研究会】
年３回実施した研究会では，研究映像を監督する春日代表を中心に，撮影素材に基づき，研究映像の編集プランの検討を進めた。10月31日の研究会では，全体の構成を検討する計画であったが，調査・撮影が最終年度後半にずれ込んだことから，粗編集が済んだ暫定版の映像（現段階で１時間25分程度）に基づき，全体の構成の検討を３月19日の研究会で実施した。その後，撮影対象者への映像の確認も済み，新規の研究映像の制作で予定していたプロセスを実施することができた。現在，暫定版をYouTube限定公開にアップロードして，共同研究員での意見交換を継続しながら，ブラッシュアップを進めている。完成映像は，2023年３月18日開催予定の歴博映像フォーラム16「ブーンミの島-沖縄県宮古諸島の苧麻文化-」で一般に公開する。

【その他】
- 歴博映像フォーラム15「映画とアイヌ文化」（2021年５月15日）において，研究映像「アイヌ文化の伝承」（2011年）を活用し，アイヌとその文化の表象の主体について検討・議論した。
- 『物部の民俗といざなぎ流御祈祷』（2002年度研究映像，84分）の英語版を作成し，来館者視聴用としてメディアルームで公開した。

５．全期間の研究成果

【研究映像の制作】

- 初年度は，研究会・調査とも，順調に計画を進め，予備撮影を進める一方，「宮古島苧麻績み保存会」に正式に調査・撮影・映像制作の協力を依頼し，次年度以降の調査・撮影の計画が具体化した。しかし，２年目以降，COVID-19の感染状況の悪化により，それらの計画をほぼ断念せざるを得ず，上述の「今年度の研究成果」の通り，最終年度に調査・撮影を実施して，ギリギリではあったが，研究映像「ブーンミの島」の暫定版をまとめることができた。
- ２年目は，宮古島での調査が実施できない中，宮古島出身の作曲家・金井喜久子（喜久子の母は，宮古上布の生産で財産を成したとされる）に関連する資料調査・映像制作を実施し，『地域・ジェンダーを超えて　金井喜久子　バダジェフスカ　聖歌』（撮影：春日聡，編集：内田順子）を制作し，2020年10月13日，YouTubeより公開した。
- また２年目には，沖縄の郷土史研究家・福地唯方が残したフィルムから，宮古島狩俣の共同体行事「ウヤガン（トゥリャーギ）」（1971年撮影）・「旧正月十八日」（1972年撮影）を記録した超劣化フィルムのデジタルによる保存・修復を，フィルムの所蔵者である那覇市歴史博物館および業者と相談の上実施し，その過程を調査・撮影した。デジタル化した映像は，地域での活用に展開していくほか，修復過程を記録した映像は編集して学会等での報告を予定している。

【研究映像の公開（海外を含む）】

研究映像『からむしのこえ』（監督：分藤大翼，撮影：春日聡，分藤大翼，編集：分藤大翼，2020年）が，東京ドキュメンタリー映画祭（2020年12月５日-12月11日，新宿 K's cinema）で上映されたほか，英語版“Voices of Karamushi”（2021年）が，下記のふたつの国際民族誌映画祭で上映されることが決まった。

German International Ethnographic Film Festival, Göttingen, Germany, May 25-29, 2022

Festival International du Film Ethnographique du Québec, Québec, Canada, May 19-22, 2022

６．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎春日　　聡　多摩美術大学・非常勤講師
　島立　理子　千葉県立中央博物館・企画調整課長
　分藤　大翼　信州大学全学教育機構・准教授
　青木　隆浩　本館研究部・准教授
○内田　順子　本館研究部・教授
　川村　清志　本館研究部・准教授
　澤田　和人　本館研究部・准教授

【共同利用型共同研究】

館蔵資料利用型

（15）南北朝時代から室町時代前期における廣橋家の漢籍環境の研究　2021年度

（研究代表者　髙田　宗平）

１．目　的

本研究は，館蔵廣橋家旧蔵記録文書典籍類（H-63。以下，廣橋本と略称）のうち，主に改元・年号勘文資料を対象とする。前近代まで廣橋本を集積･襲蔵してきた廣橋家は藤原氏北家日野流の支流であり，頼資を家祖とする。家格は名家であり，弁官･蔵人等を経て納言に至るのを通例とし，中流公家として朝廷の実務を担った。同家は儒学･有職故実・文筆を家職として，代々当主が日記を残し，年号勘申者を輩出した。また室町時代中期から後期，江戸時代には武家伝奏に補された。廣橋本には『経光卿記』『兼仲卿記』『兼宣公記』『綱光公記』等の家記が含まれており，これらは鎌倉時代から室町時代の基本史料の一つであることが広く認知されている。その他，廣橋本には日記以外の朝廷の年中行事，改元，叙位･除目等の朝廷の行事や政務に関する文書･記録も含まれている。近時，本館から『広橋家旧蔵記録文書典籍類目録』（以下，広橋本目録と略称）が刊行され，史料群としての廣橋本の全体像がわかるようになり，漸く本格的研究の基盤ができたと言える。その一方，廣橋本の改元･年号勘文資料を対象とした研究は，本館の基盤研究・共同研究「廣橋家旧蔵文書を中心とする年号勘文資料の整理と研究」（平成27年度～29年度。研究代表者：中央大学文学部･教授 水上雅晴）が組織され（申請者は参加），研究書では小倉慈司『事典 日本の年号』（吉

川弘文館，2019年）において史料として用いられているものの，未だ進んでいるとは言い難い。本研究は，上記共同研究の成果を発展的に継承し，広橋本目録や『事典 日本の年号』の成果を参考にしながら，廣橋本『年号字　新撰』（H-63-218）を研究資料の中核に据え，年号勘申者を輩出した廣橋家の南北朝時代から室町時代前期における漢籍環境について検討することを目的とする。本研究の遂行は，更に明経博士家清原氏の学問や禅林の文学活動の解明が中心の日本中世漢学研究に新たな視点を提示することにも繋がる。

２．今年度の研究計画

前述の本館共同研究「廣橋家旧蔵文書を中心とする年号勘文資料の整理と研究」において申請者が調査・検討したことを踏まえ，南北朝時代から室町時代前期における廣橋家の漢籍環境の一端の解明を目指す。具体的には廣橋本『年号字　新撰』（H-63-218）を研究資料の中核に据える。本資料は明徳５年（1394）に廣橋仲光（1342～1406）が諸漢籍から抄出し加筆した未勘申の年号勘文案の集成であろう。抄出者仲光は蔵人・弁官・蔵人頭・権中納言等を経て権大納言に至った中流公家であり，また年号を勘申している。本資料所載の年号勘文の出典は，他の年号勘文資料に比して，多くの巻数や篇名が記載されていると言う特徴があり，出典の多くが仲光の披覧し得る環境にあったと推測される。年号研究において，年号選定過程の研究はなされているが，勘申者の披覧し得た漢籍に関する研究は進んでいない。廣橋家は勘申者を輩出したが，その漢籍環境は不明である。本資料を分析することにより，勘申者仲光の漢籍環境を解明することが可能となる。その過程で兼宣（仲光男）筆『新字』（H-63-197），仲光と兼郷（兼宣男）筆『年号字』（H-63-219）等の仲光及びその近親者の筆になる資料，他の館蔵改元・年号勘文資料と比較検討する。更に仲光が披覧し得る漢籍の実態をより詳細に明らかにするため，本資料所載の年号勘文と本館，京都大学附属図書館清家文庫（京都市），宮内庁書陵部図書寮文庫（東京都千代田区），慶應義塾大学附属研究所斯道文庫（東京都港区），大東急記念文庫（公益財団法人五島美術館。東京都世田谷区），公益財団法人東洋文庫（東京都文京区）等に所蔵の漢籍古鈔本や，宋刊本等の南北朝時代までに日本に伝来の漢籍（及びその伝写本等）とを比較検討し，その相違により仲光が披覧し得た漢籍の系統や特徴が明らかになろう。併せて宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵柳原本・九条本・三条西本『元秘別録』等，西尾市岩瀬文庫（愛知県）所蔵柳原家本，京都大学総合博物館所蔵勧修寺家文書，等の公家旧蔵資料に含まれる改元・年号勘文資料とも比較検討する。以上を総合すると，廣橋家の南北朝時代から室町時代前期の漢籍環境が立体的に見えてくることが推測される。コロナの感染状況から上記の機関で資料閲覧が難しい場合，他機関所蔵の資料，デジタル画像等で代替する。

３．今年度の研究経過

周知の通り，令和元年（2019）12月に初めて新型コロナウィルス（COVID-19）の感染者が報告されて以来，令和２年（2020）度に引き続き，今年度も感染拡大抑制策として，多くの期間，緊急事態宣言ないしはまん延防止等重点措置が発出された。これに伴い，多くの研究機関の図書館及び所蔵機関で休館や外部者への利用制限が出されたり，都道府県を越える移動自粛要請等が出されたりしたため，遺憾ながら，やむを得ず，計画していた京都大学附属図書館清家文庫（京都市），京都大学総合博物館所蔵勧修寺家文書（京都市），宮内庁書陵部図書寮文庫（東京都千代田区），慶應義塾大学附属研究所斯道文庫（東京都港区），大東急記念文庫（公益財団法人五島美術館。東京都世田谷区），公益財団法人東洋文庫（東京都文京区），西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本（愛知県）等の原本調査や，図書館での資料調査・収集を断念し見送らざるを得ない事態となった。このような状況でも，幸いにも，本館の熟覧調査は可能であったため，『年号字　新撰』（H-63-218）を主とした廣橋本の改元・年号勘文資料の原本調査，紙焼き写真帳，データベースれきはく「館蔵資料データベース」登載画像のそれぞれを用いての調査に注力した。併せて，京都大学附属図書館清家文庫は「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」，宮内庁書陵部は「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」及び「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧―書誌書影・全文影像データベース―」を，その他国文学研究資料館の「新日本古典籍総合データベース」や各種影印本をそれぞれ用いて調査し，代替措置を取った。

また，研究成果公表の場として，中国の国際学会での発表も，外務省より海外安全情報（感染症危険情報）が発出されたため渡航できず，見送らざるを得なく，また適切なタイミングでオンライン開催の学会に参加する機会が得られなかった。このようなことから，本研究成果を国際学会において発表は実現し得なかった。

４．今年度の研究成果

本研究課題の成果の概要は，次の通りである。

第一に，『年号字　新撰』（H-63-218）の全体像は明らかになっていないことに鑑みて，厳密な原本調査を実施し，この調査に基づいて可能な限り原本に依拠し翻字した。翻字は研究基盤となるため，重要な第一歩と言える。まず，翻印と考察したものを学術雑誌に投稿することを計画している。

以下に，書誌事項を略記する。

年号新字（本館での登録資料名『年号字　新撰』）　廣橋仲光自筆本　〔南北朝時代〕写　一冊

袋綴装冊子本。新補錆鉄御納戸色表紙（縦　22.0×横　21.8センチメートル）。白糸。五ツ目綴。表表紙左肩に，新補題簽（縦　22.0×横　7.0センチメートル）が貼付され，「『改四四（朱筆）』『ゝ内八（代赭筆）』／年號字〈仲光卿自筆〉一冊」と墨書される。書き題簽の代赭筆「八」に抹消符を施し，右傍に「一〇」と朱筆て訂正する。なお，本書誌事項では，「／」（全角スラッシュ）は改行，「〈　〉」（全角山括弧）は双行書きを示す。現状，墨付き27丁。そのうち，現状第一丁は原表表紙である。現第一丁表（原表表紙表）の左肩に「年號字〈新撰〉」と墨筆による打付外題が書され，同中央右側に「明徳五年改元之時少ゝ又抄出書加了／権大納言藤原（花押）」と墨書される。第一丁裏（原表表紙裏）の中央部に「権中納言兼大宰権帥藤原仲光」と墨書される。現第二丁表（原第一丁表）に「年號新字」と墨書され，その下部に双行書きにて「先公御代幷下官抄出之字等書集也」と墨書される。現第二丁表（原第一丁表）に「年號新字」は原の首題である。

本文の筆跡は一筆である。本資料の本文筆跡と，本館所蔵廣橋本『年号字』（H-63-219）の本文筆跡及び同『当家代々勘申未被用字集』（H-63-199）の本文筆跡と同筆と認められる。

墨筆による返り点・送り仮名が施されている。白点・角点は認められない。

本文料紙は楮紙と推される。上欄の書入の上部が欠損していることから，本文料紙の天は裁断されたと認められる。通常よりも欄脚に余裕がないことから，本文料紙の地も裁断されたかと推される。

本資料は，「明徳五年改元之時少ゝ又抄出書加了／権大納言藤原（花押）」の墨書から，明徳５年（1394）の応永度の際に，廣橋仲光（1342～1406）が諸漢籍から抄出し加筆したものであり，仲光の自筆本と推定される。更に，「先公御代幷下官抄出之字等書集也」の墨書から，年号案が「先公」すなわち忠光の父兼綱（1315～1381）と「下官」すなわち仲光が漢籍から抄出したものが含まれていることが示されていることがわかる。

なお，本資料の書名同定には，表紙の外題「年号字　新撰」ではなく，首題である「年号新字」を採用するのも一案であろう。

第二に，散佚した『修文殿御覧』佚文の存在を提示した。『年号字　新撰』には「文康」の出典として「脩文殿御覧曰，世中稱廋文康為豊年穀王，雅恭為荒年穀。」と記され，「御覧」から「稱廋」に右傍に「巻第百六品藻下」と記される。この記載通りであれば，『修文殿御覧』巻第百六・品藻下の佚文となろう。当該『修文殿御覧』佚文と類似する文に，『世説新語』賞誉第八に「世中稱庾文康爲豊年玉，稚恭爲荒年穀。」，『藝文類聚』巻第二十二・人部六・品藻に「世説曰…。又曰，世中稱庾文康爲豊年玉，庾稚恭爲荒年穀。」，『太平御覧』巻第四四七・人事部八十八・品藻下に「郭子曰…。又曰，世中稱庾文康爲豊年玉，庾稚恭爲荒年穀。」とある。当該『修文殿御覧』佚文の特筆すべき点は，巻数・篇名が記されているところにある。今後，『修文殿御覧』の復原及び編成等を検討する上で重要な手がかりとなろう。

第三に，『年号字　新撰』所引漢籍は，唐鈔本に由来する本文を遺存することがある一方で，誤写が存することを明らかにした。

廣橋仲光周辺は『修文殿御覧』を披覧し得る環境にあり，あるいはこれを所蔵していた可能性があること，また唐鈔本に由来する本文を遺存する漢籍を披覧し得る環境にあり，あるいはこれを所蔵していた可能性があることを明らかにした。

以上は，『年号字　新撰』（H-63-218）の全体像を解明し，廣橋仲光の漢籍環境を解明する上での一階梯であり，その一部に過ぎないことは重々自覚している。

今年度は，新型コロナウィルス感染拡大に伴い，『年号字　新撰』と，原本調査に基づく漢籍古鈔本や宋刊本等（及びその伝写本等），公家旧蔵資料に含まれる改元資料との比較検討は，全体に及ばず，全体像を把捉し解明することができなかった。このようなことから，今年度中に，本研究成果の論文化に至っていない。来年度以降，新型コロナウィルス感染が減少傾向となり，原本調査を実施した上で，本研究成果を基に深化させ，論文化していく。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎　髙田　宗平　中央大学文学部・兼任講師

○　小倉　慈司　本館研究部・教授

(16) 島津氏一族発給文書の比較と島津氏関係史料の収集による中世前期武士団の研究
2021年度
（研究代表者　清水　亮）

1．目　的

近年，日本列島規模で活動する中世武家領主（≒武士団）の活動の具体相，14・15世紀をゆるやかな画期とした武家領主の活動・人的交流の変化（東国・西国の分化など）が注目されつつある。しかし，このような研究は緒についた段階であり，具体的な事例の蓄積を必要とする。

そこで本研究では，館蔵資料「越前島津家文書」を活用して上記の問題に取り組むことを課題の一つとする。「越前島津家文書」は，14世紀，播磨国に定着した島津氏の一流（同国下揖保荘地頭，島津氏の始祖忠久の庶子忠綱流）に伝来した文書群である。当該文書群を活用して，12世紀末～14世紀後半（中世前期）における島津氏一族・被官の活動を，各地の所領・鎌倉・京都という日本列島規模で把握する研究は管見の限りなされていない。

島津氏関係の文書群として，東京大学史料編纂所所蔵「島津家文書」，早稲田大学図書館所蔵「下野島津文書」，そして島津氏発給文書を伝来させた南九州の武家領主文書などがあげられる。また，『吾妻鏡』や12世紀末～14世紀中葉にいたる貴族の日記等にも島津氏の活動は見いだせる。これらの史料を収集し，上記の課題に取り組みたい。その際，当該期における島津氏の活動・行動履歴をできる限り復元できるデータベースを構築し，学界の共有財産としたい。

もう一つの課題は，中世前期の武家領主が，どのような相手にどのような大きさ・紙質の文書を使用していたのか，という問題に関わる情報の提供である。すなわち，「越前島津家文書」をふくむ島津氏一族が作成・発給した文書について，可能な範囲で繊維質の実見・撮影をふくめた原本調査を実施する。これらの調査結果の情報を上記の史料データベースに組み込むことで，島津氏一族の活動と結びつけて，彼らの文書利用のあり方を考える手がかりを提供できると予想する。そして，原本調査を実施する際，「越前島津家文書」（中世分）と関わりを持つ文書群も調査の対象とし，「越前島津家文書」自体をより深く理解する手がかりをも提供したい。

2．今年度の研究計画

①島津氏一族がその組織内で作成した史料の形態・特徴を把握するため，「越前島津家文書」のうち，越前島津家内部で作成された文書（軍忠状・紛失状等）・系図の原本調査を実施する。

②上記と同様の目的で早稲田大学図書館所蔵「下野島津文書」の原本調査を実施する。

③島津氏（とくに嫡流家）が東国御家人出身武士・国御家人出身武士に発した文書の形態について，その異同を確認するため，東京大学史料編纂所所蔵「二階堂文書」・「比志島文書」・「入来院文書」，鹿児島大学図書館所蔵文書の原本調査を実施する。

④「越前島津家文書」を所持していた新城島津家伝来文書群の一つ，「末川家文書」（鹿児島県歴史・美術センター黎明館寄託）のうち，本来「越前島津家文書」に相当する中世文書群を構成していたとされている２通の中世文書（応永５年３月16日「（越前国）興宗寺算田帳」，文安３年３月３日「伊勢貞親寄進状」），新城島津家と薩摩藩当局との間で「越前島津家文書」をやり取りした経緯を知りうる近世史料の原本調査を実施する。

⑤「越前島津家文書」を伝来させた島津氏の一流は，著名な「悪党」寺田法念や，在来領主と考えられる揖保氏と14世紀初頭頃には連携していた。東国出身の武家領主が，遠隔地所領支配を受容される契機について，近年，研究が進んでいる。このような研究の水準・方法を取り入れた現地調査によって，播磨国下揖保荘地頭家が，中世後期に当該地域に定着しえた要因を探る。

⑥上記の原本調査・現地調査と活字史料集の検索とによって，12世紀末～14世紀後半における島津一族の属性（嫡流家，分立した各家の別），活動場所（推定を含む），活動の内容，典拠，原本調査実施史料の調査データを搭載したデータベースをまとめる。データベースの作成にあたっては，可能な限り，史料画像を確認できる媒体の情報も掲載する。

3．今年度の研究経過

①第１次原本調査

〔実施日〕2021年６月17日（木）・18日（金）

〔場所〕国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）

〔調査対象〕「越前島津家文書」

②第２次原本調査
〔実施日〕2021年６月24日（木）
〔場所〕早稲田大学図書館（東京都新宿区）
〔調査対象〕「下野島津文書」
③第３次原本調査
〔実施日〕2021年11月25日（木）・26日（金）
〔場所〕東京大学史料編纂所（東京都文京区）
〔調査対象〕「二階堂文書」・「比志島文書」
④第４次原本調査
〔実施日〕2021年12月18日（土）
〔場所〕鹿児島県歴史・美術センター黎明館（鹿児島県鹿児島市）
〔調査対象〕「末川家文書」
⑤第１次写本調査
〔実施日〕2021年11月４日（木）
〔場所〕東京大学史料編纂所
〔調査対象〕「越前島津家由緒承合候日記」（島津家本）・「播磨島津家関係文書」（島津家本）

４．今年度の研究成果

「越前島津家文書」の調査では，先述したとおり，越前島津家内部で作成された文書･系図の原本調査を実施した。料紙の繊維質はデジタルマイクロスコープを使用して実見した。調査対象としたのは，第３巻・第４巻に収められた島津氏作成の軍忠状，第６巻に収められた弘安８年６月「沙弥行照文書紛失状・証判」である。いずれも巻子装であることを考慮する必要があるが，いずれも填料（おそらく米粉）・微量の黒色異物をともなう楮紙と判断した。

「下野島津文書」調査にあたっても，デジタルマイクロスコープを使用して文書の料紙を実見した。主な対象としたのは中世系図・譲状・着到状・軍忠状・申状である。「下野島津文書」も巻子装であるが，やはり填料（おそらく米粉）・微量の黒色異物をともなう楮紙が使用されていると判断した。

「末川家文書」調査では，デジタルマイクロスコープを使用して応永５年３月16日「（越前国）興宗寺算田帳」，文安３年３月３日「伊勢貞親寄進状」の２通の紙質を確認した。このうち，越前島津家が作成した可能性が高いのは，応永５年３月16日「（越前国）興宗寺算田帳」である。当該文書は薄手の楮紙で，填料（おそらく米粉）をともなっていると判断した。

以上がデジタルマイクロスコープを使用した料紙繊維質の判断結果である。「越前島津家文書」と「下野島津文書」の料紙確認の結果，14世紀頃の島津一族は，かなり類似した紙質の料紙を使用していたと判断できる。ただし，類似した紙質の料紙を使用していることから，各地の島津一族が紙入手のルートを共有していたとまでは主張できない。現状では，守護の庶子家（鎌倉時代には日本列島に荘郷あるいは村単位の散在所領を保持していた一般東国御家人クラス）が入手・使用できる料紙は上記の要素を持っていた，と見通しておきたい。

次に，文献史料の内容自体から導き出した知見を可能な範囲で示しておきたい。「越前島津家文書」所収「島津家系図」（第７巻）の原型は14世紀初め頃（1310～1320年代）の成立と考えられる。当該系図における島津氏嫡流の記載は島津貞久（道鑑，上総入道）が最後であり，かつ貞久には「三郎左衛門尉」という1320年代頃の官途のみが註記されているからである。

伊作家については，始祖の忠長（久長）が記載され，かつ彼の初名「忠長」のみが記されている。忠長が「久長」に名乗りを変えるのは正和５年（1316）８月１日とされている。またこの系図は女性を多く記載している。このことからも原系図の成立は概ね14世紀初め頃であり，その後，一部追記がなされたことを想定できる。

以上の知見から，「越前島津家文書」所収「島津家系図」の信頼性は高いと考えられる。そして当該系図における忠綱流（越前島津家につながる流れ）の記載をみると，忠綱（周防守）―忠景（常陸介）―忠宗（豊後守）―忠秀（常陸介）のみ書かれ，「越前島津家文書」を伝えた忠行（忠景の兄）―忠幹―忠藤―忠兼（周防守）の系統は省略されている。忠綱流の中で忠景流が一時優勢であったことは既に指摘されているが，13世紀末～14世紀前半まで島津忠景の子孫が名実ともに忠綱流の嫡流であったのでなないか。そして，建武政権・室町幕府の成立という事態を経て，忠綱流家督の地位が忠兼とその子孫に移動したのではないか。

「越前島津家文書」は，譲状・置文が全く見いだせないという特徴を持っている。この特質は，忠綱流の家督が大きく変動していたことと関わっている，という見通しを本研究の結果の一つとして提示したい。

また，先述したとおり，主に12世紀末～14世紀後半における島津一族の活動履歴，約900件をデータベース化した。

このデータベースから，建武政権期と1340年代には，九州に下向した島津一族と忠綱流とが京都で共同活動していたことを読み取りうる。そして，1350～60年代までは，九州島津氏・播磨島津氏（越前島津家）・下野島津氏，いずれも遠隔地所領を維持する指向性自体は持っていたと考えられる。このような指向性が縮小していく過程をふくめ，島津一族の活動形態・交流の推移に関する検討結果の詳細は，来年度以降に発表する予定である。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎清水　亮　埼玉大学教育学部・准教授

○田中大喜　本館研究部・准教授

（17）『兼仲卿記』紙背文書にみる中世伊勢神宮領荘園の研究 2021年度

（研究代表者　永沼　菜未）

１．目　的

本研究が調査・研究の対象とするのは，『広橋家旧蔵記録文書典籍類』所収『兼仲卿記』（資料番号 H-63-753-１～827）紙背文書を中心とする，伊勢神宮領荘園の関連文書である。

『広橋家旧蔵記録文書典籍類』は，国立歴史民俗博物館が所蔵する代表的な公家関係史料の一つである。広橋家は初代頼資以降文官職として朝廷実務に従事したため，歴代当主による記録・文書・典籍は各時代の政務の実態を示す豊富な内容を包含している。

なかでも勘解由小路兼仲の日記『兼仲卿記』は，鎌倉時代後期政治史を知るうえで最も重要な史料の一つである。勘解由小路兼仲は朝廷に伊勢神宮についての訴訟などを取り次ぐ神宮奉行をつとめていたことから，『兼仲卿記』本文および紙背文書に伊勢神宮ならびに同領荘園に関する史料が多く残っている。伊勢神宮領荘園の研究は，特殊な呼称や領有体系に起因する難解さに加えて，同時代史料の少なさから，検討の難しさが指摘されてきた。『兼仲卿記』は，日記本文に神宮にかかわる記述が多いことに加え，紙背にも神宮関連文書の正文が多く残されており，右の課題にこたえる特性を有した史料である。

すなわち『兼仲卿記』本文および紙背文書は，伊勢神宮領荘園について検討するための一次史料であるという点において重要な意義をもつ。本研究では，伊勢神宮が中世を代表する権門神社の一つとしてどのように朝廷の裁判に接続し，荘園経営をおこなっていたのかということを明らかにすることを目的として研究を進めた。

２．今年度の研究計画

『兼仲卿記』紙背文書をとりまく史料環境は，勘仲記裏文書の会による『国立歴史民俗博物館研究報告』史料研究に代表される校訂・読解が進んだことにより飛躍的に向上した。今後の課題は，新たに整理された史料環境のなかで，歴史像をいかに描くかという段階に移ったといえる。とはいえ，『兼仲卿記』の料紙や墨色など原本からしかわからない情報を精査することはなお必要性が高く，本研究も原本調査が大きな位置を占める。

加えて，『兼仲卿記』を含む『広橋家旧蔵記録文書典籍類』という史料群全体を対象に伊勢神宮関係史料を網羅的に検出することによって，広橋家に蓄積された伊勢神宮関係史料の性格を解明する。

上記の基礎的な作業を通して，中世伊勢神宮による荘園経営についての研究のフィールドを整えることを目指した。

３．今年度の研究経過

本研究を，以下の手順に沿って進めた。まず，本館所蔵の『兼仲卿記』写真帳を閲覧し，伊勢神宮領荘園の関係史料の読解を進め，紙背文書の構成や内容について整理した。

つぎに，『広橋家旧蔵記録文書典籍類目録』を参照し『広橋家旧蔵記録文書典籍類』全体のなかから伊勢神宮領荘園にかかわる記録および紙背文書を有する史料を抽出した。本研究の対象となる文書の年記は鎌倉・南北朝期だが，史料を探索する際には調査対象を院政期から戦国期までと設定し，遺漏のないよう努めた。

このほか，館外所蔵の広橋家関係史料である下郷共済会文庫所蔵「広橋文書」「藤波文書」の調査をおこなった。本来であれば所蔵先において調査をおこなうべきだが，新型コロナウイルスの感染拡大によって叶わず，東京大学史料編纂所で写真帳を閲覧した。

2021年９月，第53回古文書学会大会にて「伊勢神宮膝下領荘園と在地寺院」という題目で研究発表をおこなった。この研究発表では，報告者の2020年度共同利用型共同研究の成果に加え，今年度における上記の文書閲覧の成果も

取り入れている。発表の内容は現在研究論文として成稿中であり，完成次第『古文書学研究』に投稿予定である。

12月11日から14日にかけて，三重県において調査をおこなった。11日は，史料環境の充実を図ることを目的として，三重県総合博物館（津市）において自治体の文化財担当部署や図書館が保管している地図および絵図等を探索した。

12日から14日は，中世以降の歴史地理的情報の分析を通して『兼仲卿記』紙背文書が示している伊勢神宮領荘園の関連訴訟が朝廷へ持ち込まれた事例の社会的背景を検討するため，現地調査をおこなった。12日には津市内の旧伊賀街道沿いの伊向神田および伊勢街道沿いの焼出御厨故地，13日は津市から伊勢市へ移動し，泊浦，河田，光明寺，14日は内城田郷，岩出，中須荘故地を対象に，史料記載地名の比定，地域住民への聞き取り，地形の調査をおこなった。

ついで12月，２月，３月にわたり，写真帳閲覧で得た所見をもとに『兼仲卿記』，「頼資卿熊野詣記」（H-63-65），「大仁王会記　嘉禄度」（H-63-72），「革命諸道勘文　永徳度」（H-63-140），「頼資卿改元定記　貞永・天福・文暦・嘉禎」（H-63-240），そのほか『広橋家旧蔵記録文書典籍類目録』未収分である「八省御斎会部類記」（H-63-994），「大仁王会部類記」（H-63-995），「春日経供養家記抄」（H-63-996）の熟覧と撮影をおこなった。

４．今年度の研究成果

中世伊勢神宮領荘園のうち直轄領支配については，早くから研究が蓄積されてきた。一方で近年，神宮と所領の間に神宮機構外他者が介在する土地所有形態についての研究が進展している。たとえば，伊勢国安東郡常供田（伊勢神宮祭祀料田）の支配には，伊勢神宮と在地を結ぶ中間的存在が不可欠であることが明らかとなり（鎌倉佐保「伊勢神宮領常供田の収納の実態と郡支配」，同『日本中世荘園制成立史論』塙書房，2009年），東海地域伊勢神宮領では，他権門との「相互扶助」による支配が中世後期まで継続しておこなわれていたことが指摘されている（湯浅治久「室町期駿河・遠江の政治的位置と荘園制」，阿部猛編『中世政治史の研究』日本史史料研究会所収，2010年，同「室町期都鄙間交通と荘園制・在地領主」，木村茂光・湯浅治久編『旅と移動』竹林舎所収，2018年）。今後は，神宮機構による直轄支配のほかに，重層的な土地所有形態についての実態研究を積み重ねることが必要となるだろう。

今年度の調査の結果，『広橋家旧蔵記録文書典籍類』のなかに，報告者が2020年度に共同利用型共同研究「中世伊勢神宮領荘園の総合的研究」で検討対象とした『田中穣氏旧蔵典籍古文書』（H-743）所収「大神宮法楽寺領文書紛失記他四通」に記載される伊勢神宮領荘園の関連史料が残っていることが確認された。大神宮法楽寺とは，度会郡内城田郷棚橋（現三重県度会郡度会町）に所在した伊勢神宮へ法楽を奉仕する寺院である。法楽寺領のなかには神宮領または同領域内に所在するものがあり，それらは神宮領としての性格を保持しながら，法楽寺領として伝領されていた。法楽寺の事例は，伊勢神宮領荘園の重層的な土地所有の一例とみることができる。

法楽寺領内の神宮領をめぐる紛争が生じた際，その解決は祭主裁判および朝廷裁判に委ねられたため，法楽寺領関連史料が朝廷実務を歴任した広橋家に伝来したと考えられる。報告者の令和２年度共同利用型共同研究の成果と今年度の研究を通して得た関連史料の検討結果とをあわせて検討すれば，伊勢神宮が中世を代表する権門神社の１つとしてどのように朝廷の裁判に接続し，荘園経営をおこなっていたかという点を解明することが可能となるだろう。今後なるべく早く成果を論文化し，館蔵資料活用の一例として史料群の価値を示したい。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎永沼　莱未　本館資料整理等補助員，東京大学史料編纂所学術専門職員

○荒木　和憲　本館准教授

（18）歴史資料画像と言語表現の対応の学習 2021年度

（研究代表者　森　信介）

１．目　的

２．今年度の研究計画

３．今年度の研究経過

４．今年度の研究成果

5．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

(19) 日記資料から読み解く高等女学校生の戦争および敗戦経験の検証 2021年度

（研究代表者　田中　祐介）

1．目　的

本研究では，2020年度共同利用型共同研究「戦時期の女子学生日記の分析に基づく庶民の戦争体験の再検証」（代表者・田中祐介）の成果を踏まえ，国立歴史民俗博物館が所蔵する戦時期・占領期の女子学生日記（H-965-802）の分析をさらに多角的におこなうことを目的とする。日記の書き手は，戦時下に国民学校を卒業し，倉敷高等女学校生として過ごした。1941年９月15日から1949年４月27日までの計12冊の日記が残されており，太平洋戦争の開戦から敗戦，戦後の混乱期までを含む。この日記は，銃後の学校生活を知るための貴重な手がかりであると同時に，思春期に戦争と敗戦を経験した一人の庶民の感情，思考，および時局認識を知るための貴重な史料である。

本研究が対象とする日記の量が膨大なため，前年度に引き続き，代表者の田中祐介，館内担当教員の三上喜孝に加え，大学教員，大学院生，豊富な読み解きの経験を有する市民からなる読解班を組織し，読解と分析を深化させる。今年度は戦局が一層悪化する昭和18年度以降から敗戦直後までの日記を中心に考察する。その際，申請者等の問題意識に基づき，日記の史料的意義はもとより，日記帳の枠組や使用法（「モノとしての日記」），読者＝点検者（教員）を前提とした自己表象のありかた（「行為としての日記」）をも考察の範疇に含め，重視する。

加えて，申請者が管理運営する「データベース　近代日本の日記」（https://diaryculture.com/）を活用しながら，同時期に綴られた他の学生生徒日記の所感や経験と比較検証する「ならべ読み」（併読）の可能性を探る。これにより，日記の書き手の経験の個別性と一般性を吟味しながら，戦争経験者が不在となる遠くない未来を見据え，戦争・敗戦経験を複眼的に記録，継承するための方法的視座を探る。

2．今年度の研究計画

日記読解班による研究会を定期開催し，翻刻と分析を進める。読解班には，2020年度から継続して，岡田林太郎氏（みずき書林代表），河内聡子氏（東北工業大学講師），後藤杏氏（埼玉大学大学院），島利栄子氏（女性の日記から学ぶ会代表），徳山倫子氏（日本学術振興会特別研究員PD）の協力が見込まれる。すでに読解に必要なメモ撮影は完了しているが，研究の過程で現物確認が必要な場合，国立歴史民俗博物館に赴き，調査をおこなう。

読み解きの成果は，本研究の中間報告として国立歴史民俗博物館の館内または館外で報告する（９月）。そのうえで複数の論点を定めて日記を精読し（12月末まで）。その成果を報告する（2022年２月）

日記の精読に並行して，論点を多角的に検証すべく，同時期に綴られた複数の日記を参照し，「ならべ読み」により，三宅の日記の史料としての可能性を探る（2022年１月末まで）。例えば，1944年２月５日の三宅昌子日記には，「マーシャル諸島方面」に「めざましい戦果があがってゐた」とするニュースを綴っている。しかし同時期にマーシャル諸島（ウォッチェ島）に赴任していた日本兵・佐藤冨五郎の日記（大川史織編『マーシャル，父の戦場』みずき書林，2018年に翻刻所収）には，このとき米軍による壊滅的な打撃を受けたという，全く異なる現地での状況が綴られている。メディア報道による銃後の時局認識と，戦場の実態とのギャップは，「ならべ読み」が明らかにし得る事実の一例として，興味深い。本研究では，このような「ならべ読み」の可能性を探りたい。

なお，研究対象とする史料が日記という個人文書であることに鑑み，個人情報の取り扱いについては申請者の責任において慎重に考慮し，読解班に徹底するとともに，必要に応じて館内担当教員と相談の上で対処する。

3．今年度の研究経過

2020年度共同利用型共同研究「戦時期の女子学生日記の分析に基づく庶民の戦争体験の再検証」の成果を踏まえ，戦時期・占領期の女子学生日記（H-965-802）を読み解くオンライン研究会を月１回の頻度で開催した。研究会を構成するのは田中祐介（研究代表者，明治学院大学専任講師，三上喜孝（館内担当教員，国立歴史民俗博物館教授），岡田林太郎（みずき書林代表），河内聡子（東北工業大学総合教育センター講師），後藤杏（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程），島利栄子（「女性の日記から学ぶ会」代表），徳山倫子（日本学術振興会特別研究員PD）である。

2021年年４月から2022年２月まで，オンライン研究会を計９回開催し，日記の書き手である高等女学校生の1943年４月から1945年６月末までの日記の翻刻が完了し，検索可能な形でデータ化（Excel）することができた。これは日記の書き手が高等女学校の２学年進級時から最高学年である４学年の在籍時にあたる。敗戦を迎える1945年７

月から８月の日記は欠落しているため，（2020年度）の共同研究の成果とあわせ，本年度の研究活動により，太平洋戦争の敗戦前の日記の翻刻が全て完了したことになる。

毎回の研究会に際しては，日記読解の助けとなる「語句調査」の報告を設け（後藤杏担当），報告を踏まえた討議により得られた知見や更なる要検討事項を含め，翻刻データに統合した。また研究会以外には，メーリングリストによる情報交換を積極的にはかり，日記読解を深める助けとした。

新型ウイルスの感染規模が縮小したことから，今年度は調査出張も実施することができた。2021年11月３日および４日にかけて，三上喜孝，岡田林太郎，徳山倫子，田中祐介が東京都青梅市に出張し，「夢の図書館」が所蔵する戦時下の児童向け科学雑誌を調査した。本研究が取り扱う少女の日記には，科学知識を得ることの重要性を学校で学び，授業課題の一環として飛行機の模型を作成するといった記述が散見された。「夢の図書館」での調査では，戦時下に発行された『アサヒグラフ』『科学朝日』『学生の科学』『航空少年』『子供の科学』の紙面をつぶさに検討し，当時の子供たちにどのような文脈で科学知識が与えられたか，また科学技術に接する身近な機会として，グライダー模型の制作がいかに教育に取り入れられたかを確認することができた。有益と判断した記事は同館の許可を得て撮影し，今後の調査に活かすべくまとめて保管した。

４．今年度の研究成果

2020年度共同利用型共同研究「戦時期の女子学生日記の分析に基づく庶民の戦争体験の再検証」の成果を踏まえ，戦時期・占領期の女子学生日記（H-965-802）を読み解くオンライン研究会を月１回の頻度で開催した。研究会を構成するのは田中祐介（研究代表者，明治学院大学専任講師，三上喜孝（館内担当教員，国立歴史民俗博物館教授），岡田林太郎（みずき書林代表），河内聡子（東北工業大学総合教育センター講師），後藤杏（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程），島利栄子（「女性の日記から学ぶ会」代表），徳山倫子（日本学術振興会特別研究員PD）である。

１年間の研究会活動により，日記の書き手である高等女学校生の敗戦直前まで（1943年４月から1945年６月末まで）の日記の翻刻が完了し，検索可能な形でデータ化（Excel）することができた。翻刻データには，読解に不可欠な語句調査の成果も盛り込んだ。日記の読解を通じ，戦時下の学校生活や勤労動員の実態が明らかになるとともに，戦況が次第に悪化する中で思春期を迎える書き手の自意識と戦時意識の検証を深めることができた。また，「夢の図書館」（東京都青梅市）に出張し，関連する史料調査を実施することができた。

本研究の成果の一部は，田中祐介「制度化された近代日記の読み解き方　近代日本の『日記文化』を探究する」（『REKIHAKU　日記がひらく歴史のトビラ』国立歴史民俗博物館，2021年６月），および田中祐介「『日記文化』を掘り下げ，歴史を照射する」（田中祐介編『無数のひとりが紡ぐ歴史　日記文化から近現代日本を照射する』）で公開した。研究活動により蓄積されたデータは，関連する参考情報とともに，今後のさらなる研究活動のために活用ができるよう整備が済んでいる。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎田中祐介　明治学院大学教養教育センター・専任講師

○三上喜孝　本館研究部・教授

（20）洛中洛外図屏風を用いたAR環境教育キット作成に向けた探索的調査 2021年度

（研究代表者　堀　さやか）

１．目　的

本研究では，洛中洛外図屏風に書かれている人物（特に，鴨川周辺にいる人物）を抽出し，当時の水辺周辺の生活様式を知ることで，その行動の意味と歴史的背景についての学術的情報及び，データ収集を行う。洛中洛外図屏風には，戦国時代の京の町の景観が活き活きと描かれている。研究代表者は水ガバナンスを専門としているが，日本の水環境教育が進まない現状に苦慮してきた。水を飲むことが当たり前すぎて，自分たちが飲んでいる水がどこから来ているのか，知らない子供が増えていることに驚く。例えば，京都は，滋賀の琵琶湖から，京都，そして大阪へと流れている水を飲料水としていることを知らない。鴨川で漁をしていた過去も知らない。自然に無関心なのである。諸外国では，地元の水がどこから来ていて，過去，どのように管理されてきたのかを教育し，環境政策を考える際に，一般人でも，ある程度の基礎知識があり，円滑な政策議論につながることが多い。そこで，日本独自の環境教材があっても良いのではないのかと考え，具体的には歴博所蔵資料である洛中洛外図屏風の画像データ（可

能であれば高精細画像データ）を用いて，本屏風から，当時の水周辺の生活を中心として，自然と共存する人々の姿を抽出する。加えて，その行動の生活習慣を理解し，現在の位置情報を推定し，そこに行けば，当時を体感できる，ARの技術を用いた環境教育の作成に必要なデータを収集し，資料を整理することを目指す。

２．今年度の研究計画

研究計画は，（１）まず，洛中洛外屏風図のデーターベースから，鴨川周辺にいる人物から，当時の鴨川周辺にいる人物及びその行動に着目し，人物の選定及び，データの抽出を行う。（２）その後，抽出した人物の現在の地理的な位置情報を大まかに把握する。同時に，京都鴨川周辺での現地調査を実施する。（３）洛中洛外図屏風の全体データ（高性能細画像データ）と地図情報を照会し，これらの位置関係をより正確に照合する。（４）選別した人物の動きから，当時の歴史的背景を踏まえて，環境教育の観点から情報整理を行う。当該資料は，重要文化財に指定されており，次世代に引き継がれるべき歴史的資料であるため，現物に関してのアプローチは最小限とする。本研究で得たデータと情報を用いて，将来的には，現在の周辺場所に行けば，洛中洛外図の人物を視覚体感できる，AR（拡張現実）技術を用いた環境教育の作成を目指す。その為，この一年では，それを可能にする元データの抽出及びを情報整理目指す。AR（Argmented Reality）は，スマートフォンやARガラス越しで見ると，現実世界にナビゲーションや３Dデータ，動画などのデジタルコンテンツが出現し，現実社会に情報を不可してくれる技術である。

３．今年度の研究経過

まず，洛中洛外図屏風（歴博甲本）に描かれている鴨川周辺の人物の動作に着目し分類分けを行なった。「場所と人の関係」,「川と人の関係」,「水に関連する動作や描写とその意味」等に着目し，教材として利用できる人物や場所を選定した。

次に，これらの人物像を現代の現実空間に再現する映像編集及びそのVR技術の習得と映像再現を実施した。当初はVRゴーグルを用いた３D映像による再現映像を編集していたが，蔓延防止措置が解除されない状況下，不特定多数の被験者にVRゴーグルを装着してもらうことに対する衛生不安から，これを断念し，ARによる展示に変更することとした。

さらに，どのように被験者に情報提供するのかというインターフェースについての検討を実施し，環境に優しい展示，ペーパーレス展示を目指した。

最後に，１年の研究の総括として，３月25日から27日の３日間（計21時間）に渡り，京都鴨川周辺にある図書館のスペースを借りてARによる実装実験を実施した。

４．今年度の研究成果

今年度の研究の最終段階である実装実験では仮想美術館があるとした仮想環境を作り実験参加者を募り，６箇所のスポットに行って自身の携帯をかざすと，洛中洛外図屏風の風景が現れるというAR体験をおこなった。

また，インターフェースの検討では，パンフレットに見立てたホームページを作成し，展示の解説から実装体験まで，こどもでも簡単に体験空間に入っていける自然なインターフェースを画面上で作成し，コロナ禍の現状に対応できる工夫が実現し得た。

コロナ禍の行動制限のかかる中で，実装実験に参加した人数はかならずしも多くはなかったが，人々が日頃過ごしている鴨川界隈の中世の姿を拾い上げることで，水について，川について，改めて考え，現代の水環境保全につながるメッセージを絵画からよみとるという所期の目的をある程度果たすことができ，水資源環境教育教材として水資源と人類の軌跡を追っていくストーリー構築への手ごたえを得た。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎堀さやか（大阪大学 大学院工学研究科　助教）

○大久保純一（本館情報資料研究系　教授）

分析機器・設備利用型

(21) 鉛同位体比分析から古代東アジアにおける馬具生産技術を明らかにする 2021年度

（研究代表者　村串　まどか）

１．目　的

福岡県古賀市・船原古墳（６世紀末～７世紀初頭）から出土した多くの副葬品の中でも，本研究で着目したガラス装飾付辻金具・雲珠はこれまで日本国内で発見例はなく，韓国慶州の金冠塚や鶏林路14号墳などに類例があることから，新羅製品との関係性が推測される。この装飾に用いられたガラスは，九州歴史資料館の調査によって鉛ガラスであることがわかっている。鉛ガラスは，古くは中国で生産されていたが，朝鮮半島では７世紀初頭，日本でも７世紀後半には鉛ガラスの一次生産が行われていたと考えられている。また，近隣の福津市・宮地嶽古墳（７世紀前半）から出土した鉛ガラスは，鉛同位体比分析の結果から朝鮮半島産原料の利用が考えられている。このような東アジアにおける鉛ガラスの動向から，ガラス装飾付辻金具・雲珠は船原古墳の馬具の生産や系譜に関する重要な情報を持つ資料であると言える。本研究では，本資料と共伴した馬具を対象に，鉛同位体比分析による原料の産地推定から，その歴史的背景を考察することを目指した。

２．今年度の研究計画

本研究は，［１］蛍光X線分析による事前調査と［２］鉛同位体比分析による本調査の２段階に分けられる。昨年度までに行った［１］事前調査では，計47点の出土資料について組成的な特徴を把握し，その結果を受けて研究協力者らと協議の結果，鉛同位体比分析対象資料の選出まで行った。この選定作業を受けて対象としたのは，ガラス装飾付辻金具・雲珠の他に，杏葉や馬鈴である。本年度は［２］鉛同位体比分析による本調査として，九州歴史資料館にてサンプリングを行い，国立歴史民俗博物館にて鉛同位体比分析の実施を計画した。

３．今年度の研究経過

［１］事前調査は2020年７月，資料を保管する九州歴史資料館にて実施し，その結果をもとに桃﨑祐輔教授（福岡大学文学部）や古賀市担当者らと協議した。協議の結果，対象候補としてガラス装飾部分（ガラス試料）は５点，ガラス以外の金属部分（金属試料）は９点の資料を選出するところまで実施済みである。本年度は選定した資料の［２］鉛同位体比分析を進めた。鉛同位体比分析は微量ではあるが破壊分析になるため，古賀市の指導委員会で審議を経てガラス試料，金属試料ともに脱落した資料からの分析を実施した。齋藤教授のご協力のもと，2021年11月，九州歴史資料館にてサンプリングを実施した。サンプリングの際には事前に古賀市の担当者によって破片を選定していただき，そこから微量のサンプルを採取した。最終的にガラス試料は５点分，金属試料は８点分採取し，計13点に対して鉛同位体比分析を実施した。測定には国立歴史民俗博物館内の高分解能マルチコレクタICP質量分析装置（MC-ICP-MS：NEPTUNE PLUS）を用いた。このうち，鉛の量が少なかったため鉛同位体比が得られなかった１点をのぞく12点（ガラス試料５点，金属試料７点）の鉛同位体比データを得ることができた。

４．今年度の研究成果

鉛同位体比分析の結果，ガラス試料については５点がそれぞれ近い値を示し，原料採取地が共通している可能性が考えられる。また，前出の宮地嶽古墳，朝鮮半島・百済の益山王宮里遺跡や弥勒寺址から出土したガラスおよびガラス生産関連遺物の鉛同位体比と同様の領域に位置した。これらの原料採取地は朝鮮半島と考えられており，船原古墳の馬具装飾に使われたガラスも朝鮮半島産原料が用いられた可能性が考えられる。

金属試料についてはガラス装飾付辻金具と杏葉はA領域（華北の鉛）に，馬鈴はB領域（華中～華南産の鉛）の近くに位置した。ガラス装飾付辻金具と杏葉は馬具の組み合わせとしてセットになるものであり，この２点が近しい値を示したことは興味深い。一方，馬鈴のデータが位置する領域は，華中～華南産か朝鮮半島産か判断が難しいところであり，これについては今後共同研究者らと考古学的な解釈を踏まえて考察を進めていく必要がある。

［２］鉛同位体比分析による本調査の結果を今年度内に出すことができ，本研究の目標を達成しつつある。今後は鉛同位体比分析の結果を受けて，船原古墳の性格や当時の社会動向などから，総合的に解釈・検討していきたい。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎村串まどか　筑波大学人文社会系・学振特別研究員

○齋藤　努　本館研究部・教授